

若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

小町一丁目 333 番 15 地点

例 言

1. 本報告は、鎌倉市小町一丁目 333 番 15 地点において実施した若宮大路周辺遺跡群（鎌倉市 No.242）の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は平成 22 年 6 月 9 日から同年の 7 月 23 日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査の対象面積は、22.5㎡である。
3. 発掘調査体制は、以下のとおりである。
主任調査員 押木弘己（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
調査員 岡田慶子（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
作業員 安達越郎、田島道夫、丹野正弘
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
整理作業参加者 岡田慶子、押木弘己、本城 裕（鎌倉市文化財課 臨時的任用職員）
秋田公佑、天野隆男、串田健一、倉澤六郎、高橋こう子、松岡信喜
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告では世界測地系（第 IX 系）の国家座標軸に基づく測量成果を掲げたが、平成 23 年 3 月 11 日以前の測量基準点を基に測量・作図したため、座標値は東日本大震災後の地殻変動に対応した補正值となっていない。
5. 本報告の執筆と編集は、押木が行った。
6. 本報告で使用した写真は、現地・出土遺物とも押木が撮影した。
7. 本報告の作成に当たり、出土遺物の年代観などについて次の諸氏からご教示を賜った（五十音順、敬称・所属先略）。
池谷初恵、伊丹まどか、齋木秀雄、佐々木健策、汐見一夫、霜出俊浩
8. 本調査に係わる出土遺物および各種記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。本調査地の略称は市教育委員会の統一基準に従って「WA1003」とし、出土品への注記などに使用した。

本文目次

第一章	遺跡の位置と歴史的環境	305
第二章	調査の方法と経過	307
第1節	調査に至る経緯	
第2節	調査の方法	
第3節	調査の経過	
第三章	基本土層	308
第四章	発見された遺構と遺物	309
第1節	検出遺構	
第2節	出土遺物	
第五章	調査成果のまとめ	325

挿図目次

図1	調査地の位置	306	図11	中世上層出土遺物②	317
図2	調査区配置図	307	図12	中世上層出土遺物③	318
図3	中世上層の遺構	310	図13	中世上層遺構3出土遺物①	319
図4	中世上層遺構3土留め材	310	図14	中世上層遺構3出土遺物②	320
図5	中世上層遺構9	311	図15	中世上層遺構3出土遺物③	321
図6	中世下層の遺構	312	図16	中世上層遺構8出土遺物	322
図7	調査区セクション図	313	図17	中世上層遺構9出土遺物	322
図8	表土など出土遺物①	314	図18	中世下層遺構4出土遺物①	323
図9	表土など出土遺物②	315	図19	中世下層遺構4出土遺物②	324
図10	中世上層出土遺物①	316	図20	下層南北溝(遺構4)の推定展開図	327

表目次

表1	審計測値分布	324	表3	出土遺物観察表	331
表2	出土遺物カウント表	328			

図 版 目 次

<p>図版 1…………… 339</p> <p>① 現地調査前（南西から）</p> <p>② I 区表土掘削状況（南西から）</p> <p>③ I 区中世上層 遺構 3（南から）</p> <p>④ 同上 板材検出状況（北東から）</p> <p>⑤ 同上 杭列検出状況（北東から）</p> <p>⑥ I 区中世上層 遺構 3 完掘状況（北から）</p> <p>⑦ 同上（北東から）</p> <p>図版 2…………… 340</p> <p>① I 区中世下層 遺構 4（北から）</p> <p>② 同上（南から）</p> <p>③ I 区中世上層 遺構 3 断面（南から）</p> <p>④ I 区 遺構 3 - 遺構 4 間の切り合い（南から）</p> <p>⑤ II 区表土掘削後 凝灰岩切石出土状況（北から）</p> <p>⑥ I 区中世上層 漆器皿塗膜 出土状況</p> <p>⑦ I 区中世上層出土 漆器皿塗膜</p> <p>図版 3…………… 341</p> <p>① II 区 遺物包含層除去後（北から）</p> <p>② II 区中世上層 遺構 3（北から）</p> <p>③ II 区中世上層 遺構 3 護岸材検出状況（北東から）</p> <p>④ 同上（東から）</p> <p>⑤ II 区中世上層 遺構 3 護岸材下 六器出土状況（北西から）</p> <p>⑥ 同上（西から）</p> <p>⑦ 同上・アップ（西から）</p>	<p>図版 4…………… 342</p> <p>① II 区中世上層 遺構 9 ・下層 遺構 4 検出状況（北東から）</p> <p>② II 区中世上層 遺構 9 調査区西壁断面（東から）</p> <p>③ II 区 南壁断面（北から）</p> <p>④ II 区 北壁断面（南から）</p> <p>⑤ II 区中世上層 遺構 9 土台材（南から）</p> <p>⑥ II 区中世下層 遺構 4 西岸断面（南東から）</p> <p>⑦ II 区中世下層 遺構 4 調査区南壁断面（北から）</p> <p>図版 5…………… 343</p> <p>① II 区中世上層 遺構 9 土台材アップ （東から）</p> <p>② II 区中世上層 遺構 9 調査区西壁断面</p> <p>③ II 区中世上層 遺構 9 調査区南壁断面</p> <p>図版 6 出土遺物…………… 344</p> <p>図版 7 出土遺物…………… 345</p> <p>図版 8 出土遺物…………… 346</p> <p>図版 9 出土遺物…………… 347</p> <p>図版 10 出土遺物…………… 348</p>
--	---

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

若宮大路周辺遺跡群は鎌倉低地の中心部を占め、史跡若宮大路を挟んで東西に展開している。遺跡の南限は県道鎌倉・葉山線で、西は今小路に、東は滑川および小町大路（道路名はともに現在の通称）で限られている。細かな地形差はあるが、概ね滑川とその支流群の沖積作用によって形成された泥質平野に立地し、東西 650 m、南北 900 m ほどの広がりを持つ。鎌倉の中心市街地を占めることから開発行為に伴う発掘調査例は多く、現在までに 160 件近くを数える。個々の調査は狭小な面積を対象にした事例が多く遺跡全体の様相については未だ解明途上にあるが、概して若宮大路二ノ鳥居以北では武家屋敷を窺わせる様相が強く、一方の南側では 13 世紀中頃以降、倉庫に比定される竪穴建物群の展開が顕著となる傾向が把握されている。

今回の調査地点は遺跡範囲の東側、小町大路の西に位置し、道路を挟んだ南には本覚寺が所在する。本覚寺は元々この地にあった天台宗夷堂を一乗日出が日蓮宗に改めたのがおこりで、開創は永享八年（1436）という。現在も小町大路沿いから大町地区にかけては同宗の寺院が非常に多く分布している。

遺跡名にもなっている若宮大路は寿永元年（1182）三月、源頼朝が妻政子の安産を願って自らの指揮のもと造成し、以後鶴岡八幡宮への参詣道として都市鎌倉の基軸線となる。ただ、その神聖性から日常の交通路ではなく、その役割は東西に並走する小町大路や今小路（の前身）が担っただろうとする見方が通説的な理解であり、小町大路については滑川の水運機能とも関連付けて都市内の流通・経済的要路といった評価もなされている。現行の小町大路は史料解釈により「小町大路」または「町大路」という名称であったと考証され、後者の場合、本覚寺門前の夷堂橋以北と以南とで「小町大路」「大町大路」と呼び分けていた可能性も指摘されている。関連研究については馬淵和雄氏が詳しく論及しているので参照されたいが（馬淵ほか 2007）、歴史名称としての「小町大路」は、未だ範囲の確定に至っていないのが現状である。

若宮大路沿道の調査では大路の側溝が検出され、東西の両側溝とも開削当初は素掘りであったものが木組み護岸をもつ構造へと変化することが確認されている。小町大路沿いでも複数の調査地点で中世の南北道路面やこれに伴う道路側溝が発見され、現在の小町大路が中世まで遡及することを明らかにしている。このうち西側溝については初め素掘りであったものが木組み護岸、次いで凝灰岩切石積みまたは泥岩塊積みへの改変が把握されているが、今のところ東側溝での護岸施設検出例はない。素掘り段階の西側溝は非常に大規模であったことが本地点（図 1-1）や地点 3～5 の調査内容から窺い知れるが、現時点では幅や路面からの深さなど、全体の規模や断面形の把握には及んでいない。今後、開削～存続期間を含めた実態の解明が期待される。

【引用・参考文献】

高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』 鎌倉市

田代郁夫 1998「大町大路と小町大路—中世都市の中の「町」と「路」—」『湘南考古学同好会会報 73』 湘南考古学同好会

馬淵和雄ほか 2007「若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 小町二丁目 402 番 9 ほか地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23 (第 2 分冊)』 鎌倉市教育委員会



図1 調査地の位置

【図1に番号を付した調査地点と所収文献】

1. 小町一丁目 333 番 15 (本地点)
2. 小町一丁目 332 番 2 : 『貿易陶磁研究 No.28』 (原 廣志 2008)
『第 18 回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』 (山口正紀 2008)
3. 小町一丁目 329 番 1・10 : 『若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 発掘調査報告書』 (宮田 眞・滝澤晶子・安藤龍馬 2014)
4. 小町一丁目 331 番 1 : 『第 23 回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨』 (松吉里永子・山口正紀 2013)
5. 小町一丁目 325 番イ外 : 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10 (第 3 分冊)』 (佐藤仁彦・小林重子 1994)
6. 小町一丁目 322 番 : 『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』 (宮田 眞・森 孝子・高野昌巳・滝澤晶子 1997)

第二章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は個人専用住宅の建設に伴う事前調査として、鎌倉市教育委員会（市教委）が実施した。建築計画では基礎工事として現地表下3.5 mまでの柱状改良を伴うことから、市教委は平成21年12月8日・9日の二日間、埋蔵文化財の確認調査を実施した。この結果、地表下76cmで中世の遺物包含層が、地表下96cm、100cm、165cmでは中世の遺構面と見られる堆積層が確認された。さらに地表下200cmより下位にも中世遺構の存在を予測させる結果が得られたことから、建築計画の実施に先立ち本格的な発掘調査を実施する必要があるとの判断に至った

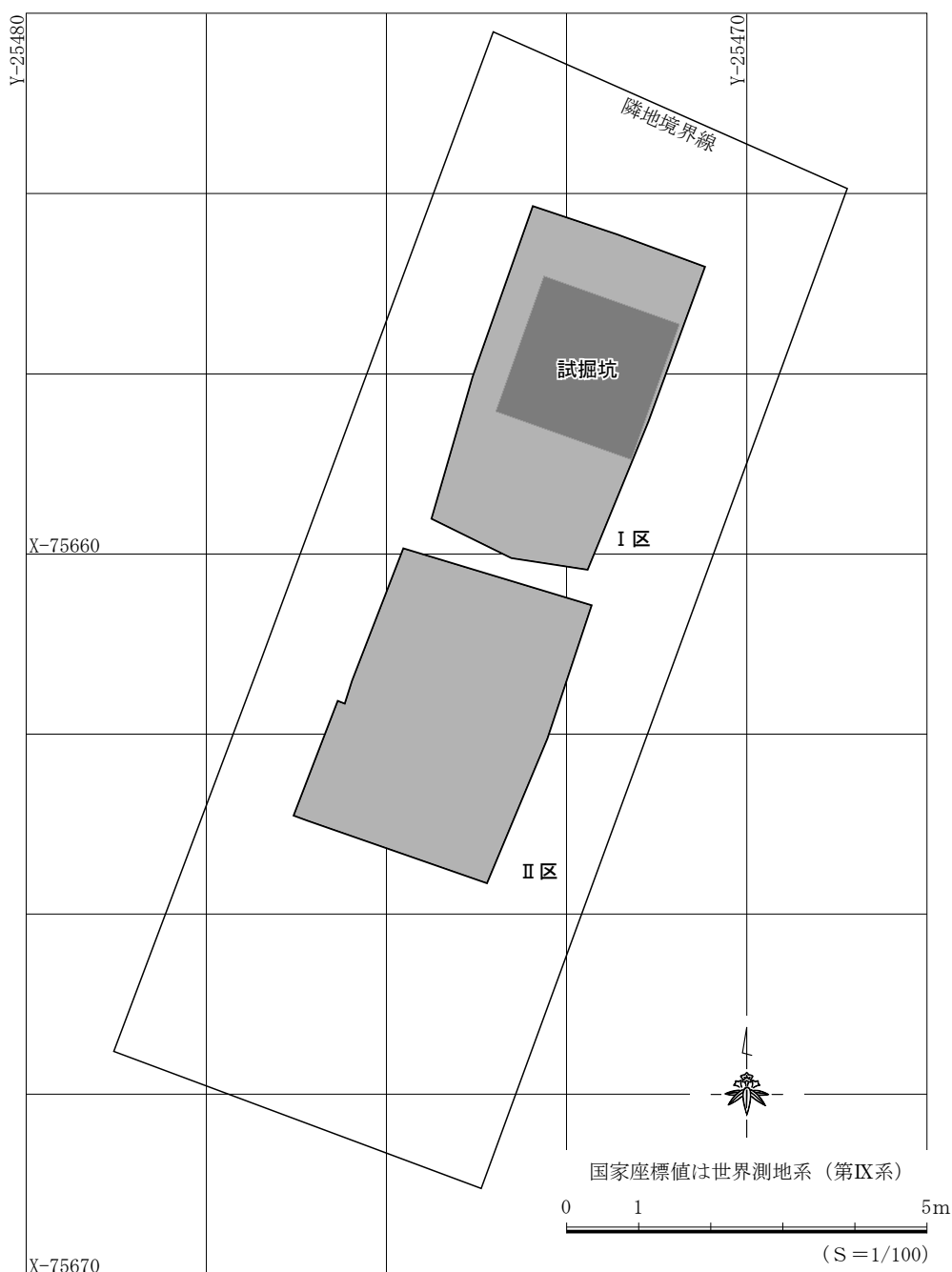


図2 調査区配置図

その後の調整期間を経て、現地調査は、平成 22 年 6 月 9 日～7 月 23 日の約 1 ヶ月半をかけて発掘調査を行った。

第 2 節 調査の方法

表土の除去は重機によって実施し、遺物包含層は人力で掘削した。調査・掘削に伴う残土置場を確保する必要から調査区は 2 分割し、先行して着手した北半をⅠ区、南半をⅡ区と呼称した。本報告でも、これに準じて記載を進める。確認調査の結果に基づいて表土および遺物包含層を除去したところを 1 面としたが、調査を進めるにつれて本地点には遺構面（整地層）の重なりがないことを把握できたため、現地で 1 面と呼んだ遺構群を中世上層に、これよりも古く、現地では 1 面下と呼んだ遺構群を中世下層に帰属させて報告することとした。

Ⅰ・Ⅱ区とも順次下層への掘り下げと写真撮影と測量図作成の記録作業を進めた。測量に当たっては国家座標系に即した座標軸を設定し、光波測距儀を用いて平面図の作図を行った。座標移動は市道上に設置された鎌倉市 4 級基準点「U099」と「U100」二点間関係のもと、開放トラバースによって行った。現地では 4 級基準点の成果簿に基づき旧測地系の座標値にを用いて測量を行ったため、本報告の作成に当たって世界測地系の座標値に表記を改めた（図 2）。座標値の変換には、国土地理院が公開する座標変換ソフト「Web 版 TKY2JGD」を使用した。変換値は東日本大震災後の補正值となっていない。

第 3 節 調査の経過

前述のとおり、本地点の調査は平成 22 年 6 月 9 日に開始した。重機によるⅠ区の表土掘削を行った後、人力による遺物包含層の掘削を経て、上層遺構面の精査・遺構掘削へと作業を進めた。順次、測量図の作成と写真撮影を行い、下層遺構面でも同様の作業を繰り返し行った。

7 月 1 日には再び重機によってⅠ区の埋め戻しとⅡ区の表土掘削を行い、7 月 22 日まで遺構の掘削と記録作業を繰り返し実施した。7 月 23 日には調査器材の撤収・搬出を行い、現地での調査工程を全て終了した。

出土品などの整理作業は平成 25 年度後半から着手し、同年度末までには遺物の実測とトレースを終えた。平成 26 年度には挿図および写真図版を作成し、次いで表組みの作成、本文の執筆へと作業を進めた。これら一連の整理作業は、鎌倉市文化財課分室で行った。

第三章 基本土層

本地点の現地表面は標高 6.0～6.4 m を測り、南側が低い。

本地点では、中世上層と下層の遺構群が検出された。両段階とも調査区のほぼ全域が南北の大型溝（堀）が遺存していたため、基本土層として認識できたのは部分的に検出された中世基盤層である黒色粘質土層と、その下に堆積する青灰色砂層のみであった。また、後世の削平も影響して確実な整地層はごく部分的にしか認められず、殆ど全てが遺構覆土という状態であった。

中世基盤層となる黒色粘質土層は、標高 4.7 m 付近で検出された。この層を大型溝が掘り込んでるので、本来もっと高い位置まで堆積していたことは確実である。灰黒色砂が斑文状に混入し、締まりの比較的強い層であった。この層の直下、標高 4.3～4.4 m 前後に青灰色砂の上端がある。観察した場所により砂粒の精粗に差があったが、海棲の貝殻が混入しており、海成砂である可能性が高い（図 7）。

調査区壁断面図 土層説明 (図7に対応)

【中世上層 遺構3】

- ① 黄褐色土 砂質土。泥岩ブロック多い。締まりあり。
- ①' 暗黄褐色土 砂+粘質土。締まりややあり。
- ② 黒灰色土 粘質土。泥岩粒少量。締まり弱い。
- ③ 暗褐色土 粗砂、貝殻粒主体。締まりあり。
- ③' 暗褐色土 ③層より砂と貝殻粒減る。
- ④ 暗灰褐色土 粘質土。締まり弱い。
- ⑤ 暗灰褐色土 泥岩ブロック、貝殻粒多量。
- ⑥ 暗灰褐色土 粘質土。木片多量。
- ⑦ 黒褐色土 粘質土+砂。泥岩ブロック多い。

【中世上層 遺構9】

- ① 黒灰色土 粘質土+砂。
- ② 暗褐色土 粘質土が主体。
- ③ 黒灰色土 砂主体+粘質土。
- ④ 暗褐色土 粘質土+砂。
- ⑤ 暗褐色土 粘質土+砂。木片含む。

- ⑥ 暗褐色土 砂質土。
- ⑦ 暗褐色土 粘質土主体+青灰色砂。
- ⑦' 暗褐色土 粘質土主体+青灰色砂が斑文状に入る。

【中世下層 遺構4】

- a. 暗褐色土 砂を多く含む。
- b. 暗褐色土 有機質腐植土。
- c. 暗褐色土 砂、炭化物を多く含む。
- d. 暗褐色土 有機質腐植土
- e. 暗褐色土 砂を多く含む。
- f. 暗褐色土 有機質腐植土。炭化物を多く含む。
- g. 黒褐色土 粘質土。締まりあり。かわらけ片少量。
- h. 暗褐色土 有機質腐植土主体。
- i. 暗褐色土 有機質腐植土。
- j. 暗褐色土 泥岩粒、砂を多く含む。
- k. 暗褐色土 粘質土。締まり弱い。

第四章 発見された遺構と遺物

第1節 検出遺構

本調査で検出された遺構は全て中世に属するもので、中世上層と下層の遺構群とに大別できる。上層では南北溝1条とこれに先行する竪穴建物1基、下層では南北溝1条が検出された。上・下層の南北溝は概ね同位置に同じ方向で流れており、直接的に連続はしないものの、踏襲性はあるものと考えられる。

中世上層の遺構 (図3～図5)

遺構3 (南北溝) : I区～II区を南北に貫く大規模な溝で、表土と遺物包含層を除去した直下の標高5.1～5.3mで確認された。東西の両岸を確認できたのはII区の北辺近くのみで、ここでの上場幅は150cmを測る。深さはII区南壁の断面で最も残りが良く、110cmを計測した。底面標高はI区の北壁で4.4m、II区北壁で4.35m、II区南壁で4.1mを測り、南に向け流下する。断面観察の結果、砂質土や粘質土で漸次埋没していった状況を見て取れたが、覆土は観察地点ごとに様相を異にしており、部分的に浚渫の痕も窺えた。断面形は逆台形～U字形を呈し、一定した形では貫流していなかった。II区では埋没後に堆積した遺物包含層中に凝灰岩切石(鎌倉石)が散見され、南北に据え並べたような箇所も見られた(図版2-5)。これより上位は表土層となるため定かでないが、近隣の調査事例も参考とすれば、さらに上層の遺構として切石積み護岸を持つ南北溝が存在していた可能性も考えられる。

流下の方向軸はN10°Eを示し、南側では僅かながら正方位に近づくようである。I・II区ともに両岸側に杭列が確認でき、一部横板を抑えている箇所も見られた。打ち込み方が乱雑で使用されている木材にも一定の規格性が見て取れないことから、応急処置的な護岸・補修工事が繰り返されたものと見られる。

現地で遺構1・2・6～8と名称を付した落ち込みについては、遺構中の覆土様相の違いと認識できたことから本遺構に包括することとした。

本遺構から出土した遺物は、図13～16に掲げた。図10～12の遺物は調査の便宜上掘削した排水溝などから出土したもので、新旧遺物の混在はあるものの、多くは遺構3に帰属したであろう。遺物様相の説明は、次節で行う。

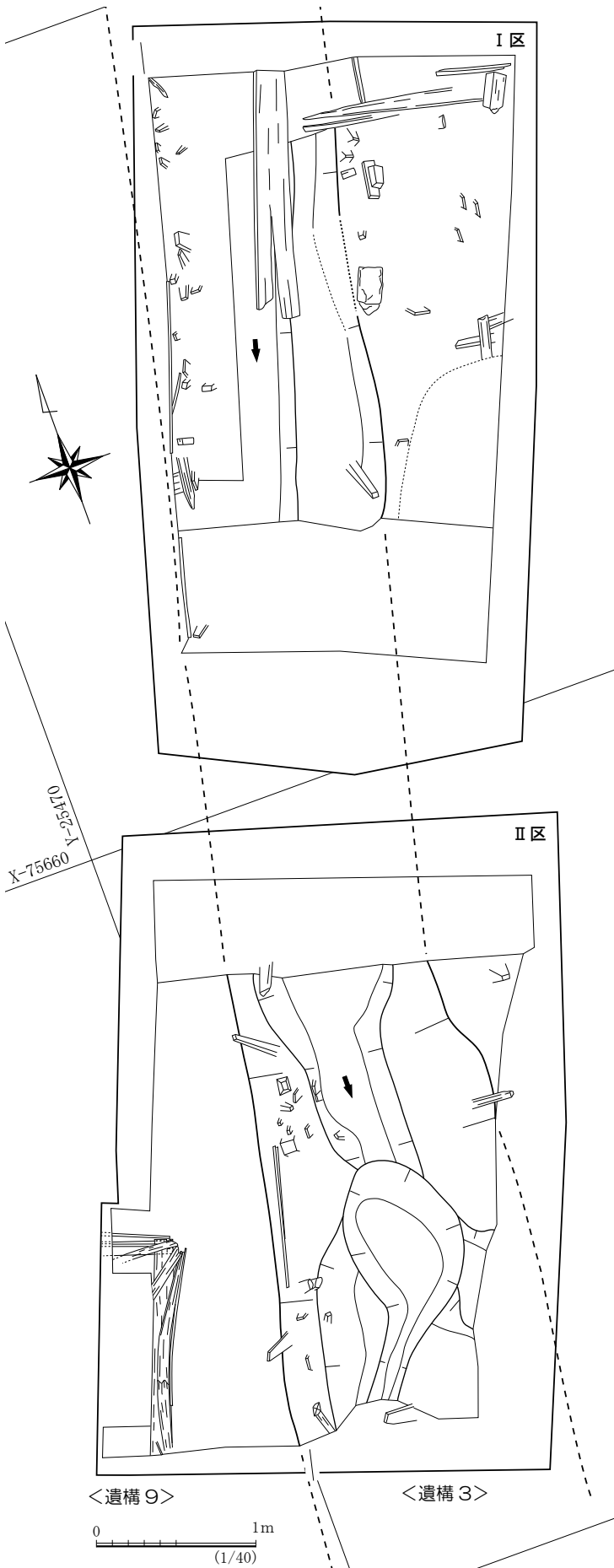


図3 中世上層の遺構

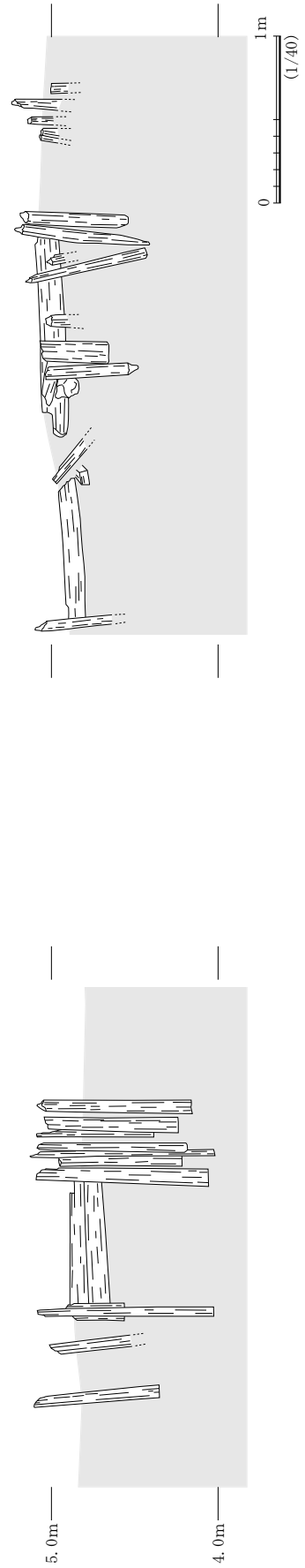


図4 中世上層 遺構3 土留め材

遺構 9 (竪穴建物) : II 区 の南西角で、建物北東隅のごく一部が確認された。下層南北溝 (遺構 4) の西岸を切って構築され、本建物が廃絶・埋没した後、粗い泥岩ブロックで地ならしを施した上で上層南北溝 (遺構 3) の開削に及んだことが断面観察から確認された。調査区の制約上、遺構の外方 (裏込め側) から掘削・調査せざるを得なかった。

構造としては地面を (方形か長方形に) 掘り窪めた後、四周の掘り方底面を 10cm ほど埋め戻した上に土台材を据え付け、その外辺から 15 ~ 20cm 幅の横板を 4 段以上積み上げて壁体を構築していた。北辺と東辺の土台材は幅 7cm と 12cm、厚さ 6cm と 5cm で、ともに端部を 3cm の厚さで切り落とし、できた段差同士をコーナー部で咬み合わせていた。東辺土台板の上面に長さ 7cm、幅 3cm の貫通する柄穴が 40cm 間隔で穿たれていたが、ここには束柱が立っていないかった。壁体は、最も遺存の良い部分で 50cm の高さが確認できた。壁体の外側 20cm に掘り方の壁面があり、黒色粘質土と青灰色砂の混交土を裏込めとしていた。泥岩粒などの混入物は殆どなく、掘削残土となった中世基盤層以下の堆積土をそのまま埋め戻したと思われる。

確認できた規模は、壁体が東西 40cm、南北 135cm で、掘り方全体では東西 55cm、南北 150cm までを計測できた。本地点以西の調査地では竪穴建物が多く確認され

ているので、本地点が土地利用の上で境界となっていた様子が把握できたことになる。

ごく限定された範囲での検出に留まったため、本遺構からの出土遺物は僅少であった。図 17 に 5 点を掲げた。説明は次節で行う。

中世下層の遺構 (図 6)

遺構 4 (南北溝) : 上層の遺構 3 の下位に、概ね同じ位置で検出された南北溝であるが、規模の面では本遺構の方が遥かに大きい。遺構全体のうち検出できたのは西岸のみで、幅・深さとも確認には至らなかった。検出に及んだ限りでは東西幅 2 m 以上、深さは 1 m 以上を測り、覆土の落ち込み具合から勘案すれば、少なくとも幅員に関しては計測しえた倍以上の規模を有していたことが推測できる。

西岸の傾斜角は 50 ~ 55° と急で、断面形は V 字形 (薬研) または逆台形 (箱薬研) を呈していたと思われる。本遺構に伴う護岸施設の痕跡は確認できず、基本的に素掘り溝と認識して良いだろう。覆土は暗褐色の有機質腐植土 (まぐそ) を主体とし、砂粒や炭化物の混入量によって細分が可能であった。確認できた全ての土層が西岸と同程度の急斜度で東へ向け落ち込んでおり、長時間かけて段階的に埋没したというよりは、短期間のうちに西側から有機物が投棄され腐植していく過程で形成された覆土相という印象を受けた。I 区の覆土中では板材の集中する箇所があっ

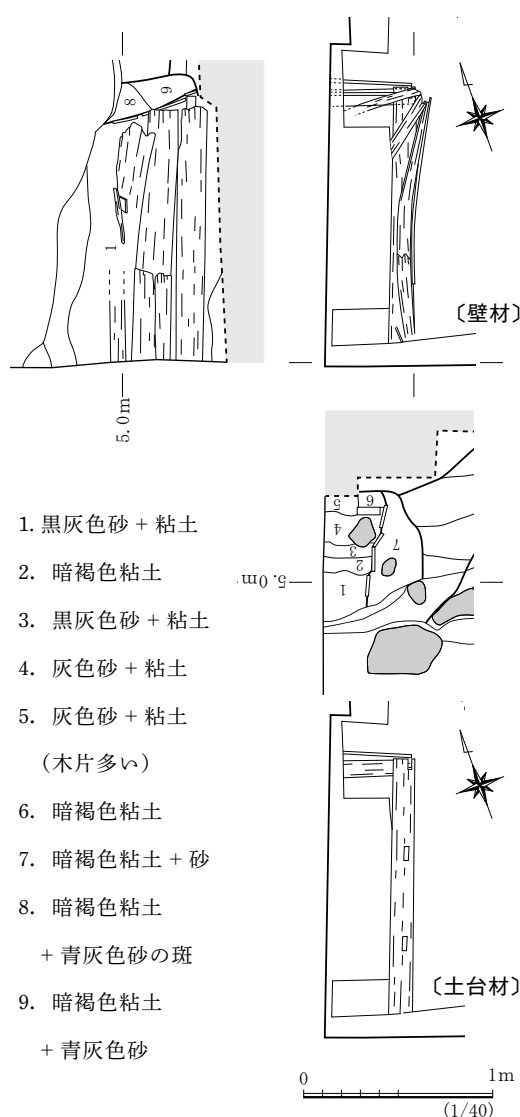


図 5 中世上層 遺構 9

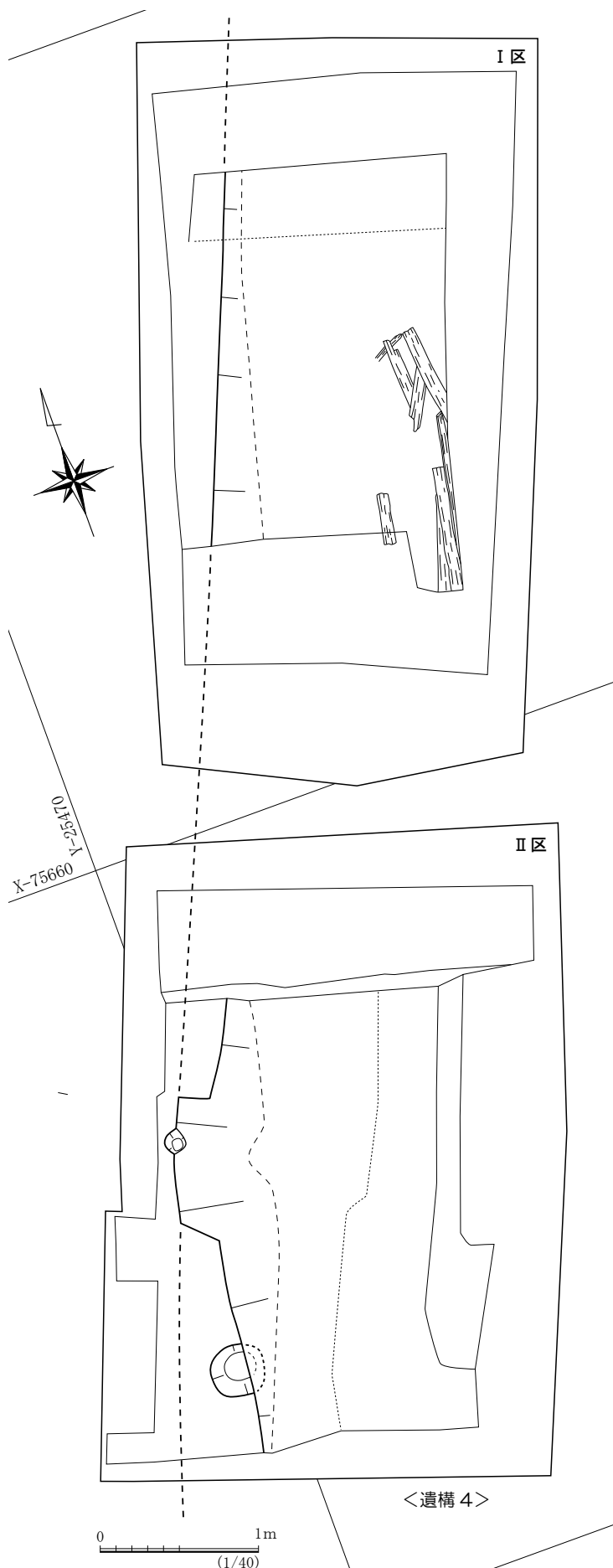


図6 中世下層の遺構

た。流下方向に平行して横たわっていたものが主体であったが杭などで固定された様子は見られなかった。意図的に敷かれたものであったとしても、構築物ではなく投棄の範疇で理解すべき痕跡と考えている。

流下方向軸はN 22° Eを示し、自然地形から南側へ流れていたと考えて良いだろう。

現地で遺構5と名称を付けた落ち込みについて、遺構内での覆土様相の違いと認識できたため、本遺構に包括することとした。

本遺構で出土した遺物は図18・19に掲げた。次節で様相の説明を行う。

第2節 出土遺物

本地点では整理箱にして16箱の遺物が出土した。上・下層の南北溝での出土が多かった。

表土など出土遺物（図8・9）

確認調査や表土掘削時に出土した遺物をまとめた。

1～7は確認調査時に出土した。帰属遺構・層位の厳密な特定はできないが、確認坑の設定位置・深度から大半の遺物が上層遺構3に帰属する可能性が高い。

1～4はロクロかわらけ。小皿・大皿とも口底径比が大きく、やや深身で丸みの強い器形を呈する。

5は常滑甕の胴部片で、割れ口2ヶ所を研磨具として再利用している。

6は瀬戸の折縁深皿。底部外面付近を除いて灰釉が施されている。内底面には円形に釉薬の剥がれた部分が見られる。焼成台（トチン）の痕であろう。古瀬戸中期様式－Ⅲ期か。

7は瓦質土器の火鉢口縁部片。内外面とも横方向のヘラミガキを施し、外面に菊花スタンプと貼り付け連珠文を施す。

8～34は表土掘削時や表採、掘削残

【基本土層】（その他の土層説明は、309頁上段を参照）

- I 表土・攪乱 暗灰褐色土 砂質土。
- II 中世遺物包含層 粘質土+砂。泥岩ブロック少量。
 - 1. 黒褐色土 粘質土。縮まり弱い。
 - 2. 暗灰褐色土 粘質土。縮まり弱い。
 - 3. 暗灰褐色土 粘質土+砂。縮まり弱い。
- III 中世上層 粘質土+砂。泥岩粒少量。
 - 1. 暗褐色土 粘質土。泥岩粒少量。
 - 2. 灰褐色土 粘質土。
 - 3. 黄褐色土 拳大の泥岩ブロックによる整地層。
 - 4. 黄褐色砂 粗砂と泥岩ブロック主体。
 - 5. 黒褐色土 粘質土。縮まりあり。
- IV 中世下層 黄褐色土 黄褐色砂を含む。縮まりあり。
- V 中世基盤層 粘質土。縮まりややあり。部分的に青灰色砂が斑文状に混入。
- VI 海成砂層か
 - 1. 青灰色砂 粗砂と細砂の互層。貝殻粒少量。縮まり弱い。
 - 2. 黒褐色土 粘質土。縮まりあり。

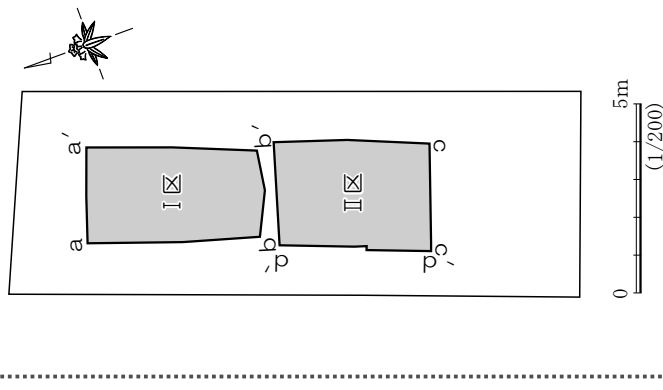
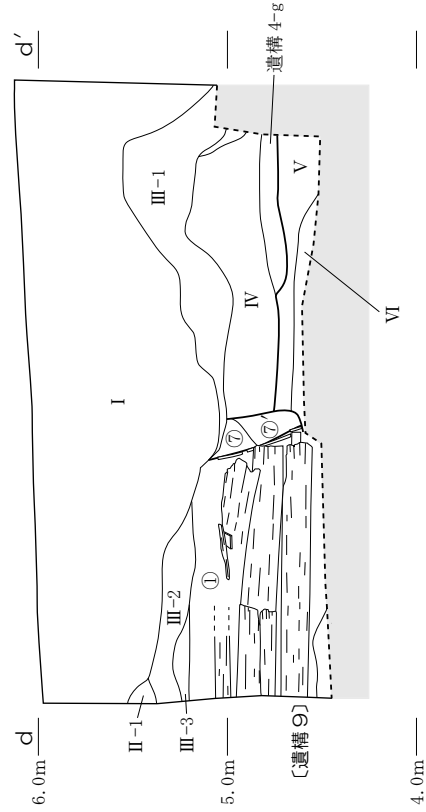
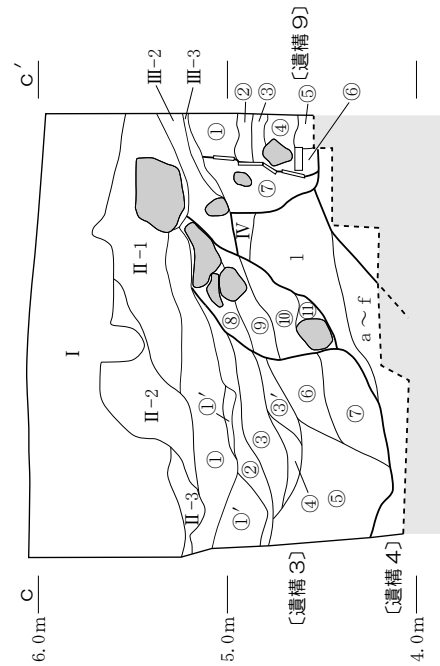
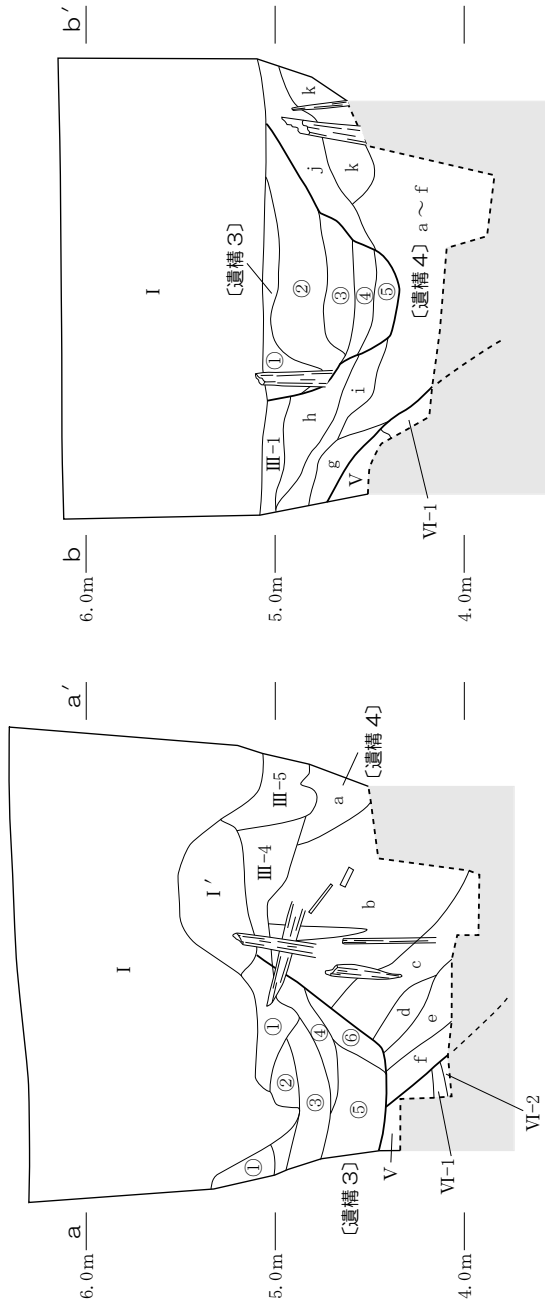


図7 調査区セクション図

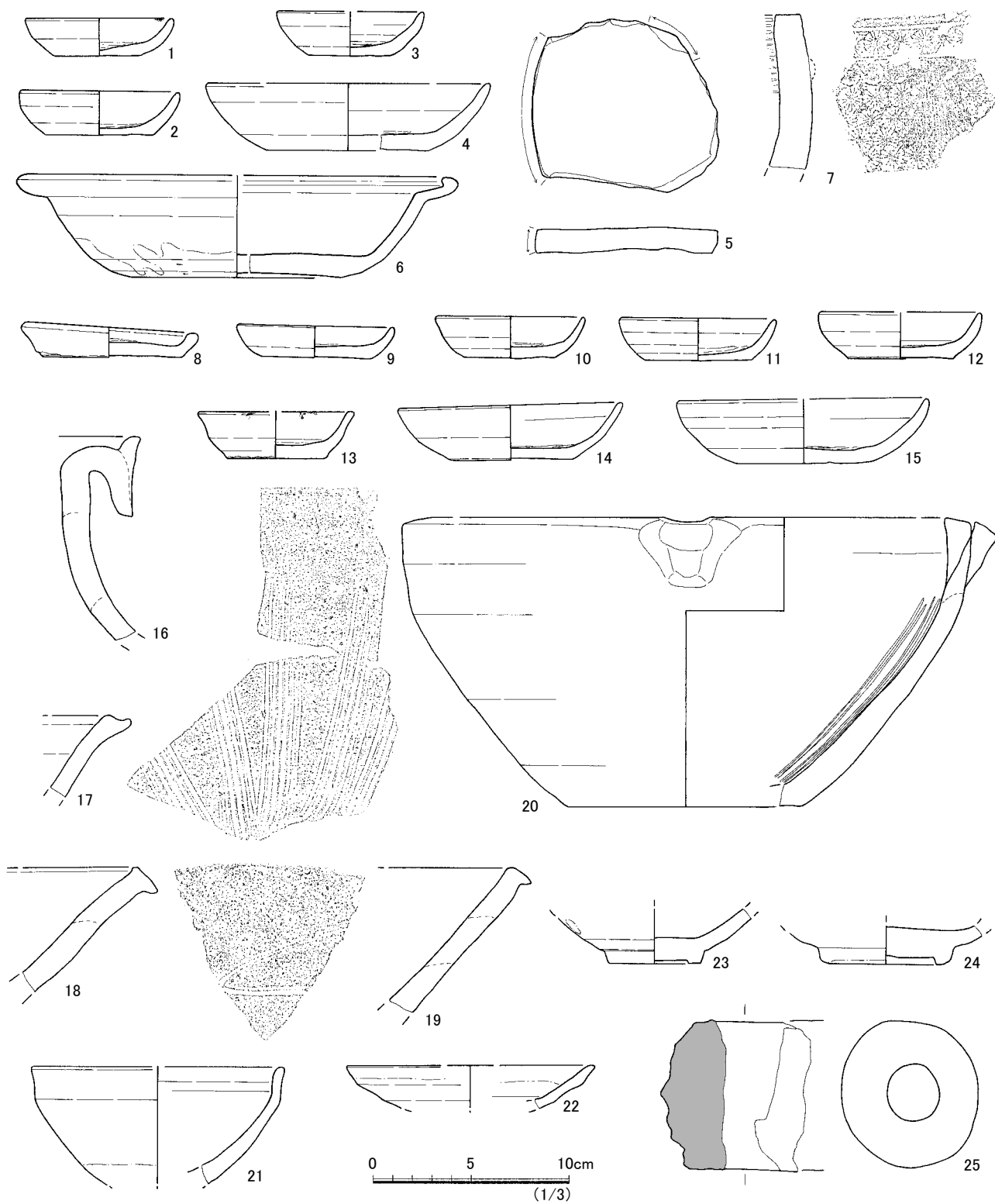


図8 表土など出土遺物①

土から出土した。よって新旧各様相を持つ遺物が混在する。

8～15はロクロかわらけ。小皿は8→9→10以降という順に新しい特徴をもつ。

20は備前のすり鉢。口縁から底部までが遺存するものの、小片であるため復元径には誤差がある。体部内面に6条一単位の櫛歯によるすり目が付く。口縁部には内方から押し出して成形した片口が付いている。体部から口縁部にかけて、やや強い内湾形態を取る。

21は瀬戸の天目茶碗で底部を欠く。内面全体と体部外面に鉄釉が掛かり、外面体部の下端には

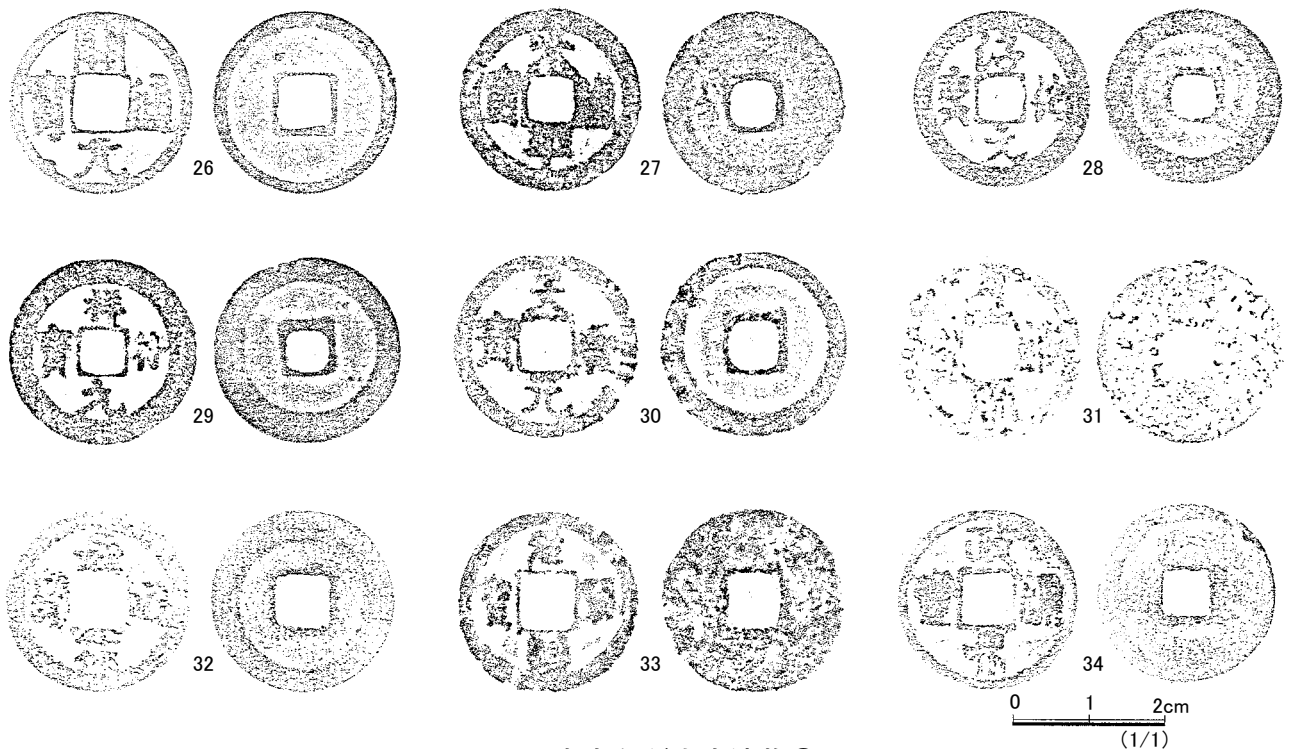


図9 表土など出土遺物②

鉄釉の化粧掛けが施されている。

26～34は銅銭。いずれも中国からの渡来銭で、26は唐代621年初鑄の開元通寶。27以下はいずれも北宋銭である。本地点では概して金属製品の銹化が少なく、非常に遺存度が良い状態で出土している。

中世上層の出土遺物（図10～12）

現地では遺構3と別遺構からの出土と認識した遺物で、新旧資料の混在はあるものの、大半は遺構3に帰属するものと思われる。

35～92はI区で出土した。

35は、現地において遺構1からの出土としたもの。常滑の片口鉢Ⅱ類で、口縁部の小片。

36～38は上層遺構の確認面で出土したロクロかわらけ。遺構3に帰属する可能性が高い。

39も遺構確認面からの出土で瀬戸の入れ子。

40以下は中世上層の遺構面を掘り下げる際に出土した。40～62はロクロかわらけで、54～56など中皿が含まれる。小・中・大皿とも口底径比が比較的大きく、深身で丸みを帯びた資料が主体となる。

63～70は手づくねかわらけ。小皿・大皿とも器高が低く大ぶりの資料が中心となるので、上層より下層の遺構4に帰属させるべき資料である。

71は尾張の山茶碗系片口鉢。口縁部は丸く仕上げられ、端部に沈線がめぐる。体部下位の外面には斜め→横方向のヘラケズリが施される。

74は常滑の片口鉢Ⅱ類。体部の小片だが、内面に菊花文のスタンプが捺されている。

77は備前のすり鉢。口縁～体部の小片で、器形の傾きや復元径には多少の誤差があろう。体部内面に8条一単位の櫛歯によるすり目が施され、モチーフは不明だが薄い墨画の痕跡が認められる。

84・85は銅銭。84は中国・北宋代に鑄造された咸平元寶。85は私鑄銭で銭銘不明。下の字は「元」が左右反転している。

93～106はII区で出土した。

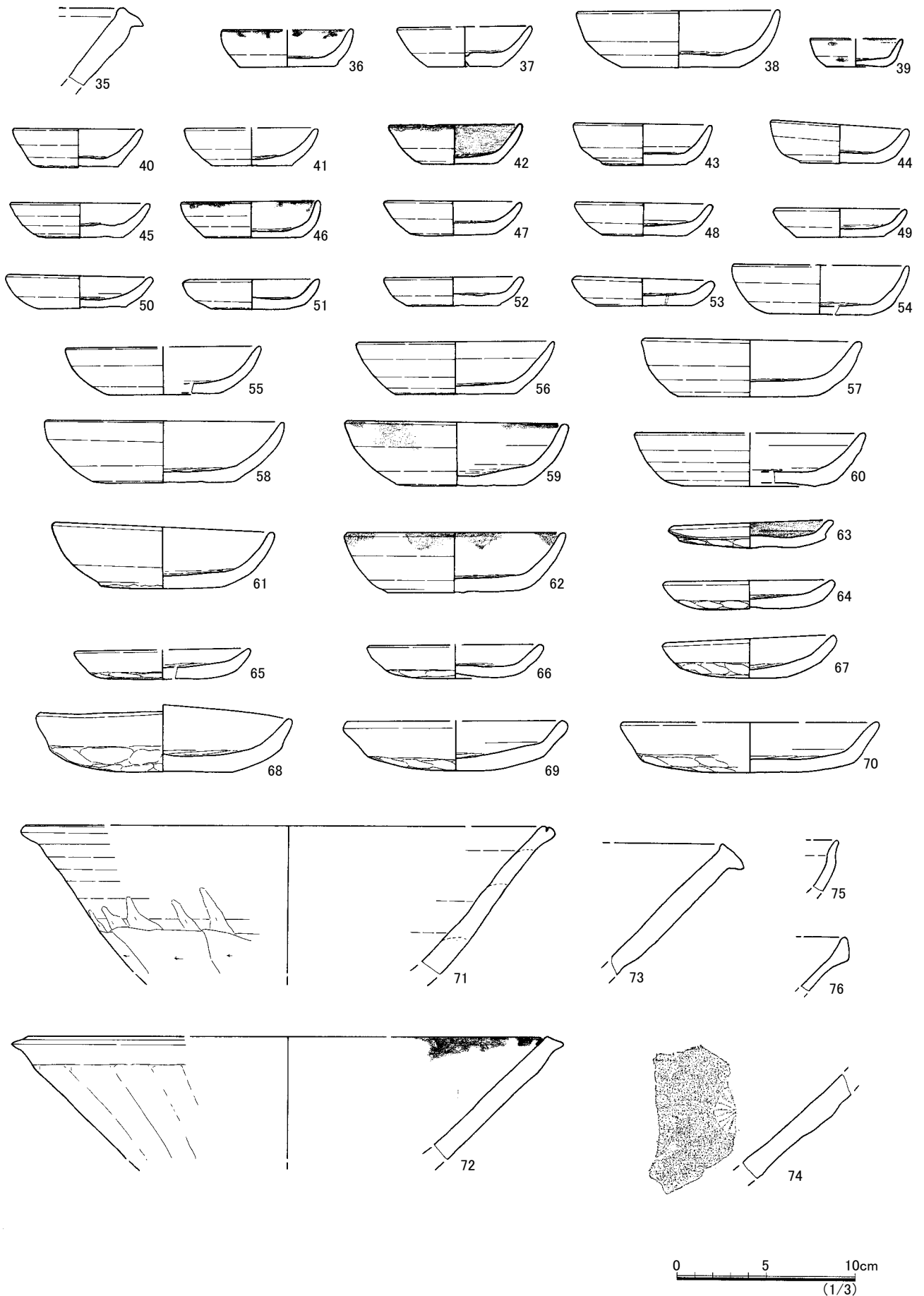


图 10 中世上層 出土遺物①

94 は常滑の鳶口壺で、口縁部を欠く。回転台成形で、肩部に2条の沈線が付く。
 95 は常滑甕の口縁部。縁帯が頸部に付くもので、15世紀前半頃の所産。
 96 は東播系須恵器の鉢。口縁部のごく小片。
 97～106 は銅銭。全て中国からの渡来銭で、97・98 は唐代の開元通寶。106 は嘉定通寶で南宋代・1208年の初鑄。この他は全て北宋代に鑄造されたものである。
 107～111 は木製品。107 は独楽。外面を粗いケズリによって成形している。

中世上層 遺構3 出土遺物 (図13～16)

現地調査の段階で遺構3に帰属すると認識できた遺物である。手づくねかわらけなど、一部の資料に

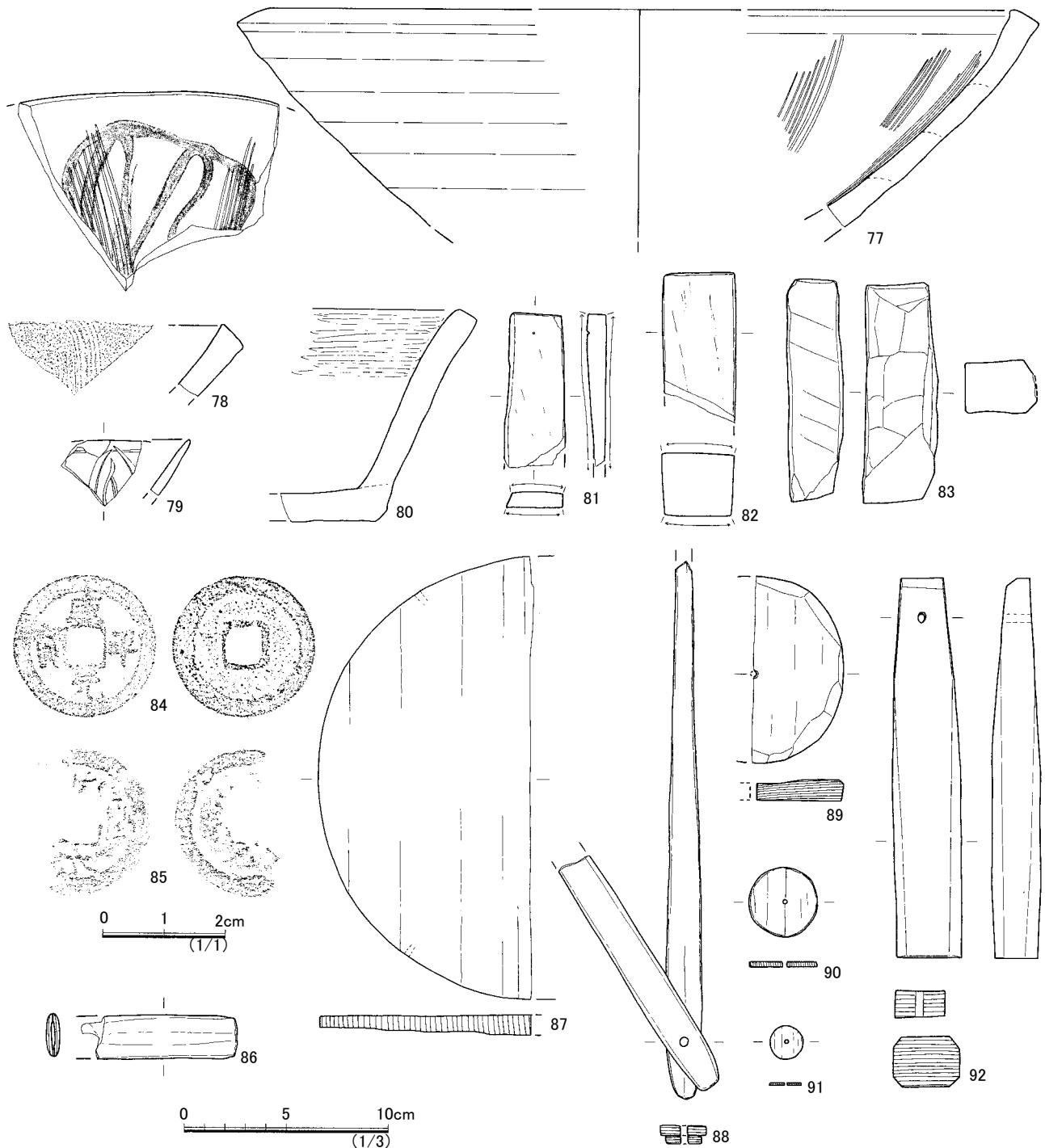


図11 中世上層 出土遺物②

全体の傾向よりも古相を示す遺物が見られ、これらは本来、下層の遺構4に伴う遺物であったと考えられる。

112～133はロクロかわらけ。112は極小の内折れ皿。113～123は小皿。このうち、121～123は他の資料群に比べて大ぶりで、体部が短く開くという古相の特徴を備えている。また、113～115のように器壁が薄く、深身で丸みを帯びる一群、117～120のように口径が8cm前後、器高が2cm未満と低平な器形を呈する一群などがあり、時期的に数段階の遺物が混在している可能性がある。

126は中皿で、124～133は大皿。133のみ他よりも低平な作りで、古い様相を呈している。体部中位に膨らみを持つ資料が中心となり、口径には12cm前後と13cm台という二通りの分布が認められる。

134～137は手づくねかわらけで、134のみ小皿。大皿は口径が13cm台で、全体に低平な作り

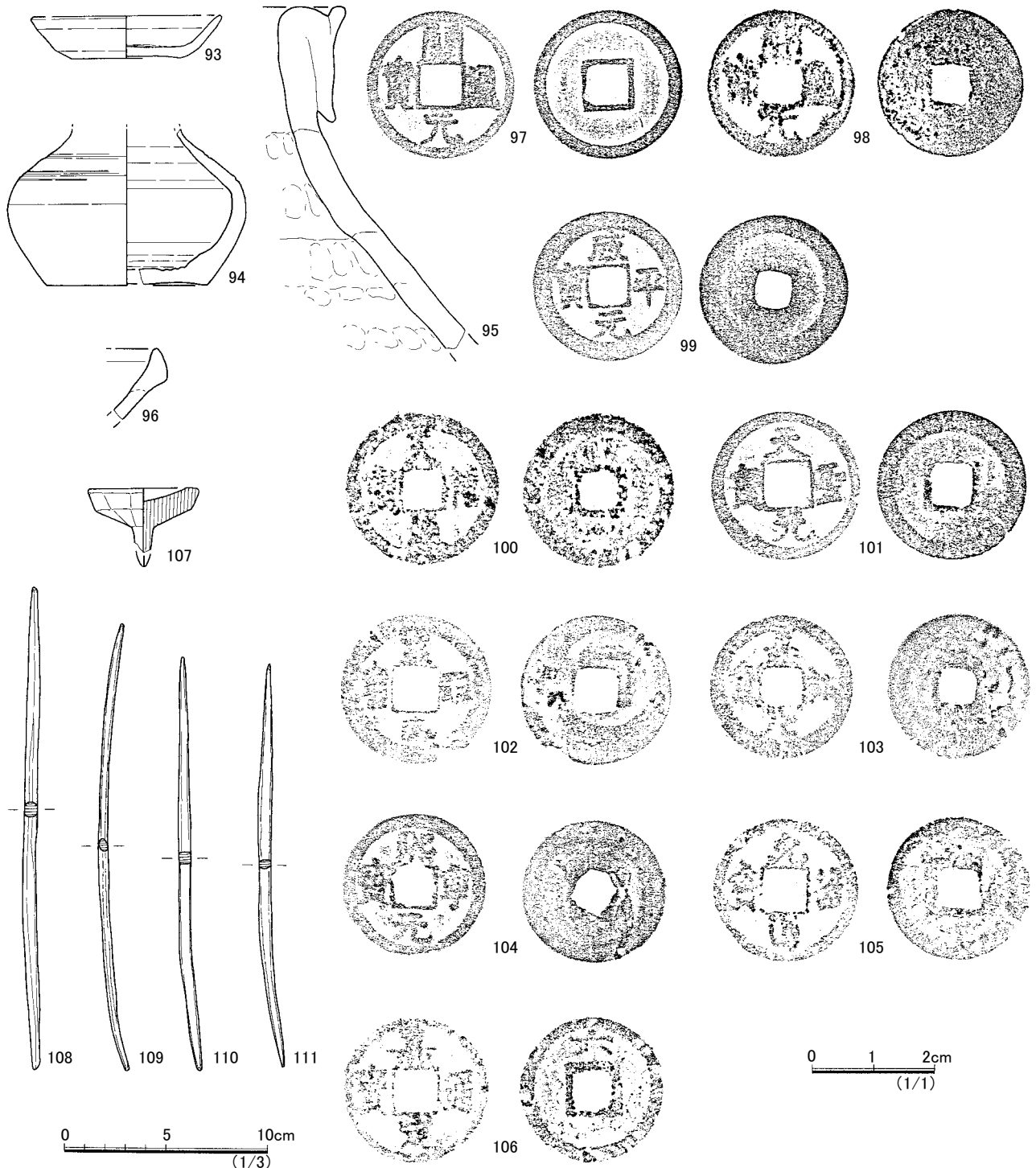


図12 中世上層 出土遺物③

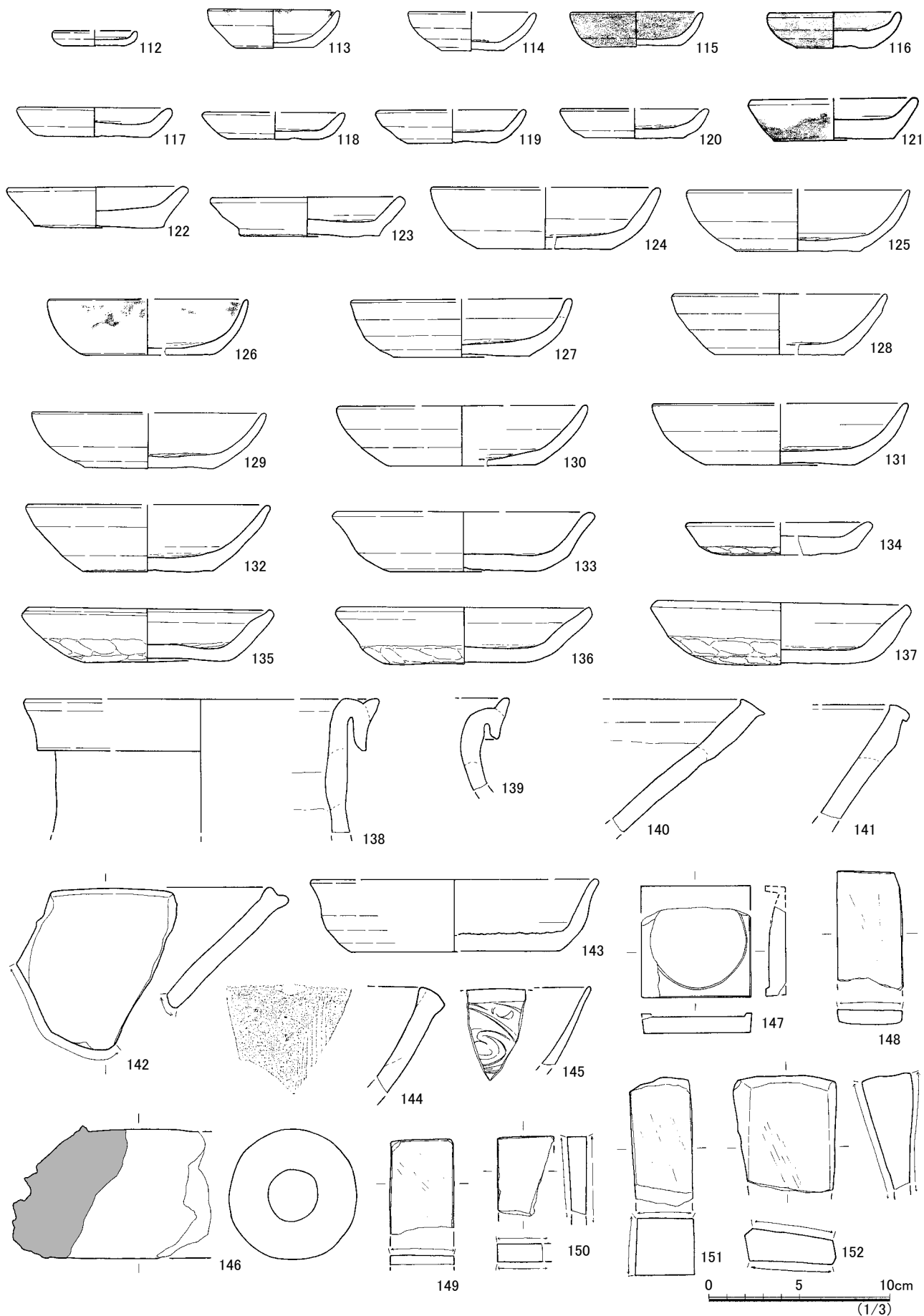


图 13 中世上層 遺構 3 出土遺物①

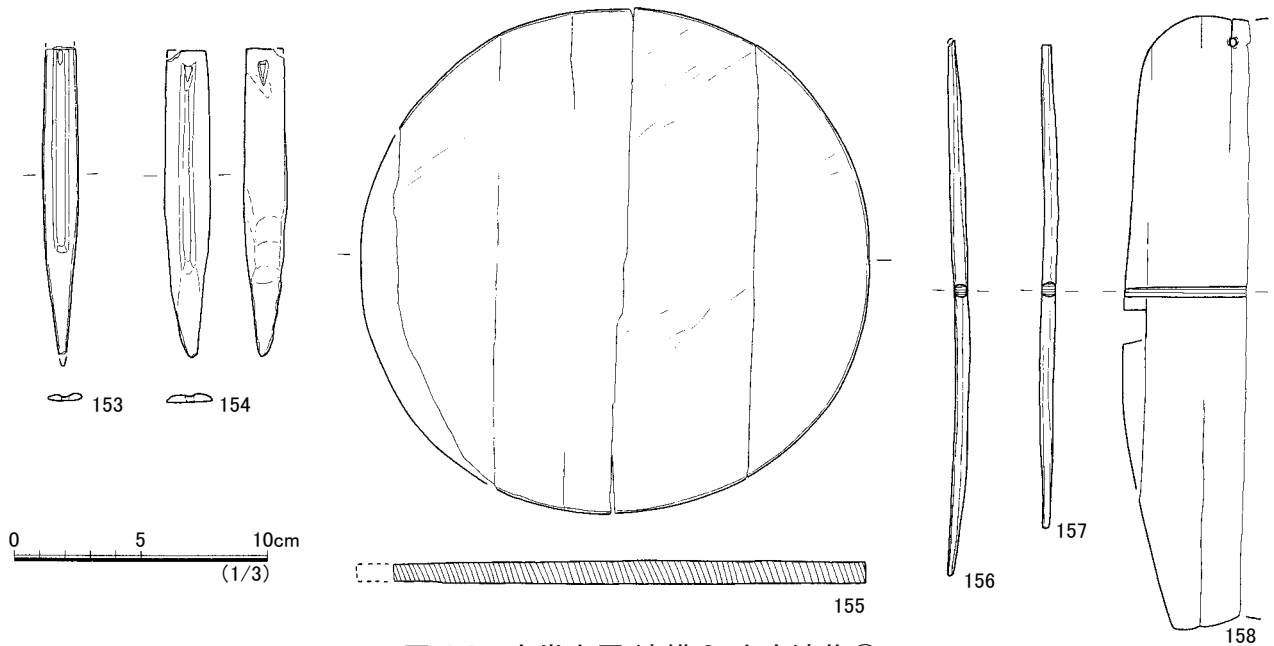


図 14 中世上層 遺構 3 出土遺物②

である。平底形態を取り、大きく開く体部からナデにより外傾する口縁部に至る。口唇部には丸みを帯びた端面がナデによって形成されている。器形・法量ともに 133 のロクロ大皿との相関性が窺われる。

138～145には陶磁器の小片を示した。常滑窯の製品には7～9型式の資料が混在している。

142は片口鉢Ⅱ類の口縁部片で、割れ口の一辺を研磨具として再利用している。

143は瀬戸の卸皿。体部内外面に灰釉が刷毛塗りされる。外底面はヘラケズリ調整。

146は土製品で轆の羽口。熔解炉との接続部は著しい被熱のため黒変し、ガラス質が固着している。

147は長門・赤間産の紫金石正方円面硯。6cm(2寸)四方に製作されている。15世紀以降の所産か。

148～152は砥石各種。

153・154は骨製品で装身具の筭。154は粗いケズリ痕が残り、加工途上品と考えられる。

155～158は木製品各種。155は曲物の底または蓋板。

159は銅製品で六器鉢の完形品。密教法具の一つで、皿台とのセットが六対で一具となる。

160～181は銅銭。全て中国・北宋代の初鑄である。

182～193は現地調査時に遺構8からの出土としたもの。整理段階で遺構3における覆土様相の違いとして認識された。遺構の中では、覆土上層に当たる。

182～187はロクロかわらけ。182は極小の内折れ皿。183～185の小皿、186・187の大皿ともに主体となるのは器壁が薄く深身で丸みを帯びた一群である。

188・189は常滑の片口鉢Ⅱ類。188は常滑9型式か。189は体部下位の小片。内面に焼成前ヘラ書きの「×」が見られる。

190は瀬戸の腰袴形香炉。底部外面を除き鉄釉が施され、二次的被熱のためか表面が発泡または銀化した箇所が見られる。体部には連珠文を二段に配し、底部外縁に三足を付している。

191は土器羽釜の口縁部片。器壁は非常に薄く、鋸下部～胴部外面に煤が付着している。

中世上層 遺構 9 出土遺物 (図 17)

竪穴建物の覆土と裏込め土より出土した遺物である。

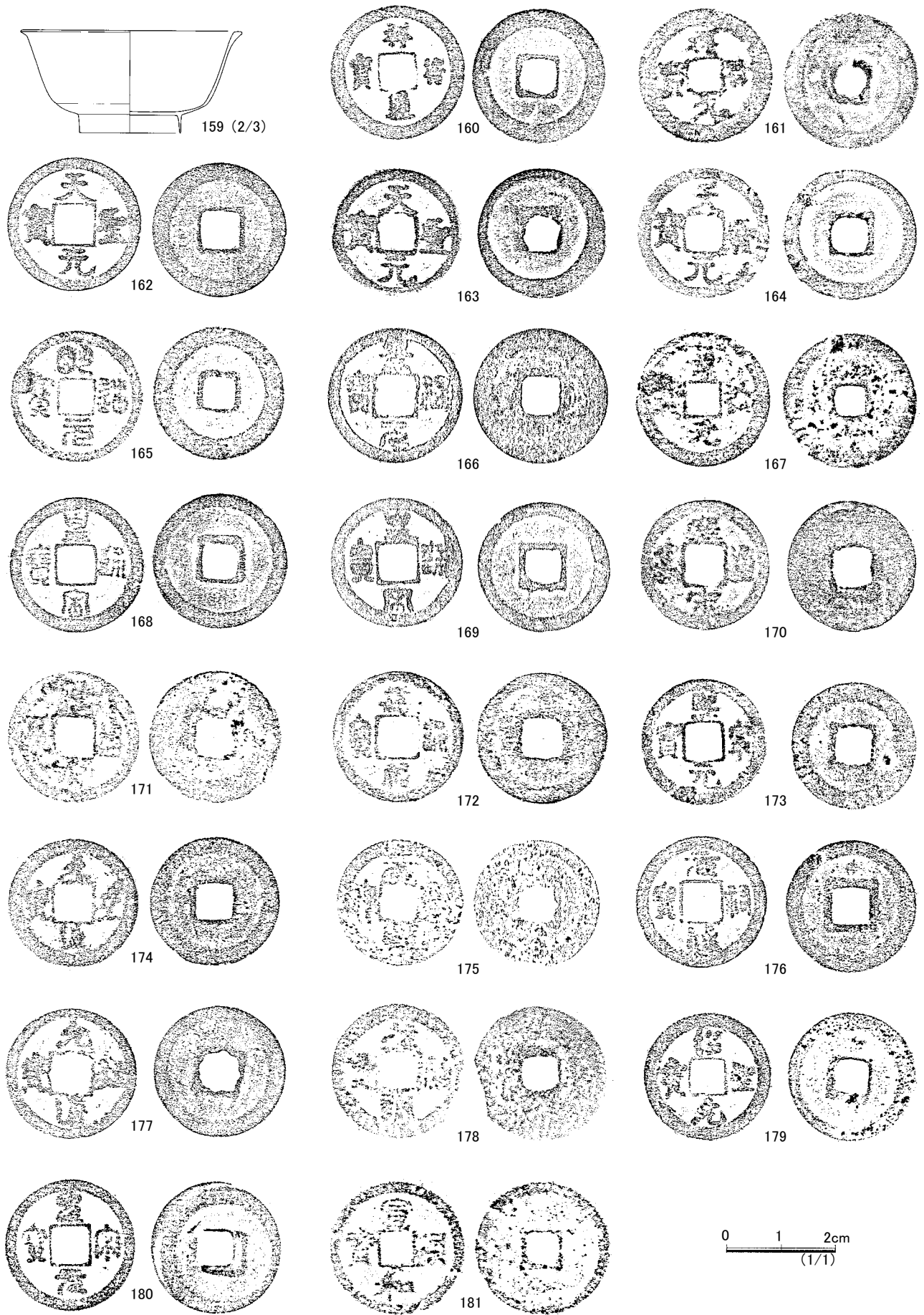


图 15 中世上層 遺構 3 出土遺物③

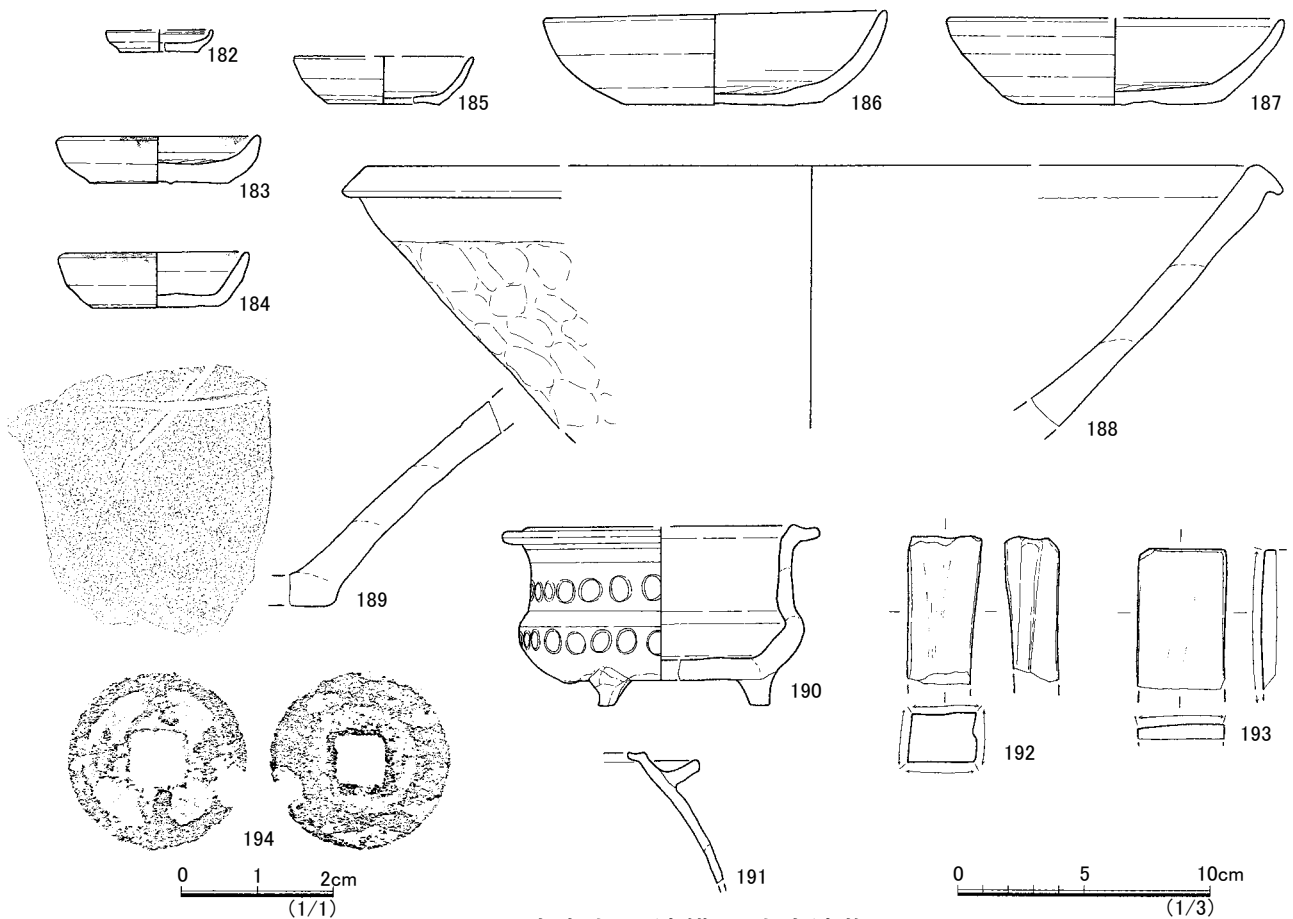


図 16 中世上層 遺構 8 出土遺物

195 は瀬戸の四耳壺。口頸部内・外面に灰釉が刷毛塗りされる。

196 は常滑片口鉢 I 類の口縁部小片。

197～199 は木製品。197・198 の小円板については用途が明らかでない。

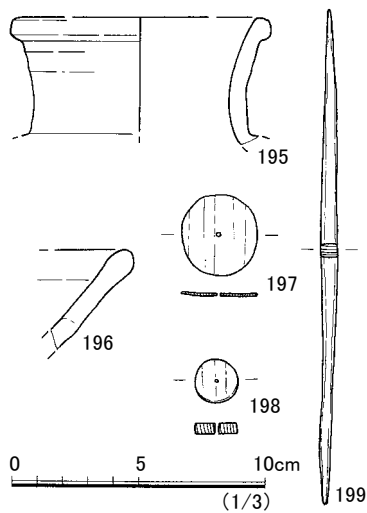


図 17 中世上層 遺構 9 出土遺物

中世下層 遺構 4 出土遺物 (図 18・19)

大型の南北溝(堀)の覆土中から出土した遺物である。調査自体が覆土の下層まで及んでいないため全て上層からの出土資料と認識すべきだが、その中でも出土レベルの違いにより 200～236 の上層と、237～256 の下層(上層下部)とに分けることができた。

200～204 はロクロかわらけ。小皿は口径 9cm 台で底径 8cm 前後、器高 2cm 未満と広底で低平な器形を呈する。大皿は口径 14cm 前後と大ぶりであり、体部の下位～中位に膨らみを持つ。小皿・大皿とも器壁が厚く量感がある。胎土には細砂粒が多く含まれる。

205～214 は手づくねかわらけで、210 までが小皿、以下は大皿である。小皿は口径 9cm 台後半、大皿は口径 14cm 台が中心となり大ぶりである。胎土はロクロ成形品に比べ細砂粒の混入が少ない。

215～218 は陶磁器と瓦器で、いずれも小片資料である。

219～236 は木製品。219 は折敷の再利用品か。表面に墨書様の痕跡が見られる。

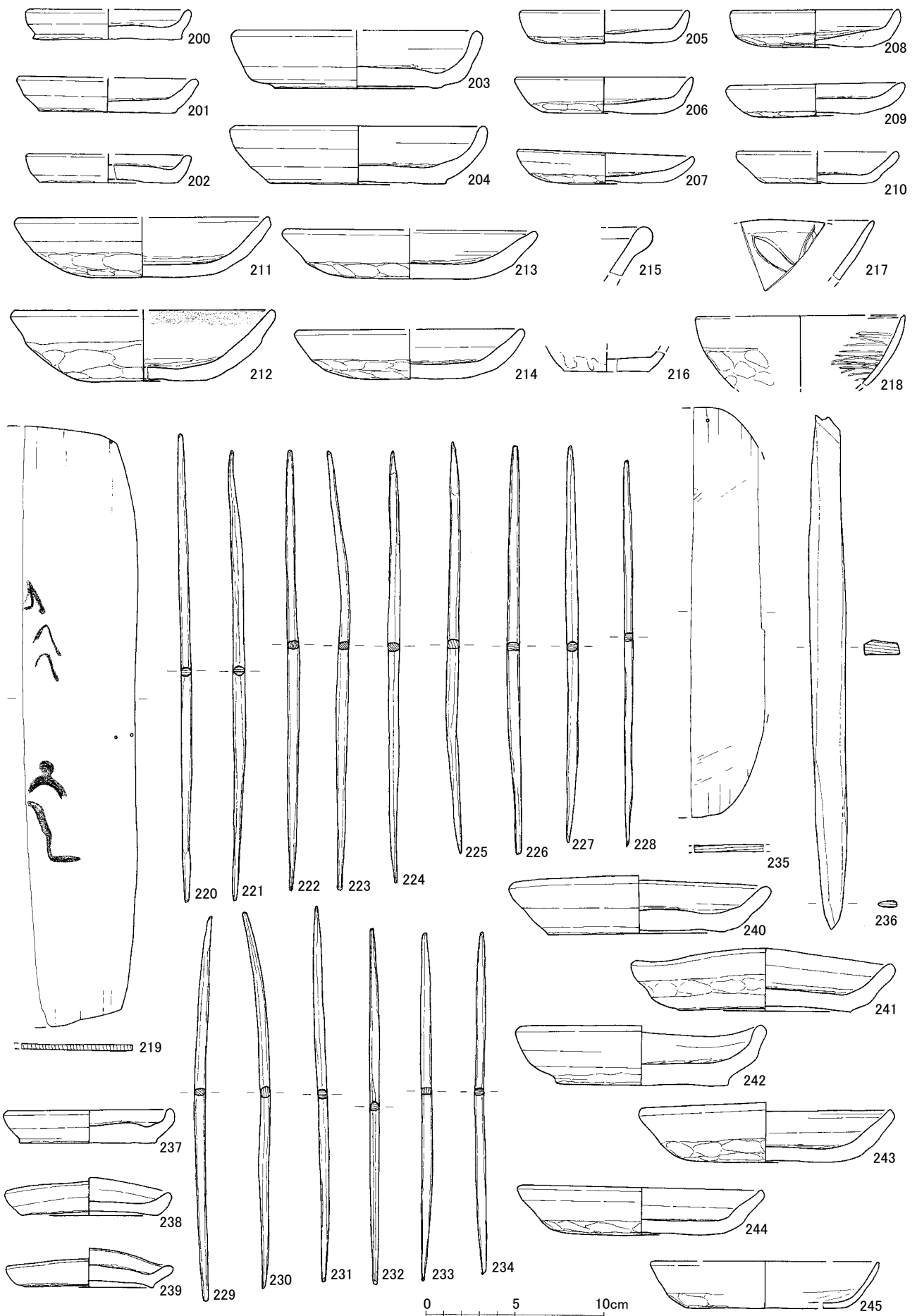


图 18 中世下層 遺構 4 出土遺物①

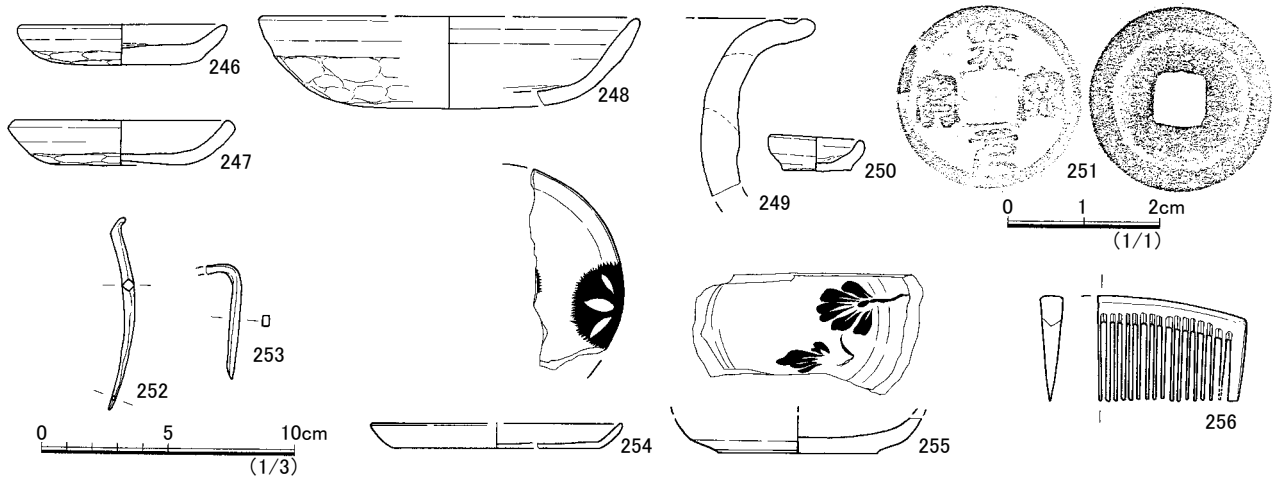


図 19 中世下層 遺構 4 出土遺物②

220～234 は箸。表 1 に示したように、全長の分布は 22cm 台の後半に最も集中する。

237～245 は下層出土資料。237～239 はロクロかわらけの小皿。口径 9cm 前後、底径 7cm 台と広底で、概して器形の歪みが大きい。器壁が厚く量感があるものの、重量には個体差が認められ、一定していない。胎土は細砂粒を多く含む。

240～242 もロクロかわらけで大皿。小皿と同様、器形の歪みが目立つ。口径 14cm 前後と大ぶりで、体部下位～中位が膨らみ低平な器形は手づくね大皿との相関性を窺わせる。241 は体部に手づくね風の指頭調整痕が残る。器壁は厚く、完存資料は 240 g を超え、重量感がある。

243・244 は手づくねかわらけの大皿。口径 14cm 前後と大ぶりで低平な器形である。口縁部内面はナデにより外傾し、口唇部も丸みを帯びた端面が作られている。胎土の細砂粒は少なく、緻密である。

245 は手づくねの白かわらけ大皿。器壁は非常に薄い。

246～255 は遺構 4 からの出土資料として取り上げなかったが、概ね同遺構に帰属するであろう。252・253 の鉄釘は遺構 3 で出土したもので、誤って図 19 への掲載となった。

246・247 は手づくねかわらけの小皿。247 は器壁が薄く口唇部はナデにより面をなしている。

249 は常滑 3 型式頃の甕口縁部片。

250 は子持ち山皿の子皿部分。渥美・湖西型。

251 は中国・北宋代の銅銭で熙寧元寶。

254・255 は漆器の皿と椀。ともに黒色系漆を塗った後、内面に赤色漆による筆描き文様が施される。

256 は横櫛。1/2 ほど遺存し、表面に黒色漆が塗られている。

表 1 箸計測値分布

全長(cm)	上 遺 構 3		下 遺 構 4	
	点数	比率	点数	比率
14.6～15.0		0.0%	1	2.0%
15.1～15.5		0.0%		0.0%
15.6～16.0		0.0%	1	2.0%
16.1～16.5		0.0%	1	2.0%
16.6～17.0		0.0%		0.0%
17.1～17.5		0.0%	2	3.9%
17.6～18.0		0.0%	3	5.9%
18.1～18.5		0.0%	1	2.0%
18.6～19.0		0.0%		0.0%
19.1～19.5		0.0%	3	5.9%
19.6～20.0	1	25.0%	2	3.9%
20.1～20.5	1	25.0%	4	7.8%
20.6～21.0		0.0%	1	2.0%
21.1～21.5		0.0%	2	3.9%
21.6～22.0		0.0%	4	7.8%
22.1～22.5	1	25.0%	2	3.9%
22.6～23.0		0.0%	9	17.6%
23.1～23.5	1	25.0%	5	9.8%
23.6～24.0		0.0%	3	5.9%
24.1～24.5		0.0%	1	2.0%
24.6～25.0		0.0%	3	5.9%
25.1～25.5		0.0%	1	2.0%
25.6～26.0		0.0%	1	2.0%
26.1～26.5		0.0%	1	2.0%
小計	4	100.0%	51	100.0%

第五章 調査成果のまとめ

調査の結果、本地点は調査区のほぼ全域が中世の南北溝であることが明らかとなった。Ⅱ区の南西角では竪穴建物のごく一部が検出され、旧溝（下層 遺構 4）の埋没後、この西岸を切って竪穴建物（遺構 9）が、次いで新溝（上層 遺構 3）、という順序で遺構変遷を辿ることが確認できた。以下、各遺構の年代について出土遺物をもとに検討を行い、若干の所見を述べてまとめとしたい。なお、本章の文中で記す地点番号は、図 1 に対応している。

中世上層 遺構 3（南北溝）

現地調査時に複数の遺構番号を付したが、資料整理に当たり概ね本遺構内での作り変えや浚渫の結果生じた痕跡と判断した。そのため覆土の堆積状況も一定した形では把握できず、出土遺物も新旧資料が入り混じっていた。

出土かわらけのうち主体となるのはロクロ成形品である。手づくねの構成比率は低く、比較的古手の形態を留める図 13 - 135 ~ 137 などは重複する旧溝（遺構 4）から掘り上げてしまった可能性が高い。同様に、ロクロかわらけの小皿でも大振りである図 13 - 121 ~ 123 も溝 4 に帰属したものであろう。傾向としては大皿・小皿とも側面観が深く丸みを帯びるものが多く、小皿には低平で丸みをもつタイプも含まれる。この手の存続期間については諸見解があるが、概ね 13 世紀末 ~ 14 世紀代の様相と捉えておく。厚手化し外傾する後続形式は含まないが、常滑片口鉢Ⅱ類などに 15 世紀代まで下る要素も散見された。調査時に遺構 8 として取り上げた覆土上層の出土遺物（図 16）も、14 世紀代に収まる様相と考えると良いだろう。

中世上層 遺構 9（竪穴建物）

遺物は全て木組み壁体の裏込め土から出土したもので、ごく少量に留まった。個々の遺存状態も良好とはいえ年代比定の根拠としては甚だ薄弱であるが、図 17 - 195 の古瀬戸灰釉四耳壺は前期様式のⅢ期（13 世紀中頃）に相当する可能性を持つ。遺構間の新旧関係から判断しても、概ね 13 世紀中頃 ~ 後半の構築・使用年代を考えて良いだろう。本地点の西に程近い地点 2 では 13 世紀中頃 ~ 14 世紀前半の竪穴建物 23 棟以上が検出されており（原 2008、山口 2008）、齟齬のない年代観といえる。二ノ鳥居以南、若宮大路と小町大路とに挟まれた一画においては軒並み同時期の竪穴建物が重複して確認されており、地点 5 と 6 では柱穴建ちないし木組み構造から切石を用いる土台・壁体への構造変化が捉えられている（佐藤・小林 1994、宮田・森・高野・滝澤 1997）。竪穴建物の用途としては倉庫と考えるのが一般的で、当地域が「倉街」といった様相を呈し、そこに幕府や北条得宗家など政治権力側の関与があったとする理解もなされている。第一章で触れた「小町大路」の経済的重要性を窺わせる遺構群といえる。これら倉庫の所有者や運営形態については十分な解明に及んでなく今後の課題といえるが、本地点の遺構 9 も鎌倉後期における都市内流通を担うべく建てられたのであろう。前段階の南北溝（遺構 4）が埋没した後、中世基盤層が遺存する東限ラインまで建物が進出したところに該期の当地区における土地利用の過密性が見て取れ、一方で重量物を支え得る地盤の合理的選択の跡も窺うことができ興味深い。これと同じ状況は地点 5 でも認められ、倉庫需要の増大を示す現象として理解できよう。

中世下層 遺構 4（南北溝）

調査区のほぼ全域を占める大規模な南北溝で、確認できたのは西岸の落ち込みだけで本来の幅や深さを把握することは叶わなかった。こうした部分的な検出状況から、断面 V 字状または逆台形の素掘り溝という判断を行った。覆土は有機質腐植土（まぐそ）をベースにしており、西から東への流入

土として認識できるものであった。また、最上層を除き泥岩粒の混入がなかった点も特徴といえる。

遺構自体を完掘できていないため資料上の制約はあるが、覆土上層の出土遺物のうち大半をかかわらが占めている。大皿は手づくねが多く、小皿では手づくねとロクロ成形品が拮抗した数量となっている。図 18 に掲げた中では 237 ~ 245 がまぐそ層からの出土が確実な資料で、245 の白かわらけを除き完形、またはそれに準じる遺存状態であった。他の資料も含め全体を通して見ると、大皿・小皿とも手づくねとロクロ成形品とに器形・法量面の相関性が窺え、広底かつ低平な側面観を呈する一群が主体となる。ロクロかわらけは胎土に砂粒を多く含む点、比較的古い要素を備えており、概ね 13 世紀前葉の年代が当てられるだろう。後続する竪穴建物（遺構 9）の年代観も参考とすれば 13 世紀中頃には完全に埋没していた可能性が高く、覆土様相も勘案すれば 13 世紀前半の中で漸次堆積が進んだことが推察される。

周辺調査成果との比較—下層南北溝（遺構 4）の展開を中心に—

地点 3 では現小町大路の前身となろう南北道路面と、この西側溝が 7 時期に亘って検出されており、このうち最新段階である第 1 期の道路面と側溝（溝 1）からは 14 世紀後半～15 世紀前半の遺物が出土している。下位の第 2 期～第 4 期道路面と側溝は 13 世紀末～14 世紀前半に、第 5 期が 13 世紀後半、第 6 期が 13 世紀中頃、第 7 期が 13 世紀前半に比定され、第 5 期以降に泥岩細粒による舗装が施されるようになる。第 2 期～第 4 期の道路面に対応する西側溝（溝 2）と第 1 期の西側溝（溝 1）では凝灰岩切石（鎌倉石）や破碎泥岩（土丹）を積み上げた護岸が行われており、溝 2 の下位ではこの前身施設と見られる木組みが検出されている（宮田・滝澤・安藤 2014）。大巧寺の参道を挟み南に位置する地点 4 でも同様の遺構変遷が把握されており（松吉・山口 2013）、この 4 年ばかりの間に「小町大路」前身道路の実態解明に近づく発見が相次いでいる。

本地点で検出された下層の南北溝（溝 4）について、地点 3・4 ではこの東岸と見られる落ち込みが、地点 5 では本地点と同様に西岸からの落ち込みが確認されている（佐藤・小林 1994）。これらはいずれも中世最下層を確認面としており、検出位置や流下方向の他、覆土様相や落ち込みの傾斜度も共通することから同一遺構と考えて間違いないだろう。地点 3 では、確認レベルから 2 m を超える深さがあり、出土遺物から 13 世紀前半という年代観が与えられている。本地点の遺構 4 より新しい遺物も含んでいるが、大よそ 13 世紀中頃までに埋没したと考えて良いだろう。各地点とも河川など自然要因の遺構である可能性が指摘されているが、図 20 で示したように現行の小町大路に沿って一直線に延びる点、また、断面形態（落ち込みの傾斜度）に高い斉一性が窺えると同時に、初期若宮大路側溝に代表される鎌倉時代でも古い時期の溝が概して断面 V 字状ないし逆台形の素掘り溝である実例などを根拠に、筆者は自然流路の改変も含めた人工溝と考えている。図 20 の合成図では上幅が 7 m 強に復元できるものの、同一地点で両岸を確認できていないため、参考値として示すに留めたい。今後、図上での延伸部を調査する際には、両岸および底面まで確認すべく調査計画を立てる必要があるだろう。一定規模の調査面積が必要であることは無論、掘削の規制深度や発生土の処理など諸条件が整わなければならずコスト面も嵩むことになるであろうが、溝の具体的な構築・存続年代の把握とともに鎌倉時代初期～前期における土地造成の在り方を知る上で有用な情報をもたらしてくれる筈である。

付記—出土遺物の年代観について—

出土遺物の年代観について、本報告では宗臺秀明氏の編年案（宗臺 2005）をベースに提示してきた。中世の鎌倉において最も普遍的かつ安定的に出土する「かわらけ」の年代観に関しては研究者間に見解の相違があることが指摘されて久しい（永田 2014）。今後、新出資料の蓄積に伴う検証が進められるとともに、共通認識の形成が図られることを期待したい。

【引用・参考文献】

宗臺秀明 2005「中世鎌倉の土器・陶磁器」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』

永田史子 2014「考古学からみた鎌倉研究の現状と課題」『鎌倉研究の未来』中世都市研究会編 山川出版社

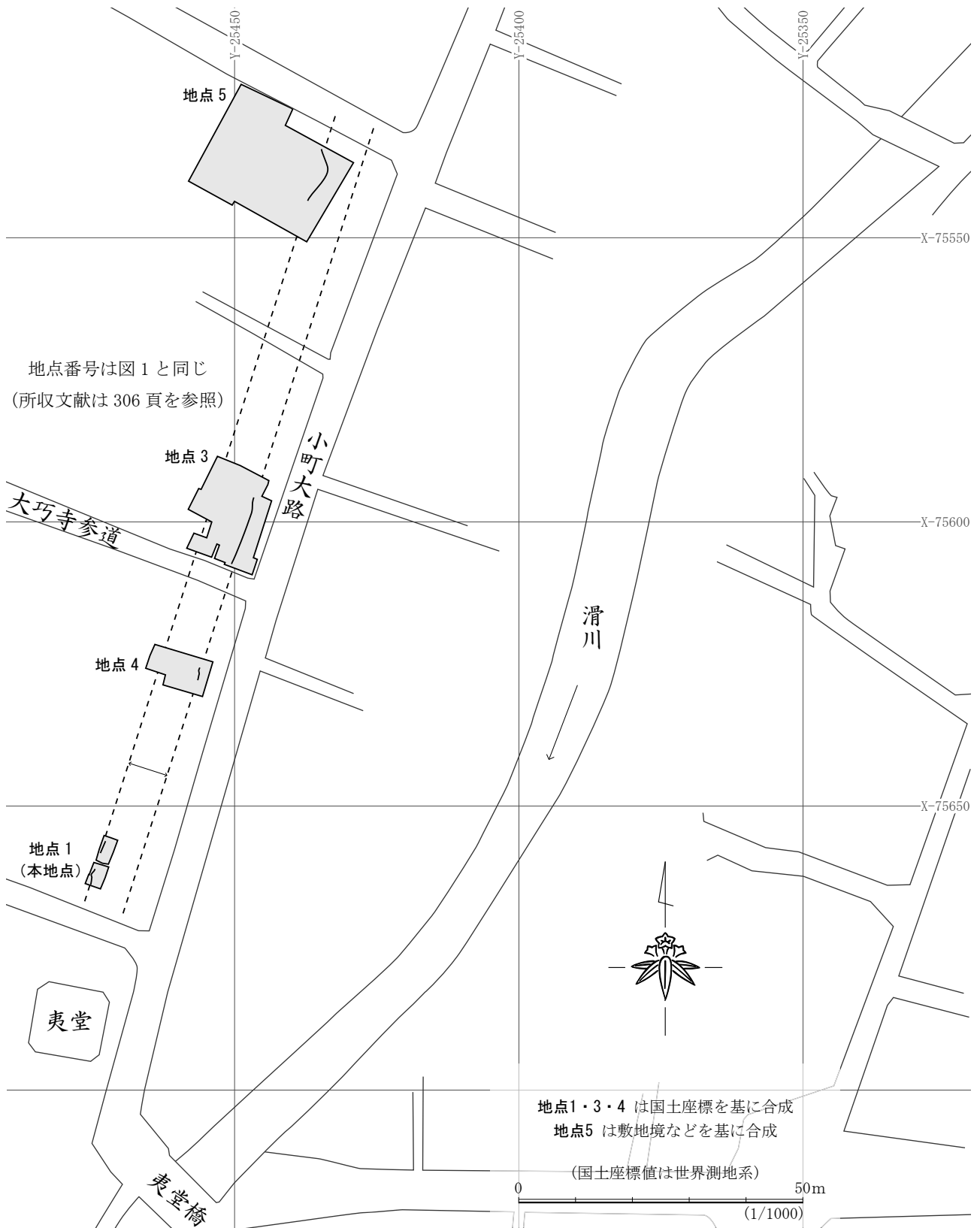


図20 下層南北溝（遺構4）の推定展開図

表2 出土遺物カウント表

種別・産地		ロクロ かわらけ			手づくね かわらけ		白かわらけ		土器		
		大	小	内折れ	大	小	ロクロ ・大	手づくね ・大	鍔釜	不明	火鉢
層位	出土遺構	点数	重量								
表採		5	260	2	85						
表土	表土・攪乱	119	2565	39	660	4	180	1	15		
表土ほか	試掘坑	54	930	26	275						
中世上層								1	5	2	35
中世上層	3(新溝)	254	4490	59	1155	2	10	27	540	2	45
中世上層	9(堅穴)	1	15	1	10	1	15			1	35
中世下層	4(旧溝)	31	1555	39	915			178	5385	52	850
黒色土						8	120	2	15		
青灰色砂											

種別・産地		白磁				青白磁		(同安系) 青磁	(龍泉系) 青磁			
		口兀皿	口兀碗	碗類	瓶類	梅瓶	瓶類	榴描文碗	劃花文碗	蓮弁文碗	碗・皿類	壺類
層位	出土遺構	点数	重量									
表採											2	90
表土	表土・攪乱					1	5		1	5	6	70
表土ほか	試掘坑										1	30
中世上層							1	5	1	10	4	25
中世上層	3(新溝)	4	40	1	15	2	70		1	20	1	10
中世上層	9(堅穴)								1	10	3	30
中世下層	4(旧溝)			1	25	1	25		4	35	1	5
黒色土											1	20
青灰色砂												

種別・産地		瀬戸								
		卸皿	折縁鉢	天目碗	香炉	柄付片口	すり鉢	縁釉小皿	入子	瓶類
層位	出土遺構	点数	重量							
表採		1	60		1	80				
表土	表土・攪乱	2	55	1	35	1	80	1	85	
表土ほか	試掘坑			2	380			1	35	
中世上層		3	95	1	10	1	10			
中世上層	3(新溝)	4	300	2	100			1	115	
中世上層	9(堅穴)							2	60	
中世下層	4(旧溝)			1	15			2	30	
黒色土								5	140	
青灰色砂								1	45	

種別・産地		湖・渥西・美			尾・常張・滑				東播	備前											
		甕	壺	こね鉢	甕	壺	山茶碗	片口鉢 Ⅰ類	片口鉢 Ⅱ類	こね鉢	すり鉢										
層位	出土遺構	点数	重量																		
表採					1	90		1	65	1	185										
表土	表土・攪乱	8	1010	2	110	46	3405	1	245	12	675	19	1955	2	225						
表土ほか	試掘坑					14	1595			3	125	7	410								
中世上層		5	535			135	10930	4	260	24	1605	54	4440	2	55	3	500				
中世上層	3(新溝)	8	385	1	25	1	70	94	7750			1	15	15	785	35	3115			3	180
中世上層	9(堅穴)									1	15										
中世下層	4(旧溝)	6	575			25	1155														
黒色土						2	125	1	30												
青灰色砂																					

種別・産地		瓦器	瓦質土器	瓦	土製品	銅製品		鉄製品・鉄滓										
		碗	火鉢	平瓦	輪羽口	六器	銭	刀子	釘	鉄滓								
層位	出土遺構	点数	重量															
表採							7	28										
表土	表土・攪乱			19	1970	1	300	2	8									
表土ほか	試掘坑			5	690													
中世上層						3	570	1	65	14	53	1	60	5	60			
中世上層	3(新溝)			34	3545	1	415	1	36	21	88			2	10	1	365	
中世上層	9(堅穴)																	
中世下層	4(旧溝)	1	10	2	110													
黒色土																		
青灰色砂																		

種別・産地		石製品			骨角製品			
		滑石鍋	硯	砥石	筭			
層位	出土遺構	点数	重量		点数			
表採								
表土	表土・攪乱			1	50	3	220	
表土ほか	試掘坑							
中世上層		4	275			10	140	
中世上層	3(新溝)			1	65	13	570	2
中世上層	9(堅穴)							
中世下層	4(旧溝)							
黒色土								
青灰色砂								

(表2の凡例)

か ろ く わ ら く ら け			
大	小	内折れ	
点数	重量		
5	260	2	85
119	2565	39	660
54	930	26	275
254	4490	59	1155
1	15	1	10
31	1555	39	915

破片点数 重量 (g)

(木製品・自然遺物は点数のみ)

種別・産地 器種		木製品 ・ 木材													漆器	
		草履芯	箸	折敷	横櫛	扇骨	独楽	曲物	刀子鞘	工具柄	ヘラ状	棒状	円板	板	不明	碗
層位	出土遺構	点数														
表採															1	
表土	表土・攪乱										1		6			
表土ほか	試掘坑															
中世上層		2	5	2			1	2			17	3	18	1		
中世上層	3(新溝)	1	13	11	1			3			21	1	42		1	
中世上層	9(堅穴)		1								11		6			
中世下層	4(旧溝)	8	155	4	1	2		3	1	1	90	1	58			2
黒色土																
青灰色砂																

種別・産地 器種		人骨		獣骨		種子	
		頭蓋	不明	ウシ・ウマ	魚類	桃核	胡桃核
層位	出土遺構	点数					
表採							
表土	表土・攪乱		5		2		
表土ほか	試掘坑		1				
中世上層			17		2		
中世上層	3(新溝)	1	22			6	1
中世上層	9(堅穴)						
中世下層	4(旧溝)		1				1
黒色土							
青灰色砂							

種別・産地 器種		具																		
		不明	アカニシ	サザエ	バイ	ツメタ	ダンベイキサゴ	ツノマタナガニシ	ウミニナ	カガミガイ	アワビ	カキ	バテイラ	ハマグリ	チヨウセンハマグリ	アサリ	カラスガイ	サクラガイ	サルボウガイ	シオフキガイ
層位	出土遺構	点数																		
表採																				
表土	表土・攪乱		2	2	1	2							1	1						1
表土ほか	試掘坑																		1	
中世上層			10	6	2	20	5					1	1	20	1				2	
中世上層	3(新溝)		33	13	1	36	6		2	3		2	1	68		5			4	1
中世上層	9(堅穴)													1						
中世下層	4(旧溝)		15	7	2		3	1	3	4	1	1	2	159	1					1
黒色土																				
青灰色砂						2			1									1	1	

表3 出土遺物観察表

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
表土など出土遺物① (図8)						
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.5	2.0	2/3 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
2	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.5	3.3	略完形 [50]g 胎土:白色針状物質 色調:褐色
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	4.3	2.8	1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
4	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.3)	(8.3)	3.5	1/3 胎土:泥岩粒 色調:淡黄褐色
5	陶器	転用陶片 (すり常滑)	長さ 9.4	幅 8.5	厚さ 1.2	胎土:長石粒 色調:褐灰色～暗褐色 常滑甕の胴部片を転用
6	陶器	瀬戸 折縁深皿	(21.7)	(10.7)	5.2	1/3 胎土:精良 色調:白黄色 釉調:緑白色(灰釉)
7	瓦質土器	火鉢	—	—	[7.9]	口小片 胎土:精良、細砂粒 色調:胎土淡灰黄色、器表黒色 外面に菊花文印+貼り付け連珠文 IVa類
8	土器	ロクロ かわらけ・小	8.6	7.2	1.8	1/2 胎土:砂質 色調:淡褐灰色
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	5.4	1.7	略完形 [49]g 胎土:緻密 色調:淡黄褐色
10	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.7	2.2	3/4 胎土:白色針状物質 色調:淡黄色橙色 外底面の板状圧痕なし
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	2.3	4/5 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡黄褐色
12	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(5.4)	2.4	1/3 胎土:雲母・白色針状物質 色調:淡黄褐色
13	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	5.0	2.4	3/4 胎土:雲母・白色針状物質 色調:淡黄褐色
14	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	6.3	2.9	略完形 [89]g 胎土:精良、白色針状物質・雲母 色調:淡褐灰色
15	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.6)	6.8	3.3	1/3 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
16	陶器	常滑 甕	—	—	[10.5]	口小片 胎土:長石粒 色調:淡橙褐色～暗褐色 8型式(1350～1400頃)
17	陶器	瀬戸 片口鉢	—	—	[4.2]	口小片 胎土:白色礫微量 色調:灰色 (尾張・山茶碗系)
18	陶器	常滑 片口鉢II類	—	—	[6.5]	口小片 胎土:長石粒 色調:赤褐色 8～9型式(1350～1450頃)
19	陶器	常滑 片口鉢II類	—	—	[7.4]	口小片 胎土:長石粒多量 色調:暗赤褐色
20	陶器	備前 すり鉢	(26.4)	(12.0)	14.8	1/8以下 胎土:白色粗砂粒多量、縞状の練り痕 色調:暗赤褐色
21	陶器	瀬戸 天目茶碗	(12.8)	—	[6.0]	口～体1/3 胎土:精良、黒色微粒 色調:黄白色 釉調:暗褐色(鉄釉)
22	陶器	瀬戸 縁釉小皿	(12.4)	—	[2.2]	口1/5 胎土:精良 色調:淡黄灰色 釉調:緑灰色(灰釉) 古瀬戸後期様式III～IV期・15世紀前半～中葉
23	陶器	瀬戸 平碗	—	4.7	[2.8]	底部のみ 胎土:精良 色調:白黄色 釉調:淡緑灰色(灰釉) ケズリ出し高台、体部外面回転ヘラケズリ
24	磁器	青磁 碗	—	(5.7)	[2.0]	底部1/2以下 胎土:精良、黒色微砂粒・気泡微量 色調:灰色 釉調:淡緑色 高台内回転ヘラケズリ 龍泉窯系
25	土製品	鞆羽口	長さ 7.2	直径 7.4	孔径 3.0	[302]g 炉体接続部が黒変、ガラス質溶解
表土など出土遺物② (図9)						
26	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	開元通寶 中国唐代・621年初鑄
27	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.1	太平通寶 中国北宋代・976年初鑄
28	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	淳化元寶 中国北宋代・990年初鑄
29	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.6	厚さ 0.1	祥符元寶 中国北宋代・1009年初鑄
30	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	天聖元寶 中国北宋代・1023年初鑄
31	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
32	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄
33	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元祐通寶 中国北宋代・1086年初鑄
34	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	政和通寶 中国北宋代・1111年初鑄
中世上層 出土遺物① (図10)						
35	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	口小片、傾き不明 胎土:長石粒 色調:暗赤褐色
36	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.3)	2.1	1/3 胎土:白色針状物質・泥岩粒 色調:淡黄褐色 灯明皿、器面の剥落目立つ
37	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	4.0	2.3	2/3 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
38	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	6.7	3.3	略完形 [135]g 胎土:白色針状物質 色調:黄褐色
39	陶器	瀬戸 入れ子	5.2	3.3	1.6	4/5 胎土:精良 色調:灰白色 口縁部内外面に自然釉 焼成時の黒斑あり
40	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.7	2.2	4/5 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
41	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	4.6	2.1	3/4 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
42	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.2	2.3	完形 49g 胎土:精良 色調:淡黄褐色 灯明皿、口唇部に小さい打ち欠き5ヶ所
43	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.8	2.4	完形 60g 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
44	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.4	2.4	完形 60g 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
45	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.8	2.0	略完形 [51]g 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
46	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.7	2.1	3/4 胎土:精良、白色針状物質、雲母 色調:淡黄褐色 灯明皿
47	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.7	2.1	4/5 胎土:泥岩粒 色調:にぶい橙褐色
48	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.8	1.9	3/4 胎土:白色針状物質 色調:淡褐色
49	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.8	1.7	完形 42g 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
50	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	4.9	2.0	4/5 胎土:白色針状物質・スコリア 色調:にぶい褐色
51	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.2	1.8	完形 50g 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
52	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.1	1.8	4/5 胎土:白色針状物質、粗雑 色調:淡黄褐色
53	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.6	1.7	略完形 [55]g 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
54	土器	ロクロ かわらけ・中	(9.8)	(6.0)	2.8	1/5 胎土:白色針状物質 色調:橙色
55	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	(6.1)	2.7	1/5 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡黄褐色
56	土器	ロクロ かわらけ・中	10.8	6.8	3.0	略完形 [106]g 胎土:雲母微量 色調:淡黄褐色
57	土器	ロクロ かわらけ・大	12.0	7.9	3.3	3/4 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
58	土器	ロクロ かわらけ・大	13.3	7.9	3.6	4/5 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
59	土器	ロクロ かわらけ・大	12.3	7.1	3.8	3/4 胎土:白色針状物質 色調:淡黄色橙色 灯明皿
60	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.8)	(7.3)	3.0	1/5 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
61	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	7.0	3.8	完形 184g 胎土:泥岩粒・白色針状物質 色調:淡黄褐色
62	土器	ロクロ かわらけ・大	12.2	7.5	3.5	3/4 胎土:白色針状物質、粗砂粒 色調:淡黄褐色 灯明皿
63	土器	手づくね かわらけ・小	8.9	—	1.7	完形 62g 胎土:砂質、白色針状物質 色調:橙褐色 内面薄く黒変
64	土器	手づくね かわらけ・小	(9.4)	—	1.5	1/3 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡黄褐色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
65	土器	手づくね かわらけ・小	(9.7)	—	1.7	1/3 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡黄褐色
66	土器	手づくね かわらけ・小	(9.6)	—	1.9	1/2弱 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡黄褐色
67	土器	手づくね かわらけ・小	9.4	—	2.5	4/5 胎土:やや砂質、白色針状物質 色調:にぶい褐色 内外面とも薄く黒変
68	土器	手づくね かわらけ・大	14.0	—	3.8	略完形 [241]g 胎土:細砂粒多量、白色針状物質 色調:黄褐色
69	土器	手づくね かわらけ・大	(12.2)	—	3.0	1/4 胎土:砂質 色調:淡褐色
70	土器	手づくね かわらけ・大	(14.2)	—	2.9	1/6 胎土:やや砂質 色調:淡灰黄色
71	陶器	尾張 片口鉢	(29.0)	—	[8.3]	口1/8 胎土:長石粒多量、黒色の鈹物粒が器面に表出 色調:灰色 瀬戸産か
72	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(29.2)	—	[6.9]	口1/6 胎土:長石粒多量 色調:淡橙褐色 口縁内面に煤付着
73	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	口小片、傾き不詳 胎土:長石粒多量、粗雑 色調:赤褐色 9型式(1400~1450年頃)
74	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	—	体小片、傾き不明 胎土:長石粒微量、やや砂質 色調:暗褐色 体部内面に菊花文スタンプ→使用により滑らか
75	陶器	瀬戸 天目茶碗	—	—	[2.9]	口小片 胎土:精良 色調:灰白色 釉調:黒褐色(鉄釉)
76	陶器	東播 こね鉢	—	—	[3.0]	口小片 胎土:黒色砂粒、粗雑 色調:灰色~灰白色 口縁部外面が黒変(焼成時)
中世上層 出土遺物② (図11)						
77	陶器	備前 すり鉢	(36.7)	—	[10.7]	口1/6 胎土:白色粗砂粒 色調:赤褐色 内面に8条一単位の櫛目 内面に墨画(蓮華?)
78	陶器	備前 すり鉢	—	—	[3.5]	口小片 胎土:白色砂粒少量、精良 色調:暗赤褐色 内面に6条一単位の櫛目、自然釉
79	磁器	青磁 劃花文碗	—	—	[2.8]	口小片 胎土:精良 色調:灰白色 釉調:緑灰色 内面に片切り彫りの蓮華文 龍泉窯系・大宰府焼Ⅰ-2a類
80	瓦質土器	火鉢	—	—	[10.5]	口小片 胎土:粗砂粒 色調:灰白色~灰黒色 口縁部内外面ヨコヘラミガキ I d類
81	石製品	砥石 (仕上げ砥)	長さ [7.6]	幅 2.9	厚さ 0.8	1/2 鳴滝産・流紋岩質細粒凝灰岩
82	石製品	砥石 (仕上げ砥)	長さ [7.3]	幅 3.7	厚さ 3.1	1/2 伊豆半島・合掌寺砥 薄桃色
83	石製品	滑石鍋	長さ 10.9	幅 3.6	厚さ 2.7	再加工品、用途不明 表面にノミ状工具痕
84	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	咸平元寶 中国北宋代・998年初鑄
85	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	銭文不明
86	木製品	刀子鞘	長さ [7.2]	幅 2.2	厚さ 0.7	残存率不明 板目材2枚を組み合わせ
87	木製品	曲物 底or蓋	長さ 21.8	厚さ 1.0		1/2 柾目材 側辺に木釘2ヶ所
88	木製品	扇骨	長さ [26.5]	幅 1.8	厚さ 0.9	2本遺存 板目材
89	木製品	有孔円板	直径 9.2	厚さ 1.1	孔径 [0.2]	1/2 板目材 上面外縁部を面取り
90	木製品	有孔円板	直径 1.6	厚さ 0.1	孔径 0.1	完形 板目材
91	木製品	有孔円板	直径 2.3	厚さ 0.3	孔径 0.2	完形 柾目材
92	木製品	用途不明	長さ 18.7	幅 3.4	厚さ 2.4	完形? 板目材 直径4mmの貫通孔あり(木釘で埋没)
中世上層 出土遺物③ (図12)						
93	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.2)	5.2	2.1	2/3 胎土:精良 色調:淡黄褐色
94	陶器	常滑 蔦口壺	—	(7.8)	[7.8]	1/2弱 回転台成形 内底面と肩部外面に自然釉
95	陶器	常滑 甕	—	—	[16.9]	口小片 胎土:長石粒・黒色微粒 色調:暗赤褐色 9型式(1400~1450頃)
96	陶器	東磐系 こね鉢	—	—	[3.5]	口小片 胎土:細砂粒・白色粗砂粒 色調:灰色 口縁部外面黒変(焼成時)

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
97	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	開元通寶 中国唐代・621年初鑄
98	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	開元通寶 中国唐代・621年初鑄
99	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	咸平元寶 中国北宋代・998年初鑄
100	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	天禧通寶 中国北宋代・1017年初鑄
101	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.8	厚さ 0.1	天聖元寶 中国北宋代・1023年初鑄
102	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄
103	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	嘉祐通寶 中国北宋代・1056年初鑄
104	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	熙寧元寶 中国北宋代・1068年初鑄
105	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元符通寶 中国北宋代・1098年初鑄
106	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	嘉定通寶 中国南宋代・1208年初鑄
107	木製品	独楽	直径 (1.8)	高さ [1.6]	軸高 [0.6]	1/2 榎目材
108	木製品	箸	長さ 23.8	幅 0.7	厚さ 0.7	完形
109	木製品	箸	長さ 22.1	幅 0.5	厚さ 0.7	完形
110	木製品	箸	長さ 20.4	幅 0.7	厚さ 0.7	完形
111	木製品	箸	長さ 19.9	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
中世上層 遺構3 出土遺物① (図13)						
112	土器	ロクロ かわらけ	(4.6)	3.4	0.8	内折れ 1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡灰褐色
113	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.5	2.2	完形 44g 胎土:精良 色調:淡黄褐色
114	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.9)	(3.4)	2.1	2/5 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
115	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.8	2.0	4/5 胎土:精良 色調:黒褐色
116	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.3	2.1	完形 55g 胎土:白色針状物質 色調:橙褐色 灯明皿
117	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.3	1.7	完形 57g 胎土:精良 色調:暗黄褐色
118	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	5.0	1.5	1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡褐灰色
119	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	4.9	1.9	2/3 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡黄褐色
120	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(7.4)	1.7	1/4 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
121	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.0)	6.7	2.3	2/3 胎土:砂質 色調:褐灰色
122	土器	ロクロ かわらけ・小	9.7	7.1	2.3	略完形 [107]g 胎土:砂質、白色針状物質 色調:橙褐色 底部回転糸切り痕緩い
123	土器	ロクロ かわらけ・小	10.4	7.7	2.3	4/5 胎土:砂質 色調:橙褐色
124	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	7.5	3.2	1/3 胎土:泥岩粒・白色針状物質 色調:淡黄褐色
125	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.2)	6.8	3.4	1/2 胎土:雲母微量、精良 色調:淡黄褐色
126	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.9)	(5.6)	3.1	1/4 胎土:砂質、白色針状物質・雲母 色調:淡褐灰色 薄手丸深形
127	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.0)	7.5	3.2	2/3 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
128	土器	ロクロ かわらけ・大	(11.7)	(7.2)	3.4	1/5 胎土:雲母微量 色調:淡黄褐色
129	土器	ロクロ かわらけ・大	(12.9)	7.0	3.1	2/3 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
130	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.6)	(7.9)	3.4	1/4 胎土:白色針状物質 色調:淡褐灰色
131	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.9)	8.3	3.4	2/3 胎土:白色針状物質 色調:淡黄褐色
132	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	(7.2)	3.8	1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡褐灰色
133	土器	ロクロ かわらけ	14.0	8.0	3.4	3/4 胎土:砂質、白色針状物質・雲母 色調:淡灰褐色
134	土器	手づくね かわらけ・小	(9.9)	—	1.8	1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡褐灰色
135	土器	手づくね かわらけ・大	13.3	—	3.1	略完形 [192]g 胎土:精良 色調:淡褐灰色
136	土器	手づくね かわらけ・大	13.8	—	3.7	4/5 胎土:砂質 色調:橙色 灯明皿
137	土器	手づくね かわらけ・大	13.8	—	3.7	3/4 胎土:精良、白色針状物質 色調:褐灰色
138	陶器	常滑 広口壺	(19.5)	—	[7.4]	1/8 胎土:精良、長石粒 色調:褐灰色 7型式(1300~1350頃)
139	陶器	常滑 甕	—	—	[5.1]	口小片 胎土:精良、長石粒微量 色調:黒灰色
140	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[7.4]	口小片 胎土:長石粒 色調:暗赤褐色 8型式(1350~1400頃)
141	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[6.3]	口小片 胎土:長石粒 色調:暗褐色 9型式(1400~1450頃)?
142	陶器	転用陶片 (すり常滑)	長さ 9.0	幅 8.0	厚さ 1.2	胎土:長石粒微量 色調:暗赤褐色 常滑片口鉢Ⅱ類の口縁を転用 8型式(1350~1400頃)
143	陶器	瀬戸 卸皿	(15.6)	(11.6)	4.0	1/5 胎土:精良、白色礫微量 色調:灰色 釉調:淡緑灰色(灰釉) 古瀬戸前期様式Ⅲ期(13世紀第2四半期頃)
144	陶器	備前 すり鉢	—	—	[5.9]	口小片 胎土:白色砂粒微量、黒色粒子の表出目立つ 色調:灰色~赤褐色
145	磁器	青磁 劃花文碗	—	—	[4.3]	口小片 胎土:精良 色調:暗灰色 釉調:緑灰色 龍泉窯系・大宰府碗Ⅰ-2類 内面に片切り彫りの劃花文
146	土製品	鞆羽口	長さ 11.0	直径 7.1	孔径 2.9	炉体接続部が黒変、ガラス質熔解
147	石製品	硯	長さ 6.1	幅 (6.1)	厚さ 1.1	4/5 赤間産・紫金石正方形面硯
148	石製品	砥石 (仕上げ砥)	長さ [6.6]	幅 3.7	0.8	1/2 桃白色 鳴滝産・流紋岩質細粒凝灰岩
149	石製品	砥石 (仕上げ砥)	長さ [5.3]	幅 3.6	厚さ [0.5]	1/2以下 表1面以上使用 桃白色 鳴滝産・流紋岩質細粒凝灰岩
150	石製品	砥石 (仕上げ砥)	長さ [3.4]	幅 3.2	厚さ 1.1	1/2以下 表裏2面使用 桃白色 鳴滝産・流紋岩質細粒凝灰岩
151	石製品	砥石 (中炉)	長さ [7.2]	幅 3.4	厚さ 3.2	両端欠損 面使用 黄白色 伊豆半島・合掌寺砥
152	石製品	砥石 (中砥)	長さ [6.6]	幅 5.7	厚さ 2.8	1/2以下 表裏2面使用 暗灰色 砂岩
中世上層 遺構3 出土遺物② (図14)						
153	骨製品	筭	長さ [12.2]	幅 1.4	厚さ 0.3	先端部欠損
154	骨製品	筭	長さ 12.2	幅 1.8	厚さ 0.4	未完成、刀子によるケズリ痕を残す
155	木製品	曲物 底or蓋	直径 20.2	厚さ 0.9		一部欠損 柁目材 組板に転用
156	木製品	箸	長さ 21.4	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
157	木製品	箸	長さ 19.3	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
158	木製品	草履芯	長さ 24.4	幅 [4.9]	厚さ 0.5	1/2 板目材
中世上層 遺構3 出土遺物③ (図15)						
159	銅製品	六器	6.3	2.8	2.9	完形 36.1g
160	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	祥符通寶 中国北宋代・1009年初鑄
161	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	祥符元寶 中国北宋代・1009年初鑄

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
162	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	天聖元寶 中国北宋代・1023年初鑄
163	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	天聖元寶 中国北宋代・1023年初鑄
164	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	天聖元寶 中国北宋代・1023年初鑄
165	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	明道元寶 中国北宋代・1032年初鑄
166	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	景祐元寶 中国北宋代・1034年初鑄
167	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	景祐元寶 中国北宋代・1034年初鑄
168	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄
169	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄
170	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄
171	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	皇宋通寶 中国北宋代・1037年初鑄
172	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.8	厚さ 0.1	嘉祐通寶 中国北宋代・1056年初鑄
173	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	熙寧元寶 中国北宋代・1068年初鑄
174	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元豊通寶 中国北宋代・1078年初鑄
175	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元豊通寶 中国北宋代・1078年初鑄
176	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元祐通寶 中国北宋代・1086年初鑄
177	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.8	厚さ 0.1	元祐通寶 中国北宋代・1086年初鑄
178	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.7	厚さ 0.1	元祐通寶 中国北宋代・1086年初鑄
179	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.6	厚さ 0.1	紹聖元寶 中国北宋代・1094年初鑄
180	銅製品	銭	直径 2.3	孔径 0.7	厚さ 0.1	聖宋元寶 中国北宋代・1101年初鑄
181	銅製品	銭	直径 2.5	孔径 0.6	厚さ 0.1	宣和通寶 中国北宋代・1119年初鑄
中世上層 遺構8 出土遺物 (図16)						
182	土器	ロクロ かわらけ	(4.1)	(3.1)	0.9	内折れ 1/2 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
183	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.4	1.9	略完形 [70]g 胎土:白色針状物質 色調:淡褐色 灯明皿
184	陶器	瀬戸 入れ子	(7.0)	(4.4)	1.9	1/6 胎土:精良 色調:灰白色 内面に自然釉、滑らかで紅が薄く残る
185	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.0	2.2	完形 49g 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色 灯明皿
186	土器	ロクロ かわらけ・大	13.5	7.8	3.9	略完形 [192]g 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡黄褐色
187	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	7.9	3.5	2/3 胎土:雲母微量 色調:淡黄褐色
188	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(35.5)	—	[10.4]	口1/6 胎土:長石粒多量 色調:淡黄褐色
189	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	—	—	[8.3]	体～底小片 胎土:長石粒多量 色調:橙褐色 内面にヘラ書き記号「×」
190	陶器	瀬戸 腰袴形香炉	(10.6)	(4.0)	7.1	1/3 胎土:やや空気入る 色調:灰白色 釉調:黒褐色(鉄釉) 古瀬戸中期様式Ⅱ～Ⅲ期(14世紀前半) 三足付きか
191	土器	羽釜	—	—	[5.2]	口小片 胎土:細砂粒多量・雲母 色調:灰色～灰桃色
192	石製品	砥石 (中砥)	長さ [5.9]	幅 3.0	厚さ 1.9	1/2弱か 淡緑色 上野産・流紋岩質凝灰岩
193	石製品	砥石 (仕上げ砥)	長さ [5.5]	幅 3.5	厚さ [0.6]	1/2弱か 鳴滝産・流紋岩質細粒凝灰岩 薄桃色
194	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.7	厚さ 0.1	元豊通寶 中国北宋代・1078年初鑄

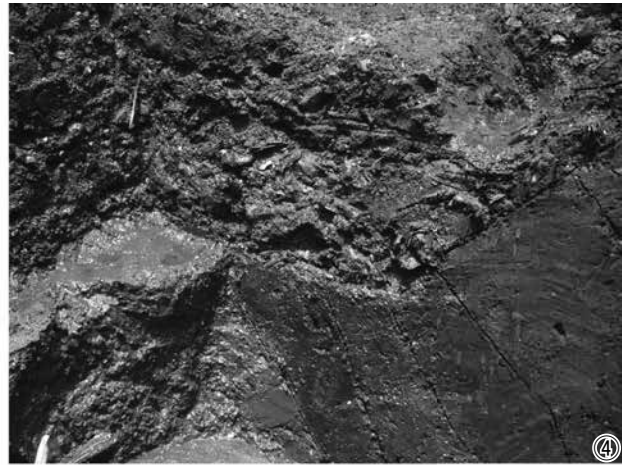
番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
中世上層 遺構9 出土遺物 (図17)						
195	陶器	瀬戸 四耳壺	(9.7)	—	[5.0]	口1/8 胎土:精良 色調:灰白色 釉調:淡灰色(灰釉) 古瀬戸前期様式Ⅲ期(13世紀第3四半期頃)?
196	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	—	—	—	口小片、傾き不明 胎土:長石粒 色調:灰色 (尾張・山茶碗系)
197	木製品	有孔円板	直径 2.2	厚さ 0.1	孔径 0.1	完形 柱目材
198	木製品	有孔円板	直径 1.7	厚さ 0.5	孔径 0.1	完形 柱目材
199	木製品	箸	長さ 19.6	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
中世下層 遺構4 出土遺物① (図18)						
200	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.0)	(8.2)	1.7	1/2弱 胎土:砂質 色調:淡橙褐色 外底面の回転糸切り痕緩い
201	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.8)	(7.6)	1.9	1/3 胎土:白色針状物・雲母 色調:淡褐色
202	土器	ロクロ かわらけ・小	(9.0)	(7.7)	1.6	1/2弱 胎土:砂質 色調:淡黄橙色
203	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.5)	9.3	3.3	2/3 胎土:砂質 色調:淡黄橙色
204	土器	ロクロ かわらけ・大	14.1	9.7	3.3	2/3 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡黄橙色
205	土器	手づくね かわらけ・小	(9.3)	—	1.9	2/3 胎土:白色針状物質・雲母 色調:淡褐色
206	土器	手づくね かわらけ・小	(9.7)	—	2.2	3/4 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡黄橙色
207	土器	手づくね かわらけ・小	9.7	—	2.0	3/4 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡橙褐色
208	土器	手づくね かわらけ・小	9.3	—	2.2	4/5 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡褐色
209	土器	手づくね かわらけ・小	9.7	—	1.9	2/3 胎土:白色針状物質・泥岩粒 色調:淡黄橙色
210	土器	手づくね かわらけ・小	(9.0)	—	1.9	1/2弱 胎土:砂質、白色針状物質 色調:淡黄橙色
211	土器	手づくね かわらけ・大	(14.0)	—	3.4	1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡黄橙色
212	土器	手づくね かわらけ・大	(14.5)	—	4.0	1/2弱 胎土:白色針状物質 色調:にぶい褐色
213	土器	手づくね かわらけ・大	(14.0)	—	2.8	1/3 胎土:白色針状物質 色調:淡褐色
214	土器	手づくね かわらけ・大	(12.6)	—	2.8	1/3 胎土:精良 色調:淡黄橙色
215	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	—	—	[2.7]	口小片 胎土:長石粒 色調:灰色 (尾張・山茶碗系)
216	陶器	瀬戸 折縁小皿?	—	(4.8)	[1.1]	底1/3 胎土:精良 色調:淡灰黄色 釉調:白黄色(灰釉)
217	磁器	青磁 劃花文碗	—	—	[3.4]	口小片 胎土:精良 色調:暗灰色 釉調:緑灰色 龍泉窯系・大宰府碗Ⅰ-2類 内面に片切り彫りの蓮華文
218	瓦器	碗	(11.8)	—	[4.0]	口1/8 胎土:精良、層状に剥離 色調:胎土灰色、器面黒色 体部外面指頭痕、内面回転ナデ→粗いヨコヘラミガキ
219	木製品	折敷?	長さ 34.0	幅 [6.5]	厚さ 0.3	1/4程度? 柱目材 一面に墨痕?
220	木製品	箸	長さ 26.3	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
221	木製品	箸	長さ 25.4	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
222	木製品	箸	長さ 24.8	幅 0.6	厚さ 0.5	完形
223	木製品	箸	長さ 24.8	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
224	木製品	箸	長さ 24.4	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
225	木製品	箸	長さ 23.3	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
226	木製品	箸	長さ 23.0	幅 0.8	厚さ 0.6	完形

番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
			口径	底径	器高	
227	木製品	箸	長さ 22.4	幅 0.7	厚さ 0.6	完形
228	木製品	箸	長さ 21.8	幅 0.5	厚さ 0.6	完形
229	木製品	箸	長さ 21.7	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
230	木製品	箸	長さ 21.2	幅 0.6	厚さ 0.7	完形
231	木製品	箸	長さ 21.1	幅 0.5	厚さ 0.6	完形
232	木製品	箸	長さ 20.0	幅 0.6	厚さ 0.6	完形
233	木製品	箸	長さ 19.7	幅 0.7	厚さ 0.5	完形
234	木製品	箸	長さ 19.3	幅 0.6	厚さ 0.4	完形
235	木製品	草履芯	長さ 23.0	幅 [4.2]	厚さ 0.4	1/2以下 板目材
236	木製品	用途不明	長さ 28.9	幅 2.0	厚さ 0.9	完形? 板目材
237	土器	ロクロ かわらけ・小	9.2	7.7	2.0	略完形 [92]g 胎土:砂質 色調:淡黄橙色
238	土器	ロクロ かわらけ・小	9.0	7.5	2.1	完形(破片接合) 65g 胎土:砂質 色調:淡橙色～淡褐灰色 外底面に板状圧痕なし
239	土器	ロクロ かわらけ・小	9.0	7.1	2.2	完形 71g 胎土:砂質 色調:淡橙色
240	土器	ロクロ かわらけ・大	14.3	10.0	3.3	完形 241g 胎土:砂質、雲母微量 色調:淡黄橙色 体部外面に手づくね風の指頭痕残る
241	土器	ロクロ かわらけ・大	14.2	9.5	3.5	略完形 [225]g 胎土:砂質 色調:内面淡黒灰色、外面淡黄橙色 体部外面に手づくね風の指頭痕残る 外底面の板状圧痕なし
242	土器	ロクロ かわらけ・大	14.2	9.5	3.5	完形 245g 胎土:砂質、雲母微量 色調:淡黄橙色 体部外面に手づくね風の指頭痕残る 外底面の板状圧痕なし
243	土器	手づくね かわらけ・大	13.9	—	3.4	4/5 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡黄橙色
244	土器	手づくね かわらけ・大	13.5	—	2.8	4/5 胎土精良 色調:淡褐灰色 内外面とも全体に黒変
245	土器	白かわらけ 手づくね・大	(12.7)	—	[2.7]	1/8 胎土:精良 色調:白桃色
中世下層 遺構4 出土遺物② (図19)						
246	土器	手づくね かわらけ・小	8.1	—	1.6	完形 54g 胎土:白色針状物質 色調:淡橙色
247	土器	手づくね かわらけ・小	(8.4)	—	1.8	1/4 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡橙色
248	土器	手づくね かわらけ・大	(14.8)	—	(3.6)	1/6 胎土:精良、白色針状物質 色調:淡褐灰色 口縁部二段ナデ
249	陶器	常滑 甕	—	—	[7.0]	口小片 胎土:長石粒 色調:黒灰色～暗褐色 3型式(12世紀末頃)
250	陶器	渥美・湖西 子持ち器台?	3.5	2.7	[1.4]	子皿部分のみ完存
251	銅製品	銭	直径 2.4	孔径 0.8	厚さ 0.1	熙寧元寶 中国北宋代・1068年初鑄
252	鉄製品	釘	長さ 7.7	幅 0.5	厚さ 0.5	完形 上層 遺構3出土
253	鉄製品	釘	長さ 4.6	幅 0.3	厚さ 0.5	頭部欠 上層 遺構3出土
254	木製品	漆器 皿	(9.9)	8.1	1.0	1/4 内外面黒色系漆塗り→内面朱漆の花弁文(印判)
255	木製品	漆器 椀	—	6.3	1.4	底部のみ 内外面黒色系漆塗り→内面朱漆の花弁文(手書き)
256	木製品	横櫛	幅 [6.0]	高さ 4.2	厚さ 1.0	1/3 表面全体を黒色系漆塗り



- ① 現地調査前（南西から）
- ② I区表土掘削状況（南西から）
- ③ I区中世上層遺構3（南から）
- ④ 同上 板材検出状況（北東から）
- ⑤ 同上 杭列検出状況（北東から）
- ⑥ I区中世上層遺構3完掘状況（北から）
- ⑦ 同上（北東から）

図版2



- ① I区中世下層 遺構4 (北から)
- ② 同上 (南から)
- ③ I区中世上層 遺構3 断面 (南から)
- ④ I区 遺構3 - 遺構4間の切り合い (南から)
- ⑤ II区表土掘削後 凝灰岩切石出土状況
(北から)
- ⑥ I区中世上層 漆器皿塗膜 出土状況
- ⑦ I区中世上層出土 漆器皿塗膜

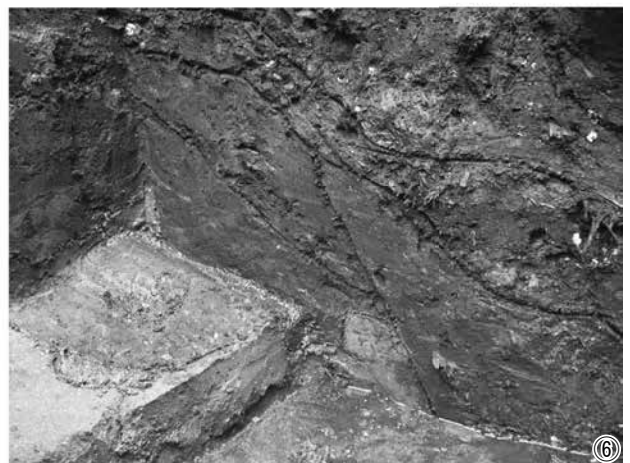




- ① II区 遺物包含層除去後（北から）
- ② II区中世上層 遺構3（北から）
- ③ II区中世上層 遺構3 護岸材検出状況
（北東から）
- ④ 同上（東から）
- ⑤ II区中世上層 遺構3
護岸材下 六器出土状況（北西から）
- ⑥ 同上（西から）
- ⑦ 同上・アップ（西から）



図版4



- ① II区中世上層遺構9・下層遺構4検出状況
(北東から)
- ② II区中世上層遺構9調査区西壁断面
(東から)
- ③ II区北壁断面(南から)
- ④ II区南壁断面(北から)
- ⑤ II区中世上層遺構9土台材(南から)
- ⑥ II区中世下層遺構4西岸断面(南東から)
- ⑦ II区中世下層遺構4調査区南壁断面
(北から)



① II区中世上層 遺構9 土台材アップ (東から)

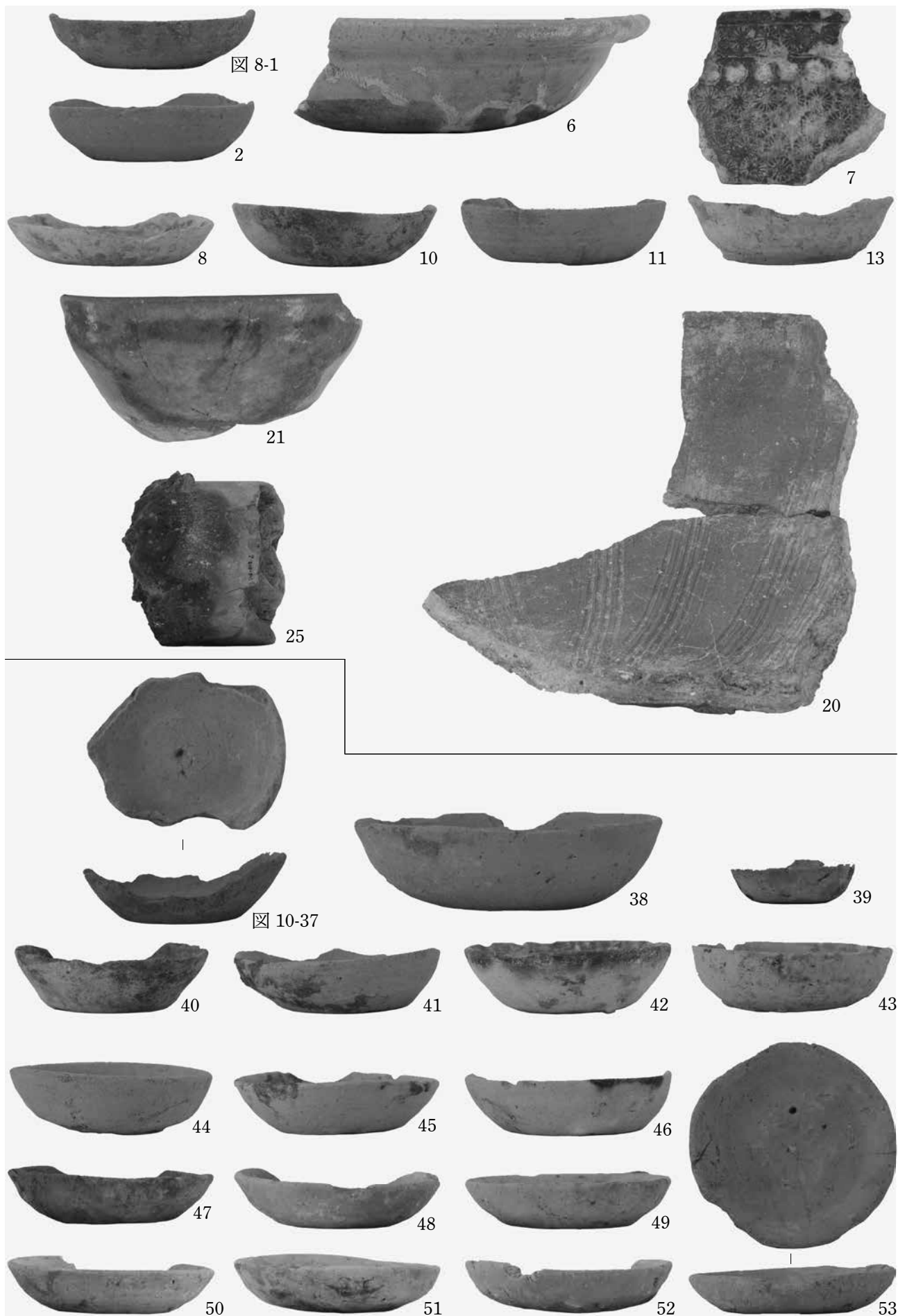


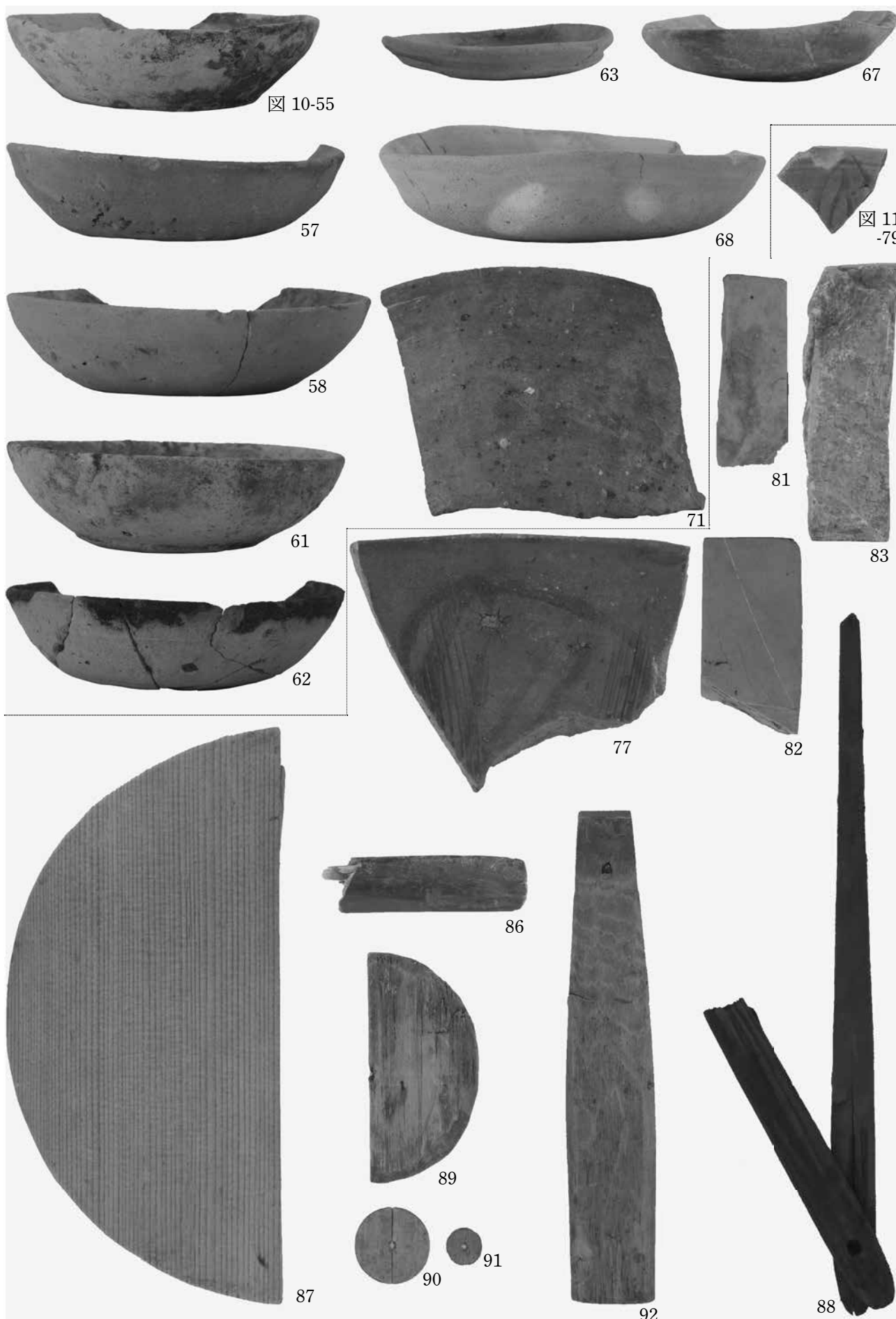
② II区中世上層 遺構9 調査区西壁断面

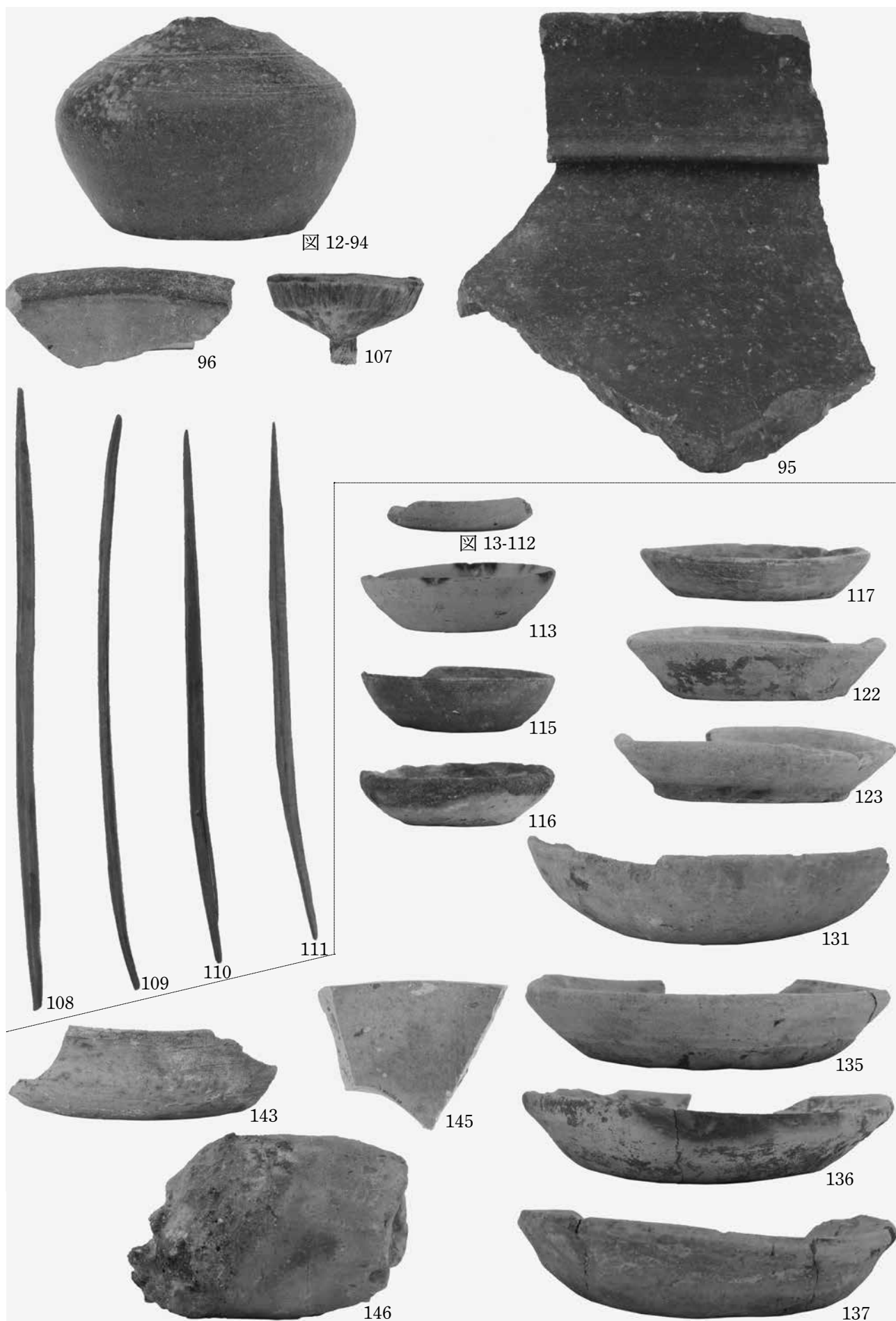


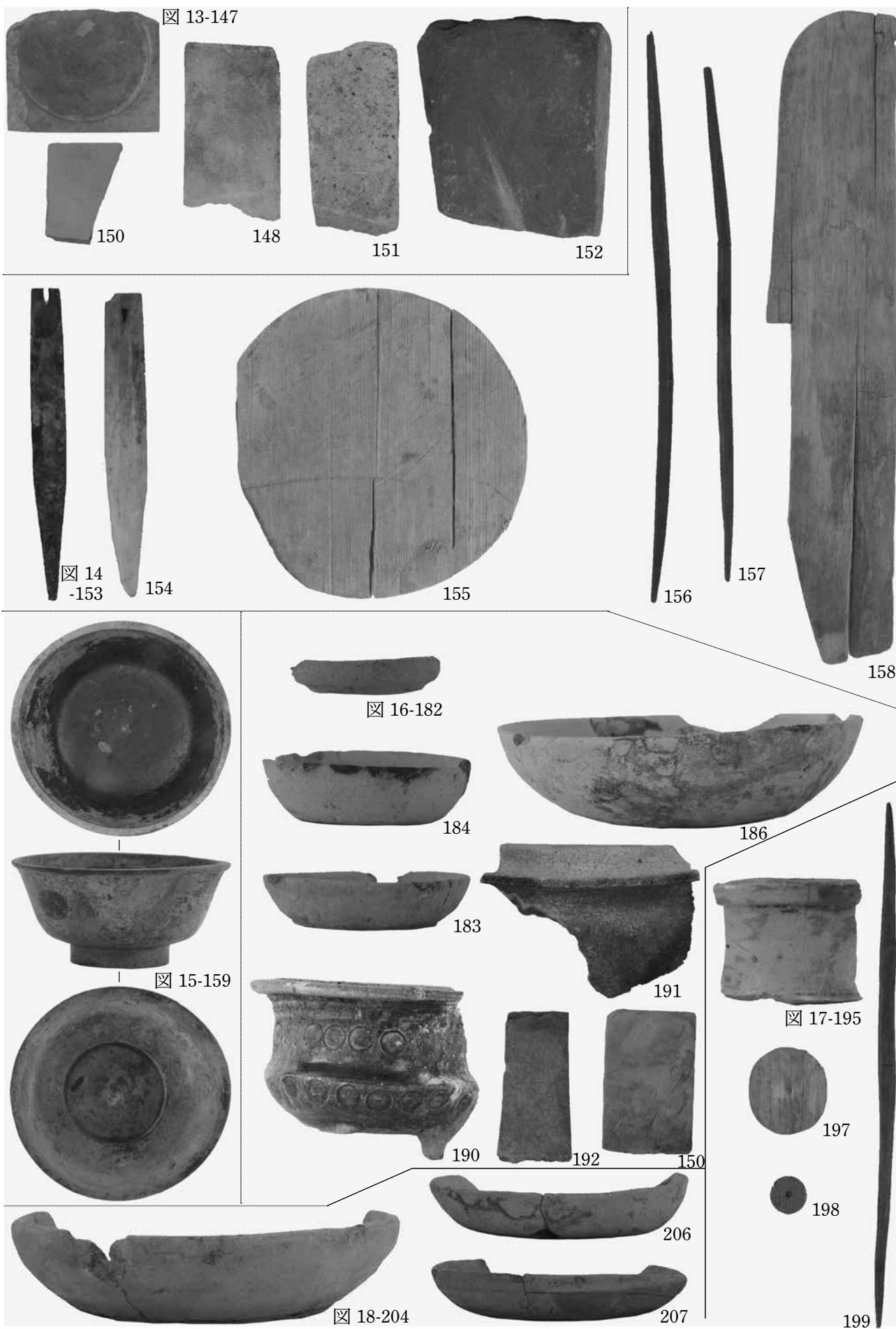
③ II区中世上層 遺構9 調査区南壁断面

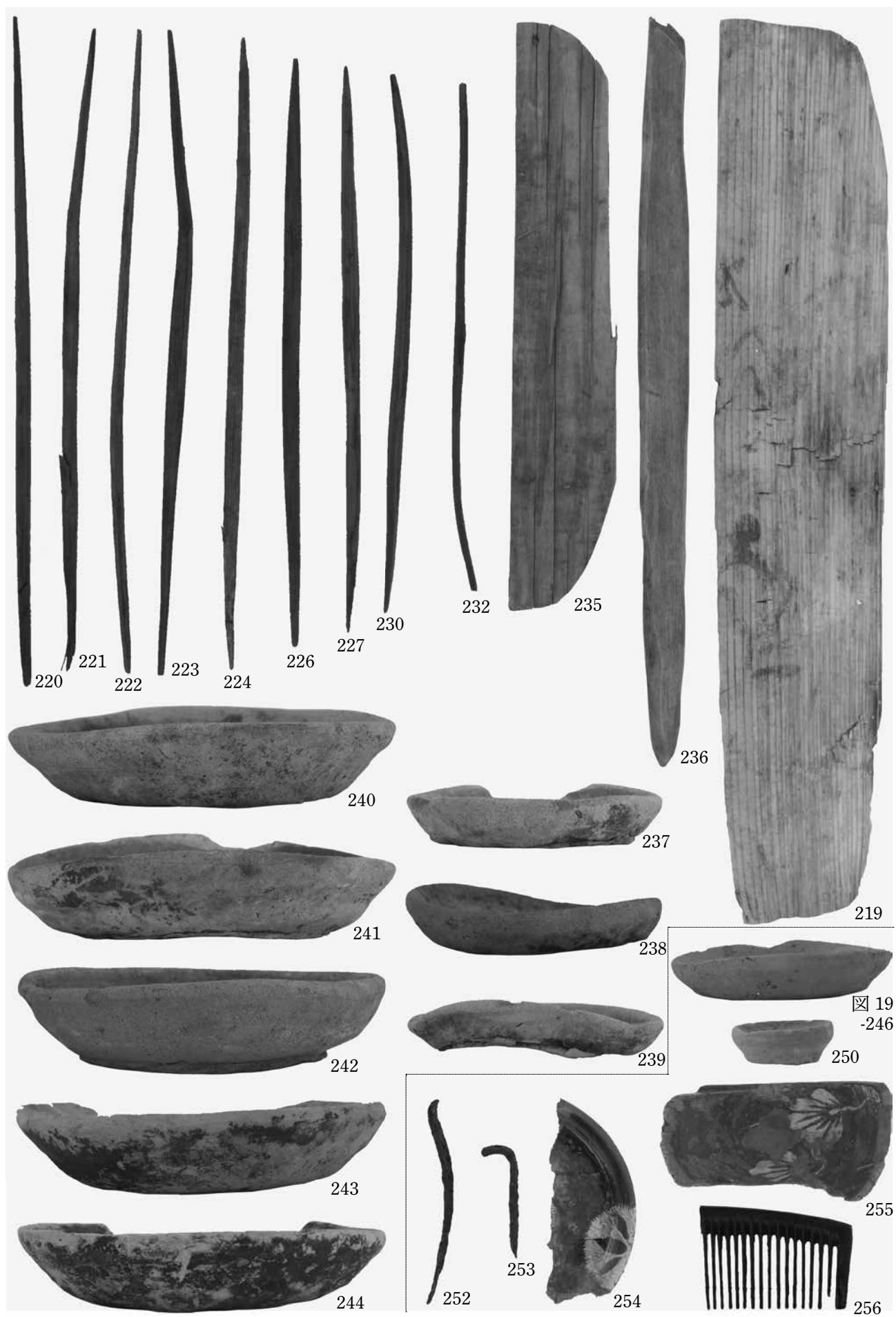
图版6











横小路周边遺跡 (No.259)

二階堂字荏柄 939 番 10 地点

例 言

1. 本書は、横小路周辺遺跡（鎌倉市 No.259）内の神奈川県鎌倉市二階堂字荏柄 939 番 10 地点における埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、個人住宅建設に伴う事前の記録保存調査として、事業主（個人）より委託を受けた株式会社博通（代表取締役：宮田眞 日本考古学協会員）が平成 23（2011）年 7 月 29 日～同年 8 月 17 日にかけて実施した。調査面積は 40m²である。
3. 発掘調査体制は次の通りである。
調査担当者 宮田眞
調査員 滝澤晶子、安藤龍馬、熊谷満
4. 現地での遺構写真は宮田、滝澤、熊谷が撮影を行った。
5. 記録図面類と出土品は鎌倉市教育委員会が保管している。
6. 資料整理上の遺跡略記号は NYA である。
7. 本書作成にあたっての整理作業体制は次の通りである。
遺物実測・トレース 齋藤礼子、坂倉美恵子
記録図面合成・トレース、遺物写真撮影、図版作成 熊谷満
8. 本書の執筆・編集は宮田の指示の下、熊谷が行った。
9. 現地調査及び本報作成に際しては、次の諸氏より御教示・御協力を賜った。（順不同、敬称略）
松尾宣方（NPO 法人鎌倉考古学研究所）、永田史子（鎌倉市教育委員会）

凡 例

1. 遺構図版
縮尺 周辺図：1/5000、調査区配置図：1/200、全体図：1/60、個別図：1/60
断面図に示した水糸高は海拔標高値を表す。
方位標は国土座標（世界測地系第 9 系）に基づいて真北を示す。
2. 遺物図版 縮尺 1/3（銭のみ 1/2）
3. 遺物法量表（ ）は復元数値、[] は残存最大値を示す。
5. 本報での「土丹^{どたん}」は、逗子シルト岩層から採石・破碎したシルト岩塊を示す通称であり、「鎌倉石」は、池子火砕岩層から切り出した火山碎屑岩塊を示す通称。

目次 本文目次

第一章	調査に至る経緯	352
第二章	遺跡概観	353
第三章	調査の経過と方法	355
第四章	堆積土層	357
第五章	発見された遺構と遺物	358
第六章	まとめ	372

挿図目次

図1	調査地点位置図	353	図10	第2面出土遺物(1)	363
図2	調査地点周辺	354	図11	第2面出土遺物(2)	364
図3	調査区配置図	356	図12	第2面出土遺物(3)	365
図4	堆積土層	357	図13	第3面全体図	366
図5	第1面全体図	358	図14	第3面出土遺物	367
図6	第1面個別遺構出土遺物	359	図15	第4面全体図	368
図7	第1面遺構外出土遺物(1)	360	図16	第4面遺構外出土遺物	369
図8	第1面遺構外出土遺物(2)	361	図17	深掘りトレンチ出土遺物	369
図9	第2面全体図	362			

表目次

表1	出土遺物法量表 1/2	370	表2	出土遺物法量表 2/2	371
----	-------------	-----	----	-------------	-----

写真図版目次

図版1-1	調査地現況	373	図版4	出土遺物(1)	376
2	現代攪乱確認状況		図版5	出土遺物(2)	377
3	第1面全景		図版6	出土遺物(3)	378
4	第1面通路状土丹敷		図版7	出土遺物(4)	379
図版2-1	第2面全景	374			
2	第2面通路状土丹敷				
3	第3面全景				
4	第3面通路状土丹敷				
図版3-1	第4面全景	375			
2	調査区北壁堆積土層				
3	調査区西壁堆積土層				

第一章 調査に至る経緯

鎌倉市は、事業者（個人）より二階堂字荏柄 939 番 10 地点における個人住宅建設の申請を受けた。当該地は県遺跡番号：鎌倉市№.259「横小路周辺遺跡」の包蔵地であることから、遺跡の有無・内容等を確認する目的で試掘確認調査を実施し、その結果に基づいて今後の埋蔵文化財の保護措置、指導を行うこととした。

平成 23 年 5 月 9 日付で事業者より鎌倉市教育委員会に埋蔵文化財確認調査依頼書が提出され、これを受けて平成 23 年 5 月 31 日～6 月 1 日にかけて試掘確認調査が実施された。3 × 2 m の試掘坑を設定し調査を行った結果、現況地盤面より深さ 120cm で中世遺構面が確認され、当該工事計画が埋蔵文化財に影響を及ぼすことが避けられないとの判断に至った。

平成 23 年 6 月 21 日付で事業者より文化財保護法第 93 条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出を受理し、これに対して平成 23 年 7 月 8 日付で神奈川県教育委員会教育長より発掘調査を実施する旨の指示が通知された。このため、当該地の埋蔵文化財については発掘調査を実施して、記録保存の措置を図ることとなった。

事業者と発掘調査の業務委託契約を締結した株式会社博通代表取締役宮田眞は、平成 23 年 7 月 22 日付で文化財保護法 92 条の規定に基づく発掘調査の届出を提出し、平成 23 年 8 月 19 日付で神奈川県教育委員会教育長より発掘調査届出に対する指示通知を受けた。発掘調査は、平成 23 年 7 月 29 日に開始、同年 8 月 17 日に終了した。

横小路周辺遺跡（鎌倉市二階堂字荏柄 939 番 10 地点）発掘調査にかかる届出等の文書

文書種別・内容	文書番号	日付	発信者	受信者	備考
試掘調査					
試掘報告		平成 23 年 6 月 1 日	鎌倉市教育委員会 文化財課	事業主	遺跡の所在を確認
取扱いの判断		平成 23 年 6 月 1 日	鎌倉市教育委員会 文化財課	事業主	発掘調査が必要
文化財保護法第 93 条に基づく土木工事の届出					
土木工事の届出		平成 23 年 6 月 21 日	事業主	神奈川県教育委員会 教育長	鎌倉市を經由
発掘調査の指示	文遺第 61039 号	平成 23 年 7 月 8 日	神奈川県教育委員会 教育長	事業主	鎌倉市を經由
文化財保護法第 92 条に基づく発掘の届出					
発掘届の提出		平成 23 年 7 月 22 日	株式会社博通 代表取締役 宮田眞	神奈川県教育委員会 教育長	鎌倉市を經由
発掘届の受理通知	文遺第 50054 号	平成 23 年 8 月 19 日	神奈川県教育委員会 教育長	株式会社博通 代表取締役 宮田眞	鎌倉市を經由
出土品の手続き					
埋蔵物の発見届		平成 23 年 8 月 18 日	株式会社博通 代表取締役 宮田眞	鎌倉警察署長	
埋蔵文化財保管証の提出		平成 23 年 8 月 17 日	株式会社博通 代表取締役 宮田眞	神奈川県教育委員会 教育長	鎌倉市を經由
文化財認定		平成 23 年 9 月 9 日	神奈川県教育委員会 教育長	株式会社博通 代表取締役 宮田眞	鎌倉市を經由

第二章 遺跡概観

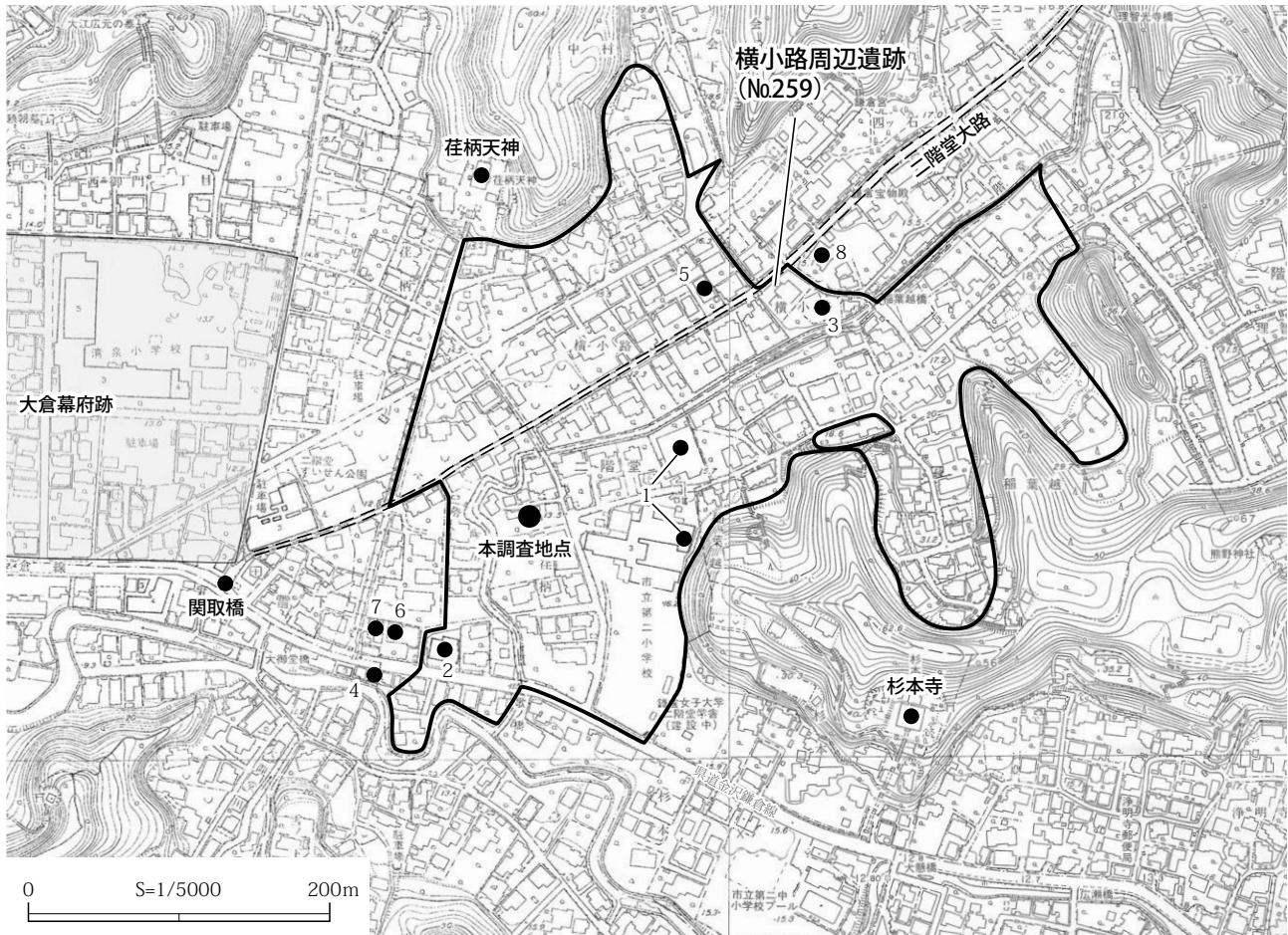
本調査は横小路周辺遺跡（遺跡台帳番号：鎌倉市 No.259）内における埋蔵文化財発掘調査であり、鎌倉市二階堂字荏柄 939 番 10 地点に所在する。本調査地点より西方約 180 m には源頼朝の御所である大倉幕府跡、北方 220 m には長治元年（1104）に開かれたとされる荏柄天神社、南東約 270 m には天平六年（736）に開かれたとされる杉本寺が位置しており、周辺は鎌倉市中でも頼朝入府以前から土地利用されていたことが見込まれる地域である。本調査地点は、杉本寺が鎮座する丘陵から西方へかけて緩やかに延びる山裾の比較的平坦な微高地に立地しており、現況の標高は約 13.6 m を測る。調査地付近一帯は奈良時代には「荏草郷」と呼ばれていたようで、天平七年（735）の「相模国封戸租交易帳」にその名が見え、『和名類聚鈔』には「荏草」はエカラと振られている。さらに、本調査地点に近接する大倉幕府周辺遺跡などの発掘調査では弥生時代中期後半から後期にかけての竪穴住居址や古墳時代初頭の方形周溝墓も検出されており、先史時代からすでに拓けた土地であったことが判る。

また、現在の関取橋の碑が建つところから北東約 800 m の理智光寺橋まで狭い道が真っ直ぐに通じるが、これが鎌倉時代に二階堂大路と呼ばれた道であると考えられている。二階堂大路は六浦道（現在の県道金沢鎌倉線）から永福寺惣門に至る道で、二階堂大路と六浦道の交差する関取橋付近が大倉辻と呼ばれていたと考えられており、この大倉辻は建長三年（1251）十二月と文永二年（1265）三月に鎌倉内の商業地域の一つに定められている。本調査地点は、この二階堂大路とは二階堂川を隔てた東側微高地の縁辺部に位置しており、往時には二階堂大路をはじめとして大倉幕府や荏柄天神社までも川の向こう側に見下ろすことができたのではないかと思われる。

横小路周辺遺跡ではこれまで 8 地点の発掘調査報告がされており、その地点を図 2 に示した。本調査地点から東に 120 m ほどに位置する地点 1 では、昭和 57 年（1982）に調査が実施されている。市立第二小学校体育館新設と同校舎増改築工事に伴いそれぞれやや離れた地点で調査が行われており、2 枚の中世遺構面と古代遺構面も検出されている。古代遺構は竪穴住居址 7 棟が重複する状態で検出されており、奈良・平安時代の遺物が出土している。中世では総数 2000 基近い柱穴から 19 棟の掘立柱建



図 1 調査地点位置図



向在柄遺跡

1. 二階堂字往柄880・874番地点 『鎌倉市 二階堂 向在柄遺跡発掘調査報告書』 1985 鎌倉市教育委員会

横小路周辺遺跡

2. 二階堂字往柄9番1地点 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』1990 鎌倉市教育委員会 / 『横小路周辺遺跡発掘調査報告書 - 二階堂字往柄9番1地点 -』1991 横小路周辺遺跡発掘調査団
3. 二階堂字横小路110番3地点 『横小路周辺遺跡 二階堂字横小路110番3地点 - 永福寺関連遺跡の調査 -』1996 横小路周辺遺跡発掘調査団
4. 雪ノ下五丁目557番1地点 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14 (第2分冊)』 1998 鎌倉市教育委員会

5. 二階堂字横小路93番11地点 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15 (第2分冊)』1999 鎌倉市教育委員会

6. 二階堂字往柄10番9外地点 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16 (第2分冊)』 2000 鎌倉市教育委員会

7. 二階堂字往柄10番1地点 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』2003 鎌倉市教育委員会

8. 二階堂字四ツ石115-3地点 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23 (第2分冊)』 2007 鎌倉市教育委員会

図2 調査地点周辺

物跡が確認されているほか、井戸、溝などが多数検出されており、建物規模の大きさや濠のような大溝をもつ点などから大きな屋敷地の一面であることが推測されている。舶載陶磁器をはじめとして土器・国産陶磁器・金属製品・石製品・木製品など、多岐にわたる大量の遺物が出土しており、13世紀初頭から14世紀代に至るまで間断のない営為痕跡が確認されている。また南方約120mに位置する地点2は六浦道に面して昭和63年(1988)に調査が実施されており、2枚の中世遺構面が検出されている。上面の遺存状況が悪くほとんどの遺構が第2面で確認されているようであるが、多数の柱穴とともに道路状遺構・溝・井戸・土坑などが発見されており、13世紀中葉から16世紀初頭に至る遺物が出土している。また特筆すべき点として、町屋地域に顕著に見られる方形竪穴建物跡が6棟検出されており、大倉辻周辺が商業地域であったことを表すような成果といえるだろう。ほか、地点6や地点7などでも多数の柱穴などが検出されており、鎌倉時代前期から室町時代に至る遺物を出土している。

第三章 調査の経過と方法

第1節 調査経過

本調査は個人住宅建設を原因とする事前の埋蔵文化財発掘調査として実施された。事業主（個人）から調査を委託された株式会社博通（代表取締役：宮田真）が、平成23年7月29日～同年8月17日にかけて本格的な調査を行ったものである。現況標高は約13.6 mを測る。調査面積は40㎡である。主な調査経過を以下に示す。

- 7月29日 表土掘削。面精査・現代攪乱坑プランを確認
- 8月1日 攪乱坑・試掘坑掘削。水準点測量、調査基準杭への移設。
- 8月2日 基準点測量、調査基準杭への移設。第1面全景写真撮影、測量。
- 8月3日 第2面への掘り下げ、遺構プラン確認。
- 8月4・5日 第2面遺構掘削。
- 8月8日 第2面全景写真撮影、平面図測量。
- 8月9日 第3面への掘り下げ。
- 8月10日 第3面遺構掘削。
- 8月11日 第3面全景写真撮影、平面図測量。
- 8月12日 第4面への掘り下げ。
- 8月15日 第4面全景写真撮影、平面図測量。調査区セクション図測量。
- 8月16日 調査区埋め戻し。
- 8月17日 器材撤収。

第2節 調査方法

調査はまず、試掘調査の成果を基に約80cmの厚さをもつ表土を重機によって除去することから始められた。表土を除去した時点で中世遺物包含層上面が検出され、以降の掘削作業は人力によって行った。調査の結果中世基盤層上面を含めて4枚の遺構面が検出され、各面において遺構掘削および測量・写真撮影などの記録作業を行った。平面測量には光波測距儀を用い、測定値をその場で手作業により直接方眼紙上にプロット・図化する方法を採った。また、記録写真の撮影にあたっては、モノクロ・リバーサルフィルムをそれぞれ装填した35mmフィルムカメラ2台を使用し、作業状況などの補助的な記録にデジタルカメラを併用した。調査が完了したところで鎌倉市教育委員会による終了確認を受け、調査区の埋め戻し及び器材撤収を行い調査を終了した。

測量基準杭の設定にあたっては、測量機材を設置するスペースが限られていたこともあり、ひとまず任意に設定した基準杭を基に測量を行った。後に鎌倉市教育委員会より提供された鎌倉市4級基準点成果表記載のE196 (X=-75377.183,Y=-24091.943)、E197 (X=-75408.918,Y=-24081.923) に基づき、光波測距儀を用いて国土座標軸に倣った座標値の移設を行った。これにより、本書で用いている座標は世界測地系第9系に準じたものとなっている。また、水準点は鎌倉市3級基準点No.53209 (標高12.109 m) より、レベルを用いて調査基準杭へ移設した。

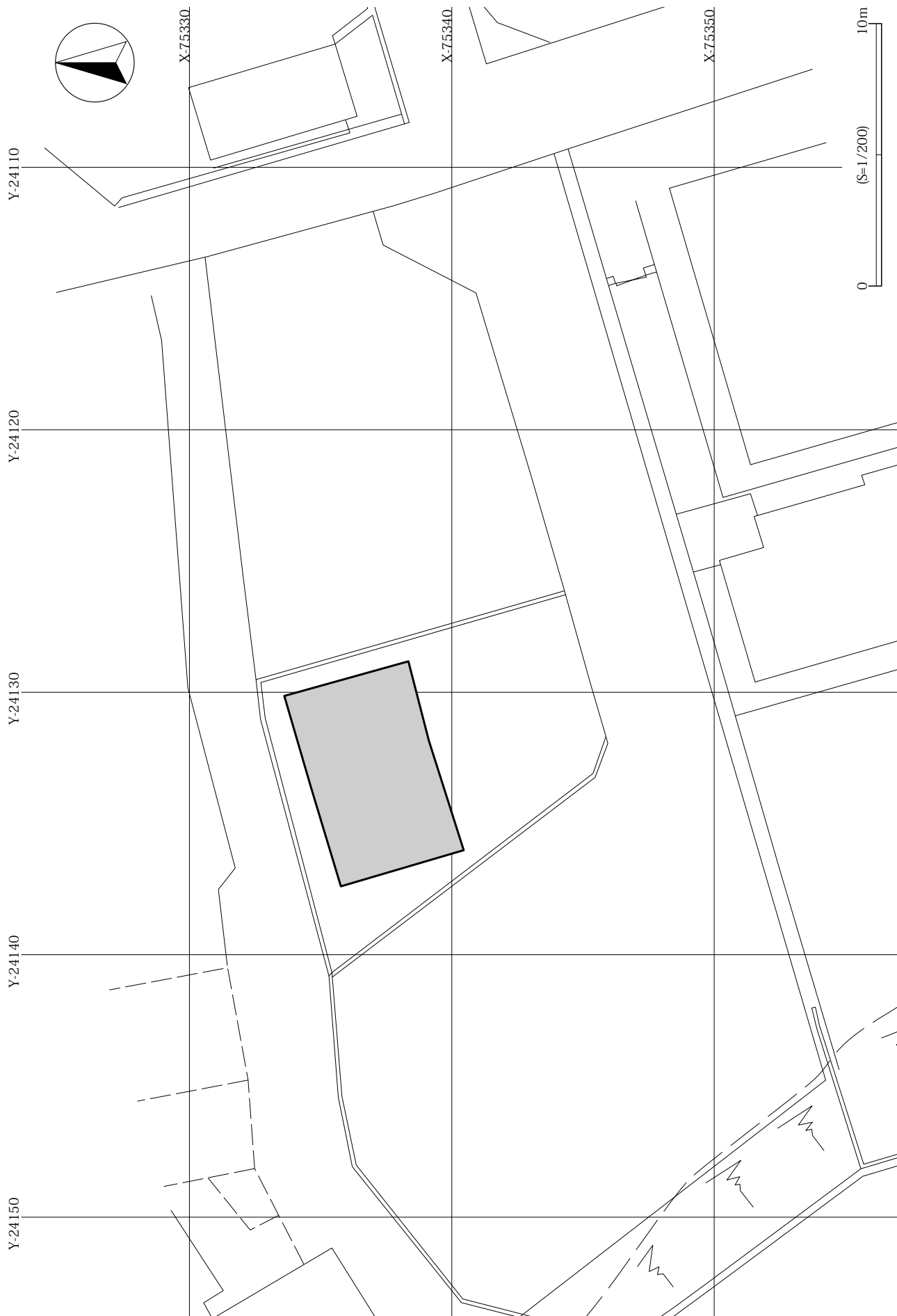
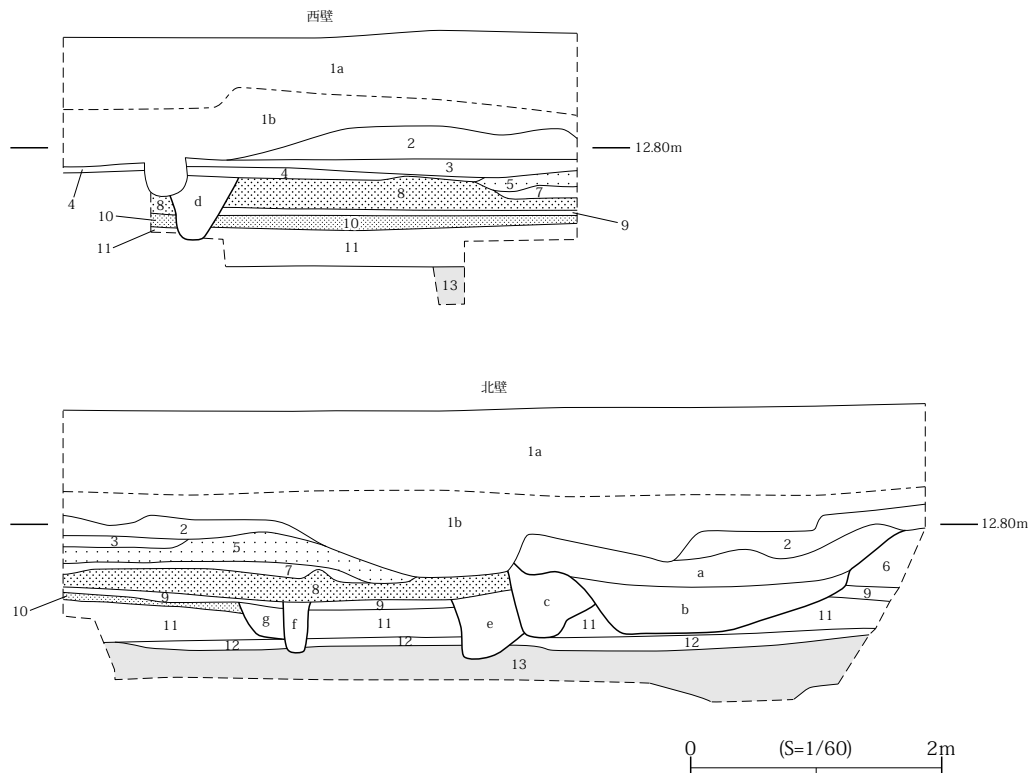


图3 調査区配置図

第四章 堆積土層

本調査では4枚の遺構面が検出された。各堆積層毎の詳細な説明は図4に示しているのので、ここでは若干の補足を加えることとする。

今回の調査では、第1層から第10層までの堆積層が人為的に造成された地業層である。第1層は現代の堆積層で、第2層以下が中世期の堆積層となるものであり、それぞれ第3・6層が第1面、第9層が第2面、第11層が第3面、第13層が第4面を構成する。第11、12層は混入物が少なく比較的安定した堆積層で、中世遺物を含むものの、人為によるものでなく自然に埋積した堆積層である可能性がある。第13層が中世基盤層である。第13層中には古代の土師器・須恵器片がわずかに含まれており、調査区北東角部で無遺物の黒褐色粘質土層を確認したが、そこから西側にかけて傾斜をもって落ち込んでいく。安全上の配慮から現地表面より約200cmの深さ以上の掘削を断念したが、谷地形あるいは窪地のような自然地形となることが想定される。



- | | |
|---------------------------------------|-------------------------------------|
| 1a. 茶褐色土 現代盛土層。土丹を多量含む。締まりなく軟弱。 | a. 黒褐色土 土丹粒をやや多く含む。かわらけ片多量含む。土坑1覆土。 |
| 1b. 黒褐色土 表土層。土丹、玉砂利等を多量含む。 | b. 黒褐色土 土丹粒、かわらけ片をやや多く含む。土坑1覆土。 |
| 2. 暗褐色土 土丹粒をやや多く含む。中世遺物包含層。 | c. 黒褐色土 土丹粒・小ブロックをやや多く含む。土坑2覆土。 |
| 3. 茶褐色砂質土 土丹粒をやや多く含む。 | d. 黒褐色土 土丹粒・小ブロックを多量含む。 |
| 4. 黒褐色土 土丹粒を微量含む。締まりやや弱い。 | e. 黒褐色土 土丹粒を少量含む。P24覆土。 |
| 5. 土丹地業層 直径5～20cm大の土丹を多量含む。通路状遺構1構成土。 | f. 黒褐色土 土丹粒をやや多く含む。P20覆土。 |
| 6. 黒褐色土 土丹粒を少量含む。締まりややあり。 | g. 黒褐色土 土丹粒を少量含む。P37覆土。 |
| 7. 黒褐色土 土丹粒を微量含む。締まりやや弱い。 | |
| 8. 土丹地業層 拳大～人頭大の土丹塊を多量含む。通路状遺構2構成土。 | |
| 9. 黒褐色土 土丹粒を微量含む。やや砂質。締まりやや弱い。 | |
| 10. 土丹地業層 土丹粒を密に含む。通路状遺構3構成土。 | |
| 11. 黒褐色土 土丹粒、かわらけ片を少量含む。締まりあり。 | |
| 12. 黒灰色土 土丹粒、炭化物を微量含む。粘性あり、締まりあり。 | |
| 13. 黒灰色土 土丹粒微量含む。褐鉄を多く含む。締まりあり。 | |

図4 堆積土層

第五章 発見された遺構と遺物

本調査では基盤層上面を含めて4枚の中世遺構面が検出されている。本章では検出された主な遺構・遺物について各面毎に説明を加えることとする。

[第1面]

本面では通路状の土丹敷のほか、土坑1基、ピット2基を検出している。通路状の土丹敷を境として、西側は茶褐色の砂質土、東側は土丹粒を少量含む黒褐色土が面構成土となっており、西側の茶褐色砂質土は良好な生活面と捉えられたが、東側の黒褐色土は締まりややあるものの、生活面としてはやや軟弱な構成土と見受けられた。面標高は約12.6mを測る。検出されたピット2基はいずれも西側の茶褐色砂質土上面で確認することができたものである。後に調査区壁面で堆積層を観察したところ、この茶褐色砂質土は通路状遺構造成後に貼り増しされたものであることが判った。また、調査区南東付近で安山岩を検出しているものの、傾斜するような状態であったため礎石と認識することは難しいのではないかとと思われる。

通路状遺構1 (図5.6)

調査区の中央よりやや西で南北に延びる状態で検出された。規模は幅約250cm、路面標高は約12.7m

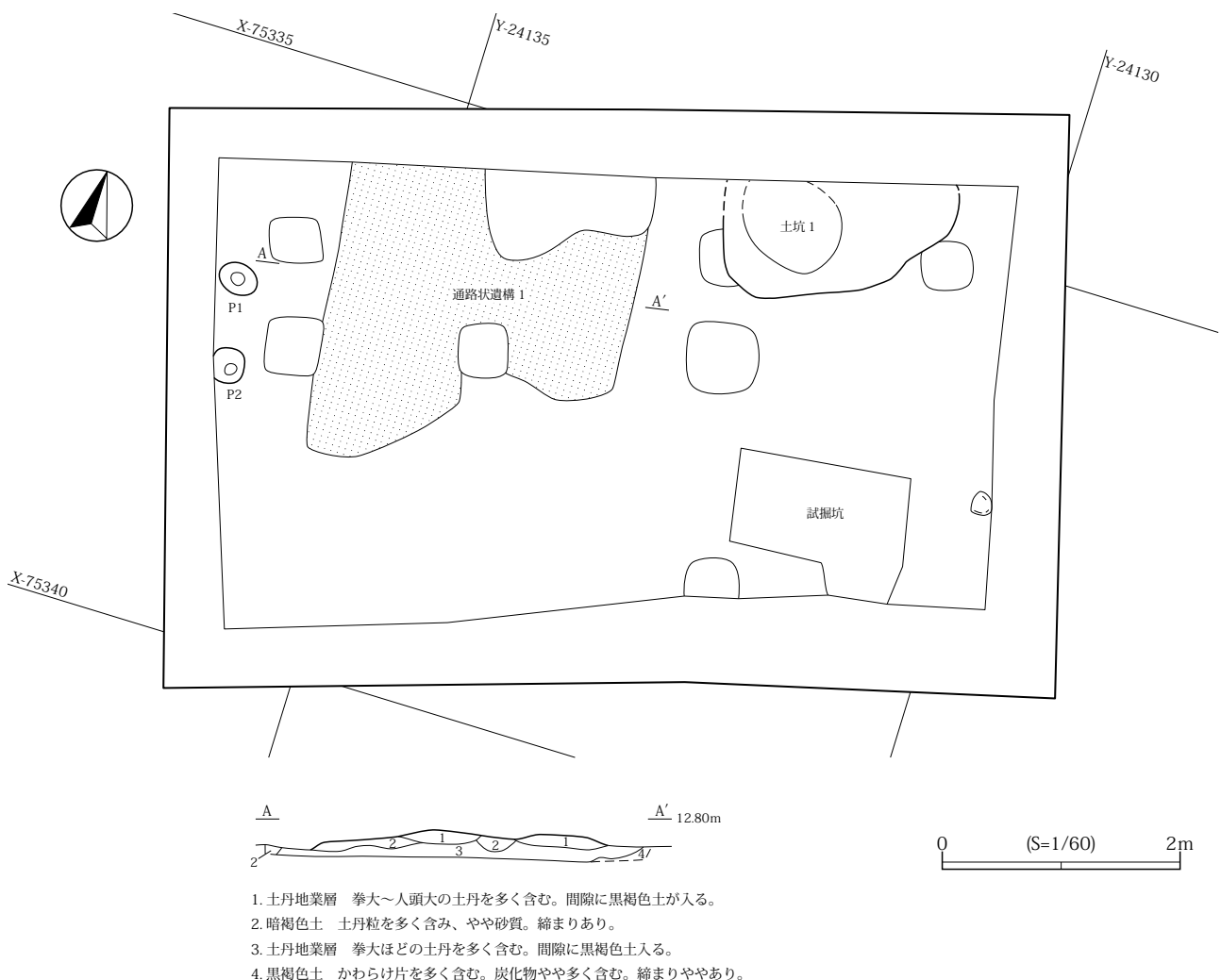


図5 第1面全体図

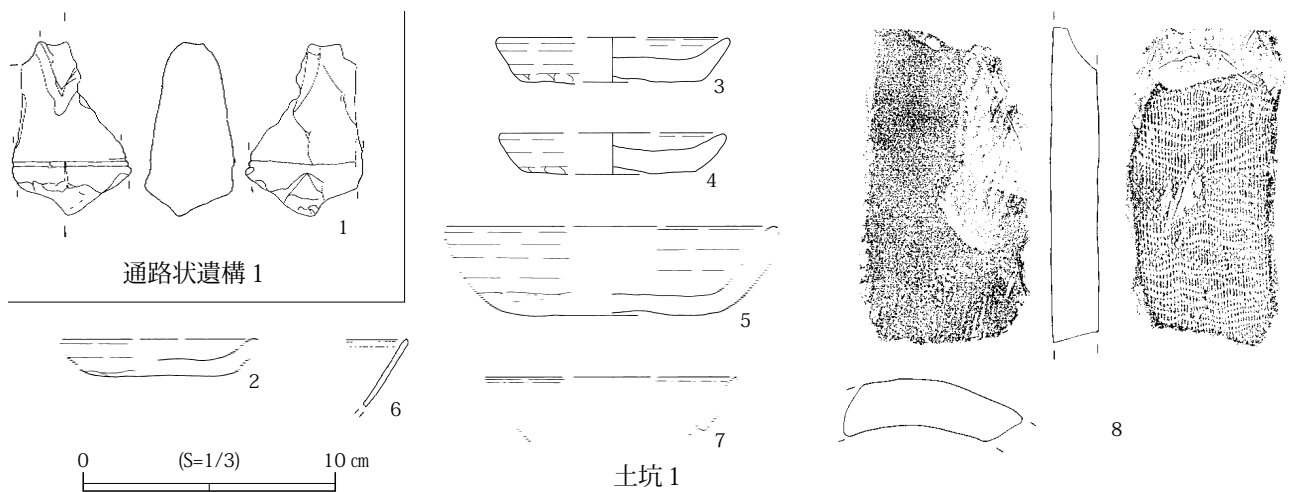


図6 第1面個別遺構出土遺物

を測る。主軸方位はN - 7° - Wを指す。拳大～人頭大の土丹を多く含む土丹地業面であるが土丹間の間隙が多く、南側ほど地業が軟弱となっている。このため南側は途中で途切れているように見受けられたが、おそらくはやや軟弱な地業でありながらもさらに南へ延長していたものと思われる。ただし、調査区南壁の堆積層を観察しても、明確な範囲を捉えることはできなかった。

1は土製品泥人形。着物を着た人体を模した胴体部片。

土坑1 (図5,6)

調査区東部の北壁にかかる状態で検出された。第1面調査時にプランを確認することができず、第2面調査時に検出したものであるが、調査区北壁の堆積土層を観察したところ本面に帰属するものであることが判った。調査区外北へ延びるが、検出された範囲内の平面形は不定形で、規模は長軸約200cm×短軸70cm以上、掘り込み面からの深さ約80cmを測る。覆土は土丹を多く含む黒褐色土で、多量のかわらけ片が含まれる。

2～5はかわらけ。全て手づくね成形。6は青白磁碗。7は白磁口元皿。8は丸瓦。

遺構外出土遺物 (図7,8)

1～23はかわらけ。全てロクロ糸切り成形。24～27は常滑甕。28は常滑片口鉢。29～31は山茶碗窯系片口鉢。32,33は瀬戸窯製品。いずれも瓶子あるいは壺類と思われる。34,35は青磁碗。34は内面画花文、35は外面鎬蓮弁文。36は青磁皿。37は白磁端反り碗。38は白磁皿。39は青白磁皿。見込み部分に意匠不明の貼付文が認められる。40,41は泥人形。40は着物を着た人体を模した胴体部片、41は台座部分か。42は瓦質火鉢。43は土製品。双六の駒と思われるもの。44は滑石鍋。研磨に転用したものが刃物痕が無数に残る。45は鉄釘。46は銭。紹聖元寶。47～52は瓦。全て平瓦。

[第2面] (図9)

本面では通路状の土丹敷のほか、土坑8基・ピット10基を検出している。土丹粒を微量含むやや砂質の黒褐色土が面構成土となっており、調査区南東部では土丹細粒による地業面が貼り増されていた。面標高は約12.3mを測る。

通路状遺構2

調査区の西部を南北に延びる状態で検出された。規模は幅約170cm、路面標高は約12.5mを測る。主軸方位はN - 7° - Wを指す。拳大～人頭大の土丹を多量含む土丹地業面である。本址も第1面で検

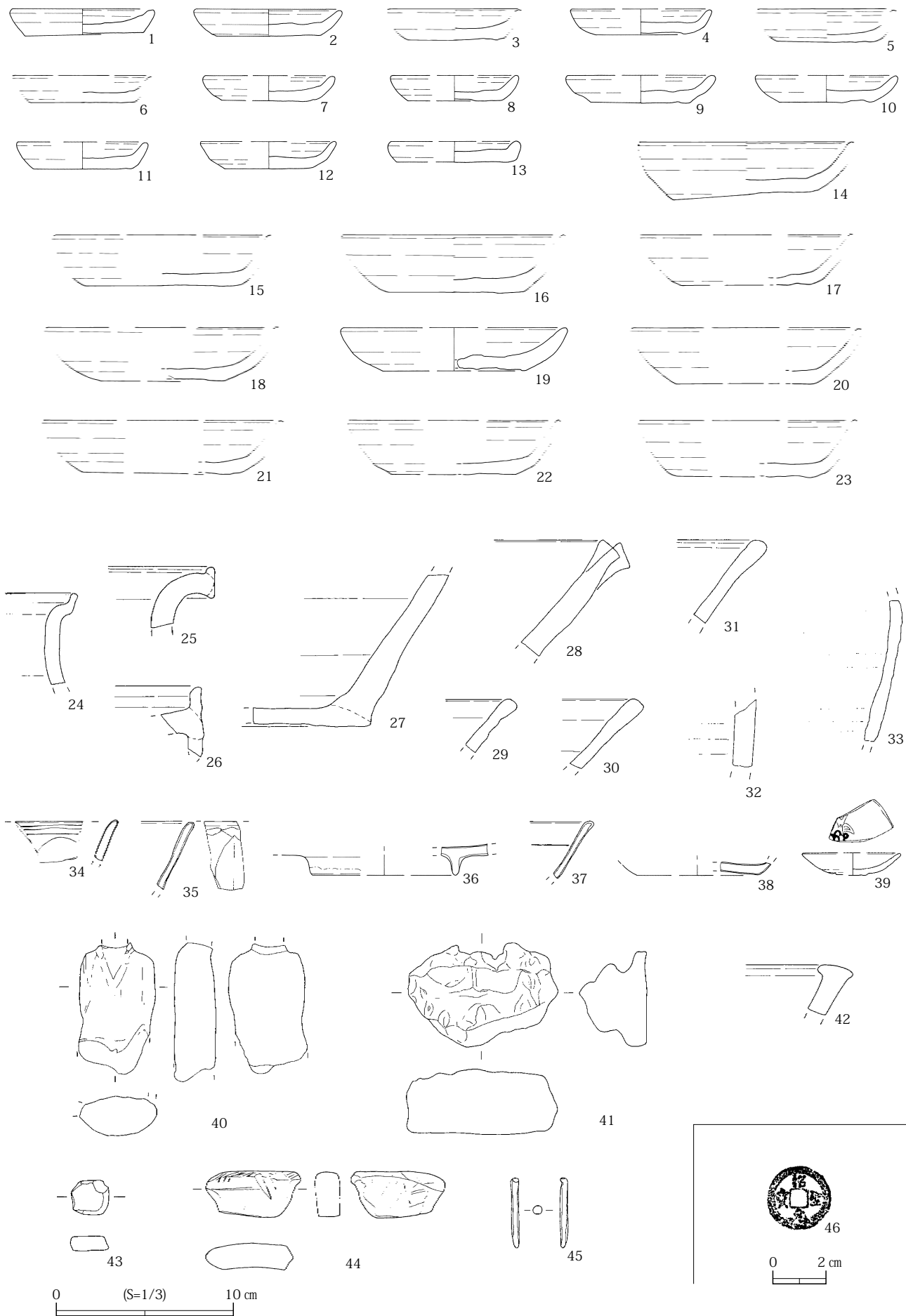


图7 第1面遺構外出土遺物(1)

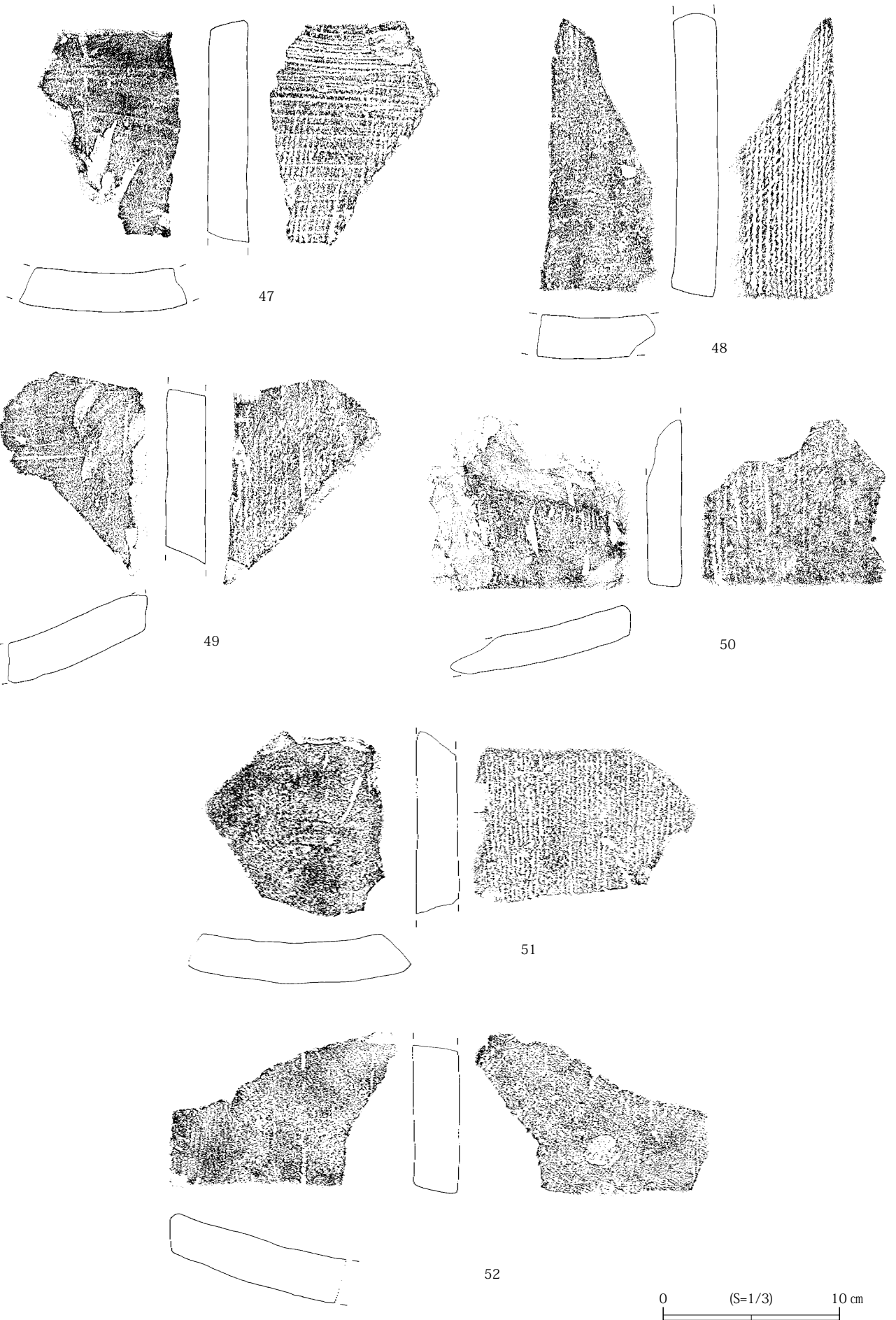
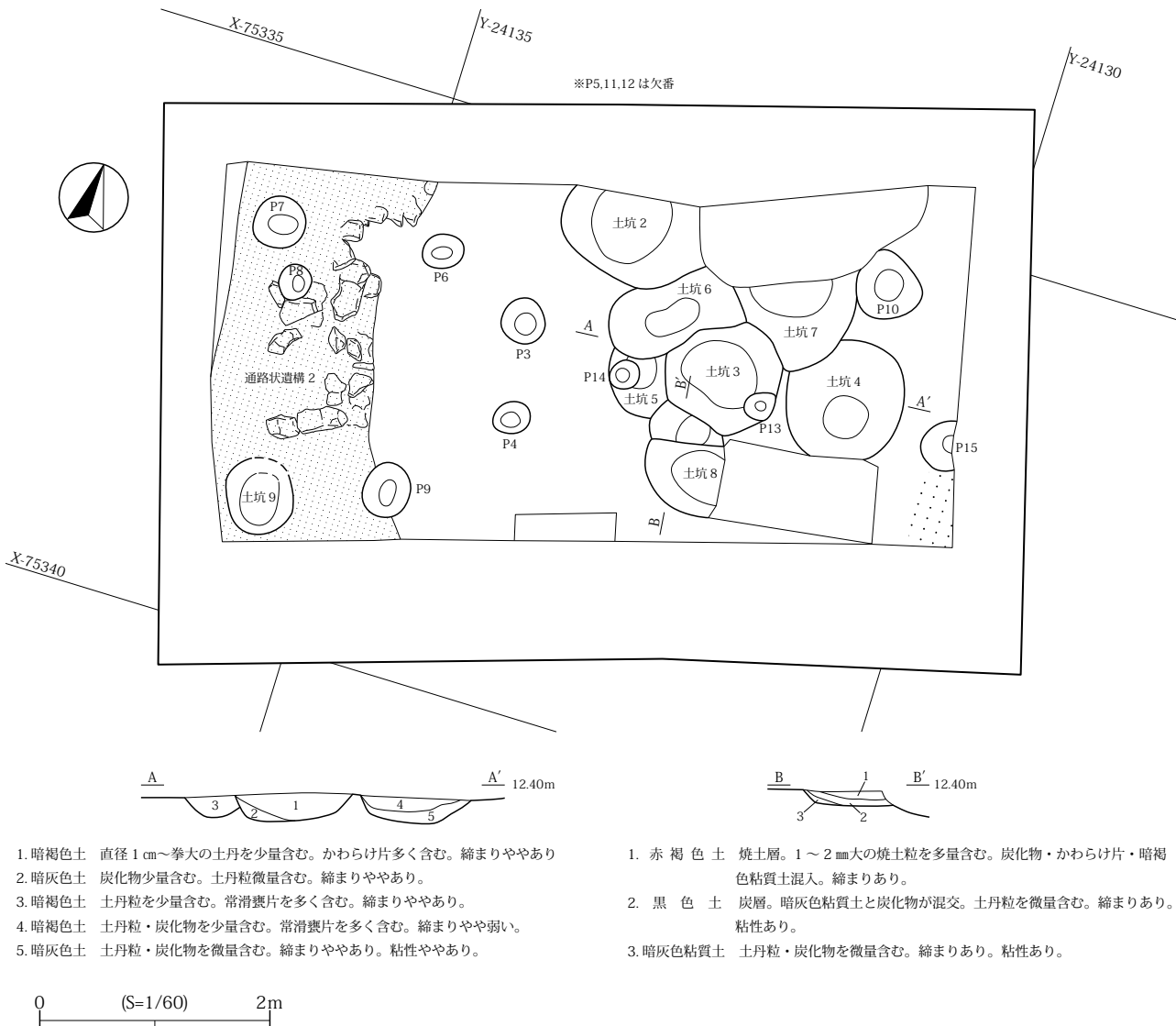


图8 第1面遺構外出土遺物(2)



1. 暗褐色土 直径 1 cm～拳大の土丹を少量含む。かわらけ片多く含む。縮まりややあり
2. 暗灰色土 炭化物少量含む。土丹粒微量含む。縮まりややあり。
3. 暗褐色土 土丹粒を少量含む。常滑甕片を多く含む。縮まりややあり。
4. 暗褐色土 土丹粒・炭化物を少量含む。常滑甕片を多く含む。縮まりやや弱い。
5. 暗灰色土 土丹粒・炭化物を微量含む。縮まりややあり。粘性ややあり。

1. 赤褐色土 焼土層。1～2mm大の焼土粒を多量含む。炭化物・かわらけ片・暗褐色粘質土混入。縮まりあり。
2. 黒色土 炭層。暗灰色粘質土と炭化物が混交。土丹粒を微量含む。縮まりあり。粘性あり。
3. 暗灰色粘質土 土丹粒・炭化物を微量含む。縮まりあり。粘性あり。

図9 第2面全体図

出された通路状遺構 1 と同様に南側ほど地業が軟弱になる様子が見受けられた。また、路面東端部より東側も掘り下げ時に土丹が比較的多く含まれていたことが確認されており、これらも本址の一部であったとすれば、記録された範囲よりも東側はもう少し広がっていた可能性がある。

土坑 2 (図 9,10)

調査区中央よりやや東部の北壁にかかる状態で検出された。調査区外北へ延び、東部を土坑 1 により失われているため平面形は不明瞭であるが、検出している範囲からは楕円形もしくは不定形となることが推測される。規模は長軸 130cm 以上×短軸 80cm 以上、掘り込み面からの深さ約 50cm を測る。覆土は土丹粒・小ブロックをやや多く含む黒褐色土である。

1～3 はかわらけ。1 はロクロ糸切り、2,3 は手づくね成形。

土坑 3 (図 9,10)

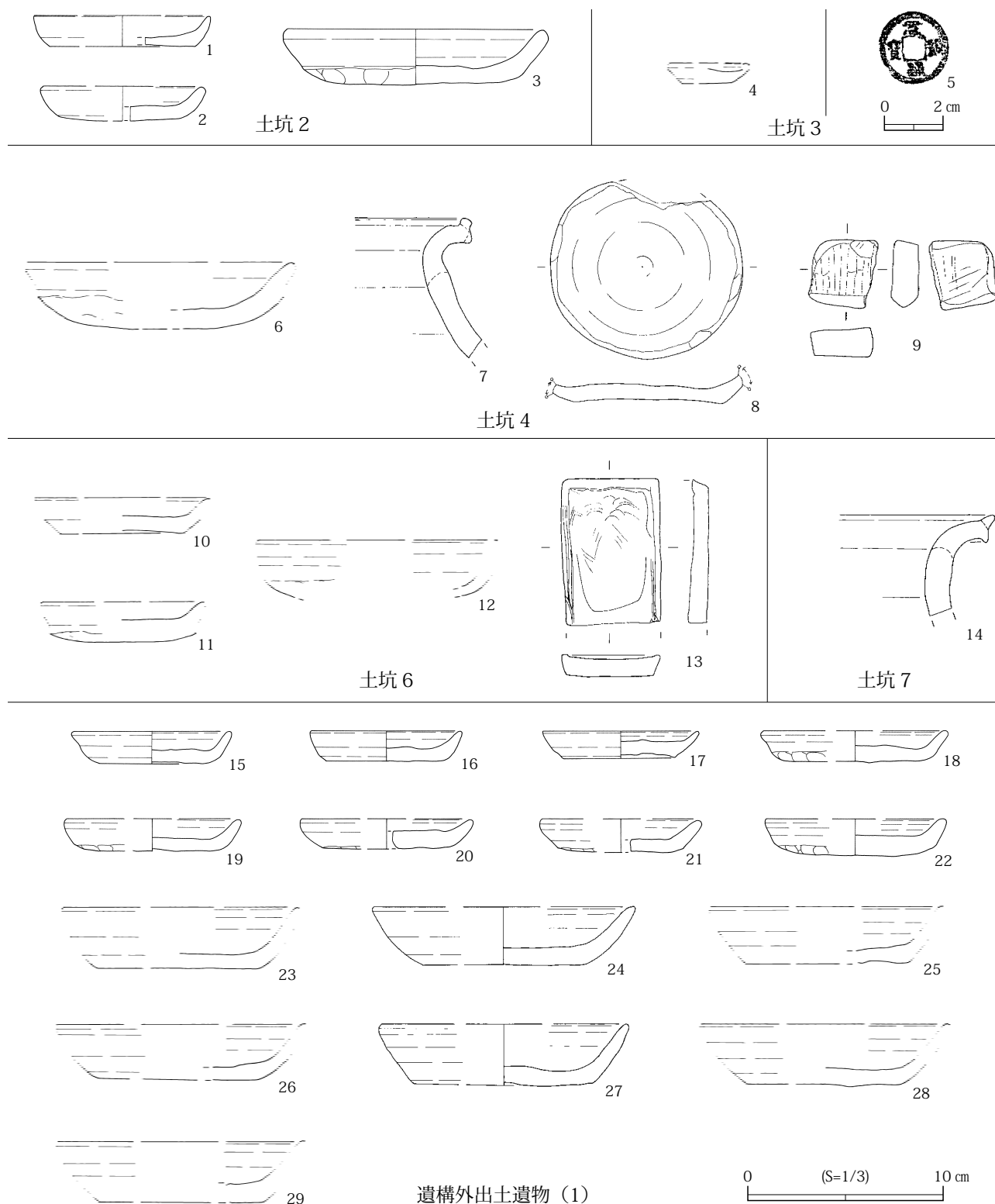
調査区中央よりやや東で検出された。別な遺構の重複が著しく平面形は歪みが大きいのが、略楕円形を呈する。規模は長軸約 100cm×短軸約 90cm、検出面からの深さ約 20cm を測る。覆土は土丹粒を少量含む暗褐色土で、かわらけ片を多く含む。

4 はかわらけ。俗にコースターと呼称する内折れかわらけ。5 は銭。元祐通寶。

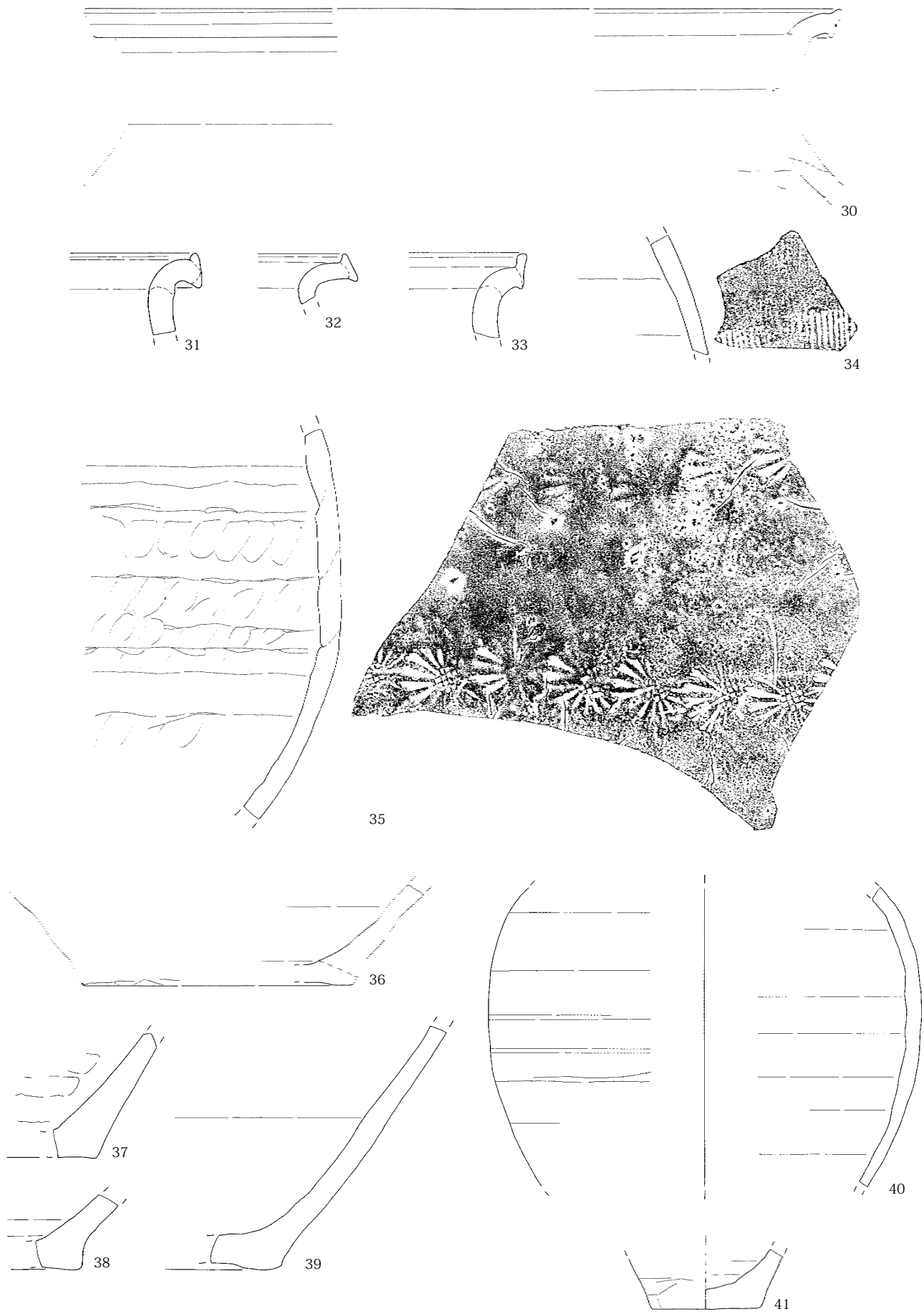
土坑 4 (図 9,10)

調査区東部中央付近で検出された。平面形は略楕円形を呈する。規模は長軸約 110cm×短軸約 100cm、検出面からの深さ約 20cmを測る。覆土は土丹粒・炭化物を少量含み暗灰色土混交する暗褐色土で、常滑甕片を多く含む。

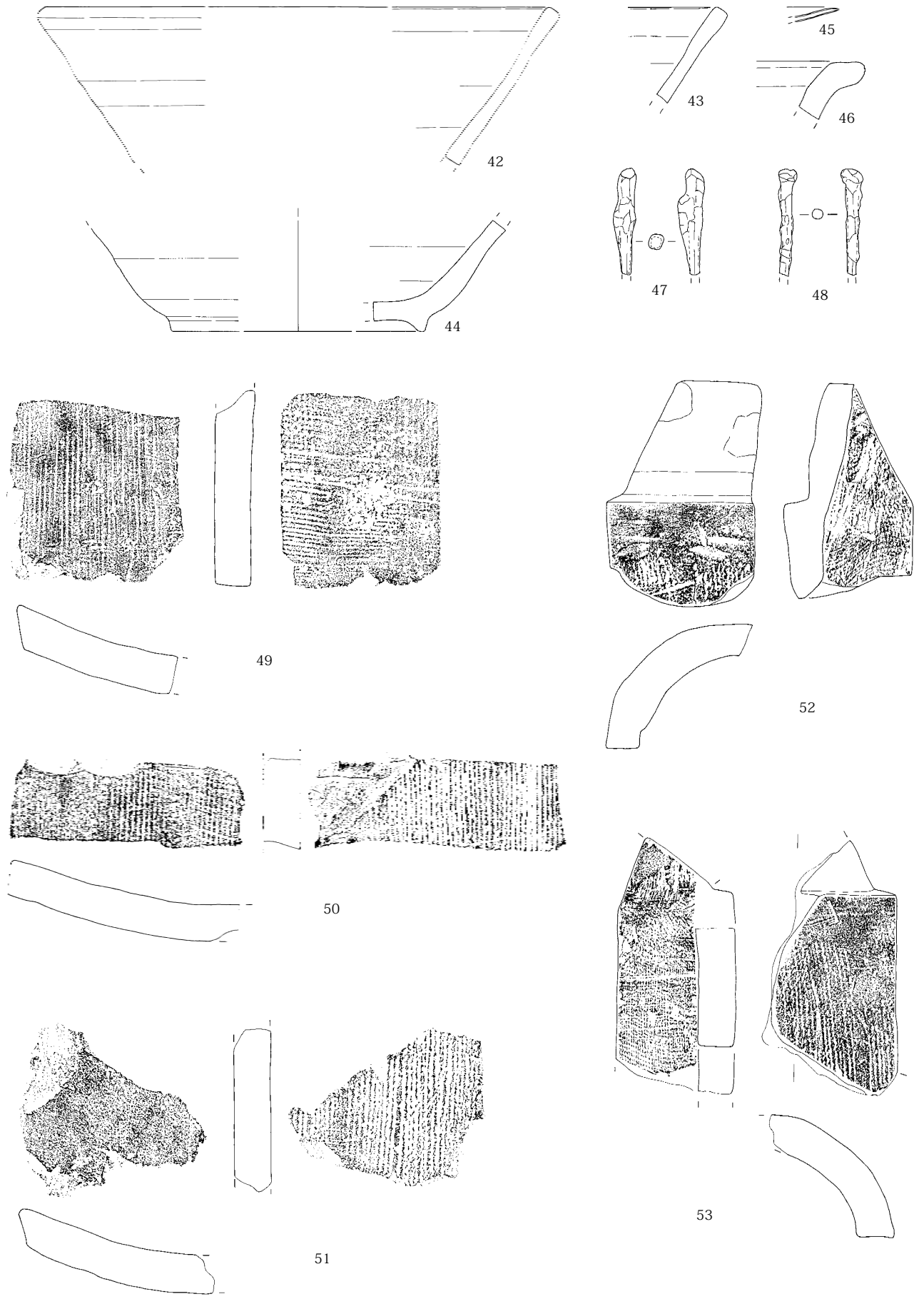
6 はかわらけ。手づくね成形。7 は常滑甕。8 はかわらけ円板。かわらけ口縁部を打ち欠いて円板状にしたもの。9 は滑石鍋。研磨に転用したものか刃物痕が無数に残る。



遺構外出土遺物 (1)
図 10 第 2 面出土遺物 (1)



遺構外出土遺物 (2)
 图 11 第 2 面出土遺物 (2)



遺構外出土遺物 (3)
 图 12 第 2 面出土遺物 (3)

0 (S=1/3) 10 cm

土坑 5 (図 9)

調査区中央よりやや東で検出された。北部が別遺構により切り込まれ失われているが、遺存する部分での平面形は略楕円形を呈するものと思われる。規模は長軸 60cm 以上×短軸約 50cm、検出面からの深さ約 20cm を測る。覆土は土丹粒を少量含む暗褐色土で、常滑甕片を多く含む。

土坑 6 (図 9,10)

調査区中央よりやや東で検出された。別な遺構の重複が著しく平面形は歪みが大きい、略楕円形を呈する。規模は長軸約 110cm×短軸約 60cm、検出面からの深さ約 20cm を測る。覆土は炭層を主体とし、締め弱い黒色土で構成される。

10,11 はかわらけ。10 はロクロ糸切り、11 は手づくね成形。12 は白かわらけ。手づくね成形。13 は石製硯。

土坑 7 (図 9,10)

調査区北東部付近で検出された。別な遺構の重複が著しく、北部を土坑 1 に切り込まれ失っているため平面形は不明瞭であるが、遺存する部分では楕円形もしくは不定形を呈するものと思われる。規模は長軸約 100cm×短軸 70cm 以上、検出面からの深さ約 10cm を測る。覆土は土丹を少量含む暗褐色土で、暗灰色土が混交する。

14 は常滑甕。

土坑 8 (図 9)

調査区中央よりやや南東で検出された。別な遺構や試掘坑に切り込まれ欠失部分が多いが、平面形は不定形を呈するものと思われる。規模は長軸 100cm 以上×短軸 70cm 以上、検出面からの深さ約 15cm を測る。浅い播鉢状の土坑で底面にはわずかに起伏が見られ、南側が一段深くなっている。覆土上層には

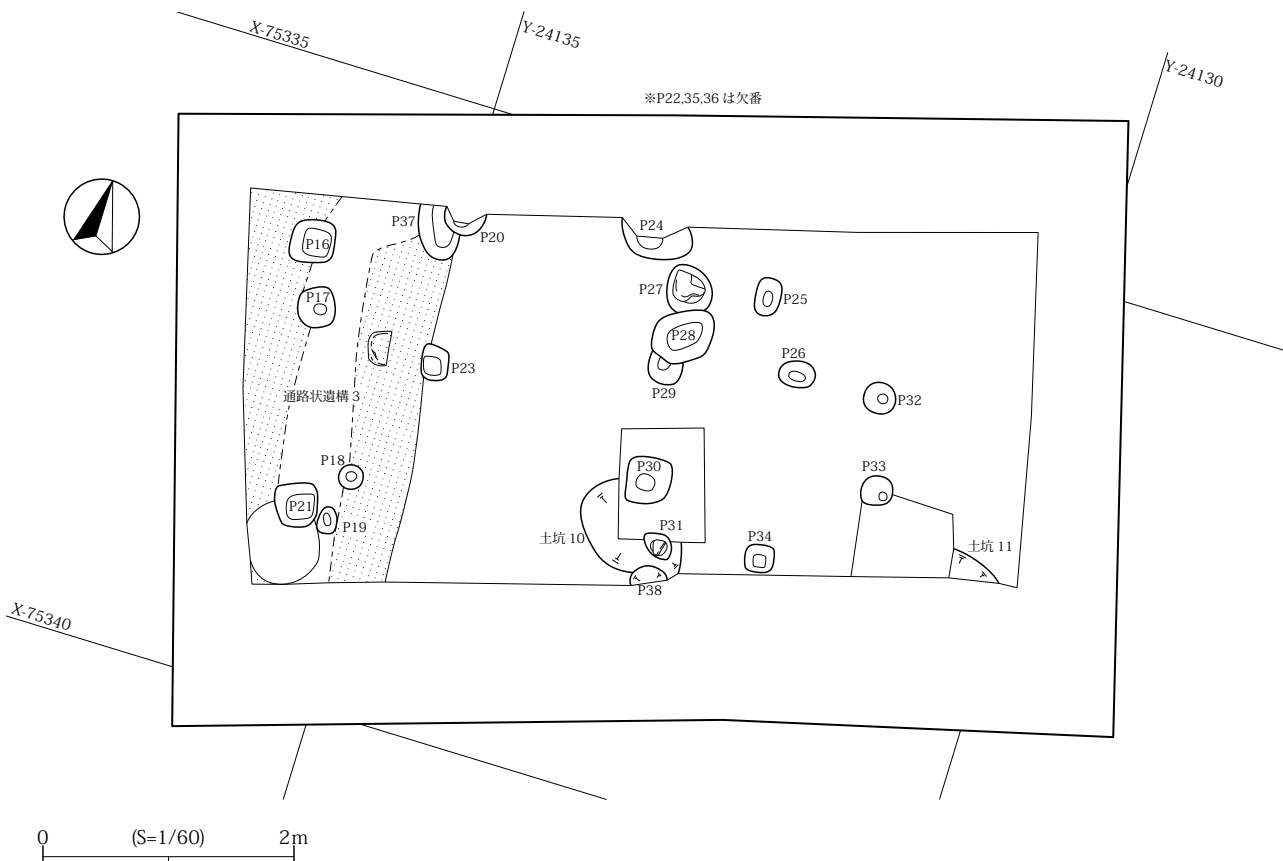


図 13 第 3 面全体図

焼土層が堆積していたが、焼土の純層ではなく暗褐色土が混交している状況であったため、別な場所から持ち込んで投棄したものと考えられる。下層には暗灰色粘質土が混交する炭層が堆積する。

土坑 9 (図 9)

調査区南西角部で検出された。本面調査時にプランを確認することができず、第 3 面調査時に検出したものであるが、調査区西壁の堆積土層を観察したところ本面に帰属するものであることが判った。平面形は略楕円形を呈する。規模は長軸約 70cm×短軸約 60cm、掘り込み面からの深さ約 50cmを測る。覆土は土丹粒・小ブロックを多量含む黒褐色土で構成される。

遺構外出土遺物 (図 10 ~ 12)

15 ~ 29 はかわらけ。15 ~ 17、23 ~ 29 はロクロ糸切り、18 ~ 22 は手づくね成形。30 ~ 39 は常滑甕。34 は肩部に楡目状の印判文、35 は胴部に菊花の印判文が押印される。40, 41 は常滑壺。42 ~ 44 は

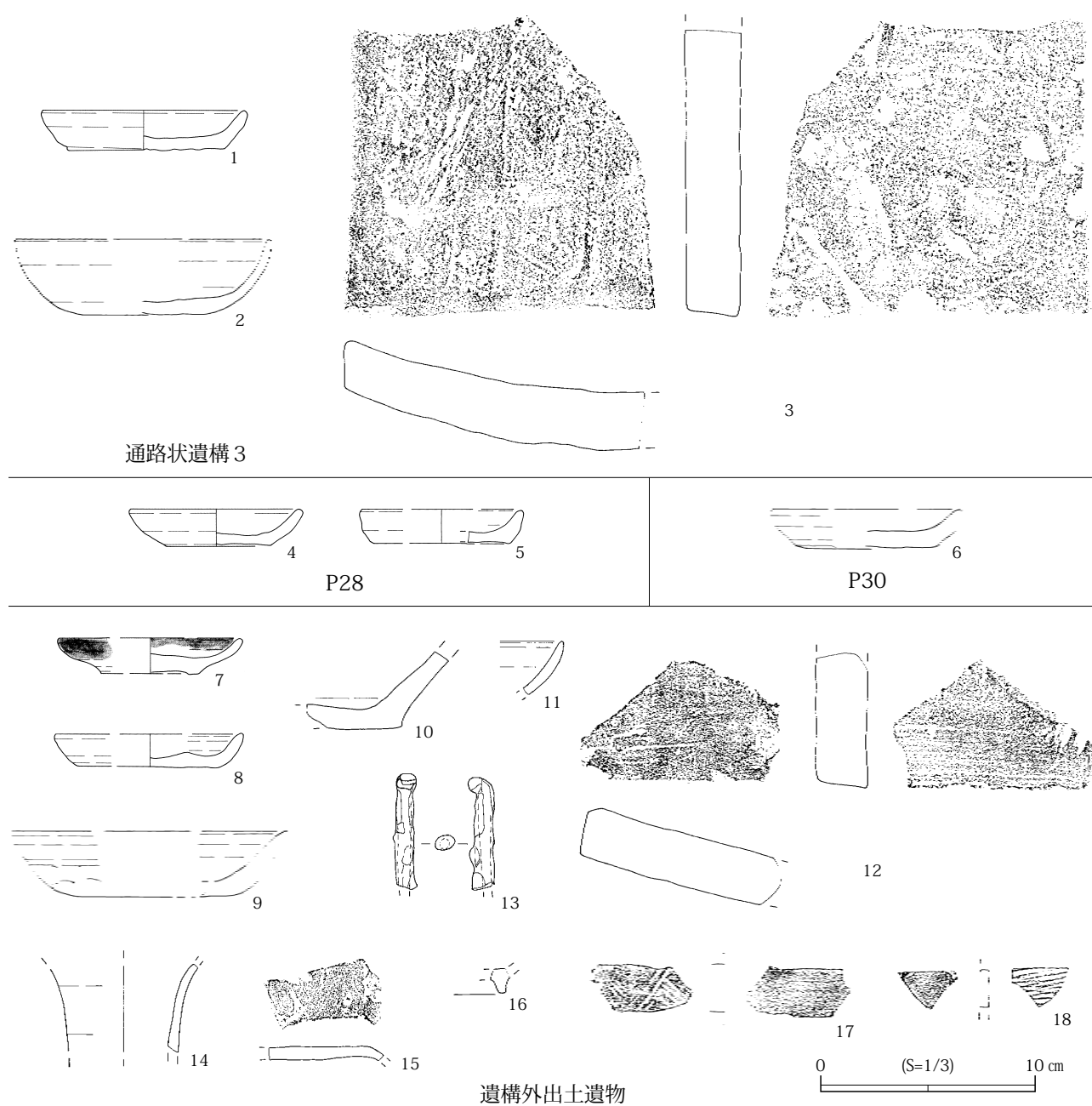


図 14 第 3 面出土遺物

山茶碗窯系片口鉢。45 は青白磁皿。46 は土師質火鉢。47,48 は鉄釘。49～53 は瓦。49～51 は平瓦、52,53 は丸瓦。

[第3面]

本面では通路状の土丹敷のほか、土坑2基・ピット20基を検出している。面構成土は、土丹粒・かわらけ片を少量含む締まり良好な黒褐色土となる。面標高は約12.1mを測る。

通路状遺構3 (図13,14)

調査区の西部を南北に延びる状態で検出された。調査区外西へ延びるため全体幅は不明であるが、少なくとも170cm以上を測る。路面標高は約12.2m。主軸方位はN-7°-Wを指す。土丹粒を密に含む土丹地業面である。本址では中央付近が溝状になるプランが確認されたが、これを切り込むピットの壁面などを観察しても溝となるような掘り込みが確認されなかった。後に調査区北壁で堆積土層を観察したが、やはり溝となるような掘り込みは確認されず、単にこの部分の地業がやや軟弱な様子であった。

1,2 はかわらけ。いずれもロクロ糸切り成形。3 は平瓦。

P28 出土遺物 (図13,14)

4,5 はかわらけ。いずれもロクロ糸切り成形。

P30 出土遺物 (図13,14)

6 はかわらけ。手づくね成形。

遺構外出土遺物 (図13,14)

7～9 はかわらけ。7,8 はロクロ糸切り成形。7 は内・外面に油煙付着し、灯明皿として使用されたもの。

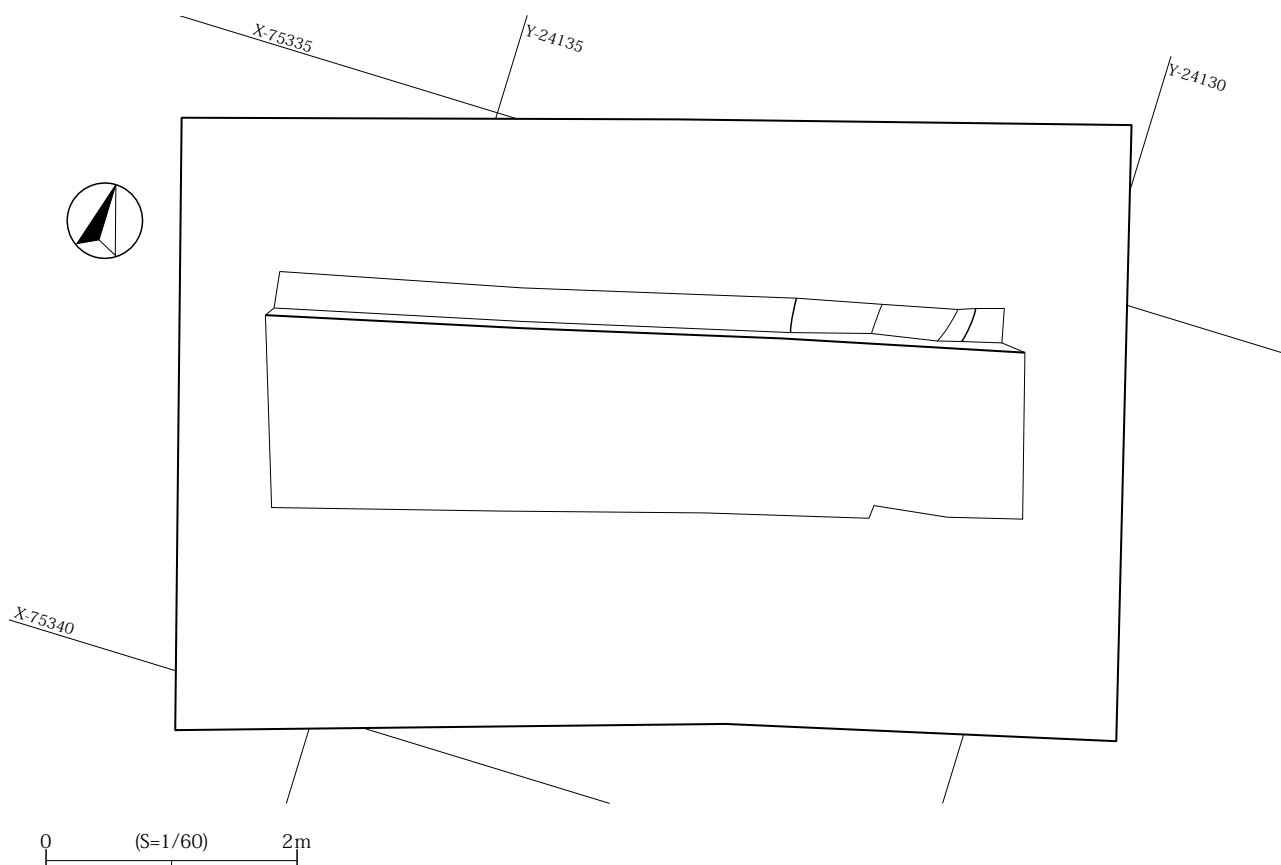


図15 第4面全体図

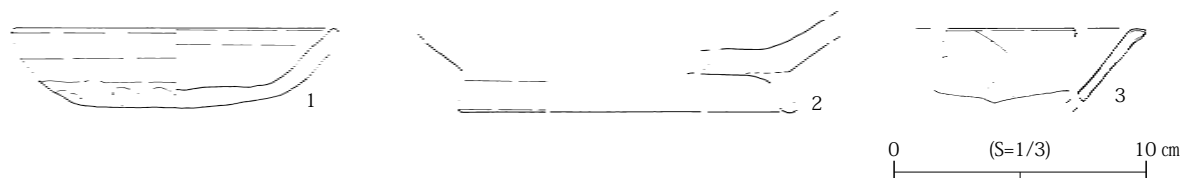


図 16 第 4 面遺構外出土遺物

9 は手づくね成形。10 は常滑片口鉢。11 は白かわらけ。12 は平瓦。13 は鉄釘。14 ~ 18 は須恵器。14 は瓶子の頸部片、15 は蓋、16 は坏の底部片、17,18 はいずれも器種不明の体部片。壺・甕類か。

[第 4 面]

本面は中世基盤層となる自然堆積層の上面であり、土丹粒を微量、褐鉄を多く含む締まり良好な黒褐色土で構成される。面標高は約 11.9 m を測る。

遺構外出土遺物 (図 16)

1 はかわらけ。手づくね成形。2 は山茶碗窯系片口鉢。3 は白磁端反り碗。

[深掘りトレンチ]

調査の結果、第 4 面では遺構が確認されなかった。その後、これより下層となる遺構の有無を確認する目的で調査区北壁に沿ってトレンチを設定し、深掘りを行ったところ、構成土中より古代の土師器・須恵器片が少量出土するものの中世遺物は皆無であり、本面が中世最初期にあたることが確認された。以下に古代遺構が存在するかトレンチ壁面で堆積土層を観察したが、谷地形あるいは窪地と思われる自然地形の落ち込みが確認されたのみで、人為的に掘り込んだと思われるような立ち上がりは確認されなかった。

図 17-1 は土師器坏の底部片。丸底を呈する。

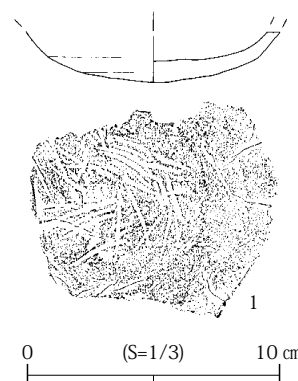


図 17 深掘りトレンチ出土遺物

表1 出土遺物法量表 1/2

No.	面	出土位置	種別	法量 (cm)			備考
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	
6-1	1	通路状遺構 1	土製品泥人形	長さ [6.8]	幅 4.6	厚さ 3.4	人体の意匠
2	1	土坑 1	かわらけ	(7.8)	—	1.4	手握ね
3	1	土坑 1	かわらけ	(9.2)	—	1.7	手握ね
4	1	土坑 1	かわらけ	(9.0)	—	1.6	手握ね
5	1	土坑 1	かわらけ	(13.4)	—	3.5	手握ね
6	1	土坑 1	青白磁碗	—	—	[2.6]	
7	1	土坑 1	白磁口元皿	(10.0)	—	[2.1]	
8	1	土坑 1	平瓦	長さ [12.5]	幅 [6.4]	厚さ 1.9	
7-1	1	遺構外	かわらけ	8.1	6.6	1.4	ロクロ
2	1	遺構外	かわらけ	8.2	5.9	1.5	ロクロ
3	1	遺構外	かわらけ	7.6	5.1	1.7	ロクロ
4	1	遺構外	かわらけ	(8.0)	5.0	1.4	ロクロ
5	1	遺構外	かわらけ	7.8	5.5	1.8	ロクロ
6	1	遺構外	かわらけ	(7.8)	5.6	1.5	ロクロ
7	1	遺構外	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.4	ロクロ
8	1	遺構外	かわらけ	(7.2)	(5.3)	1.4	ロクロ
9	1	遺構外	かわらけ	(8.4)	5.6	1.5	ロクロ
10	1	遺構外	かわらけ	(8.0)	5.2	1.5	ロクロ
11	1	遺構外	かわらけ	(7.4)	5.4	1.5	ロクロ
12	1	遺構外	かわらけ	(7.6)	5.0	1.5	ロクロ
13	1	遺構外	かわらけ	(7.4)	(6.2)	1.1	ロクロ
14	1	遺構外	かわらけ	12.2	7.9	2.9	ロクロ
15	1	遺構外	かわらけ	(12.4)	8.4	2.8	ロクロ
16	1	遺構外	かわらけ	12.7	7.6	3.2	ロクロ
17	1	遺構外	かわらけ	(12.0)	(7.0)	2.8	ロクロ
18	1	遺構外	かわらけ	(13.2)	(7.0)	3.0	ロクロ
19	1	遺構外	かわらけ	(12.8)	(8.0)	2.4	ロクロ
20	1	遺構外	かわらけ	(13.0)	(7.8)	3.1	ロクロ
21	1	遺構外	かわらけ	(13.6)	(9.0)	3.0	ロクロ
22	1	遺構外	かわらけ	(12.0)	(7.0)	3.0	ロクロ
23	1	遺構外	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.1	ロクロ
24	1	遺構外	常滑甕	—	—	[5.0]	
25	1	遺構外	常滑甕	—	—	[3.4]	
26	1	遺構外	常滑甕	—	—	[4.0]	
27	1	遺構外	常滑甕	—	—	[8.5]	
28	1	遺構外	常滑片口鉢	—	—	[6.5]	
29	1	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	—	—	[3.0]	
30	1	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	—	—	[3.9]	
31	1	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	—	—	[4.7]	
32	1	遺構外	瀬戸瓶子類	—	—	[3.7]	
33	1	遺構外	瀬戸瓶子類	—	—	[8.0]	
34	1	遺構外	青磁碗	—	—	[2.2]	内面画花文
35	1	遺構外	青磁碗	—	—	[3.8]	外面鎬蓮弁文
36	1	遺構外	青磁皿	—	(8.2)	[1.7]	
37	1	遺構外	白磁端反り碗	—	—	[3.2]	
38	1	遺構外	白磁口元皿	—	(6.8)	[0.7]	
39	1	遺構外	青白磁皿	(5.6)	(1.6)	1.2	内底面貼付文
40	1	遺構外	土製品泥人形	長さ [7.4]	幅 4.3	厚さ 2.2	人体の意匠
41	1	遺構外	土製品泥人形	長さ 5.2	幅 8.4	厚さ 3.7	台座か
42	1	遺構外	瓦質火鉢	—	—	[2.8]	
43	1	遺構外	土製品双六駒	長さ 1.9	幅 2.2	厚さ 0.8	
44	1	遺構外	石製品滑石鍋	長さ [5.2]	幅 [2.6]	厚さ 1.3	研磨に転用
45	1	遺構外	鉄製品釘	長さ 3.9	幅 0.5	厚さ 0.5	
46	1	遺構外	金属製品銭	直径 2.4	—	—	紹聖元寶
8-47	1	遺構外	平瓦	長さ [12.5]	幅 [9.6]	厚さ 2.2	
48	1	遺構外	平瓦	長さ [15.7]	幅 [5.8]	厚さ 2.4	
49	1	遺構外	平瓦	長さ [9.4]	幅 [7.7]	厚さ 2.3	
50	1	遺構外	平瓦	長さ [9.4]	幅 [9.1]	厚さ 2.0	
51	1	遺構外	平瓦	長さ [10.0]	幅 [12.5]	厚さ 2.4	
52	1	遺構外	平瓦	長さ [8.0]	幅 [10.0]	厚さ 2.6	
10-1	2	土坑 2	かわらけ	(9.0)	(7.4)	1.6	ロクロ
2	2	土坑 2	かわらけ	(8.4)	—	1.7	手握ね
3	2	土坑 2	かわらけ	13.5	—	2.8	手握ね
4	2	土坑 3	かわらけ	(4.2)	(2.6)	1.0	ロクロ、口縁部内折れ
5	2	土坑 3	金属製品銭	直径 2.4	—	—	元祐通寶
6	2	土坑 4	かわらけ	(13.8)	—	3.4	手握ね
7	2	土坑 4	常滑甕	—	—	[7.1]	
8	2	土坑 4	かわらけ円板	直径 9.8	—	1.4	かわらけ加工品
9	2	土坑 4	石製品滑石鍋	長さ [3.5]	幅 [3.2]	厚さ 1.5	

表2 出土遺物法量表 2/2

No.	面	出土位置	種別	法量 (cm)			備考
				口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)	
10 - 10	2	土坑 6	かわらけ	(9.0)	(6.2)	1.8	ロクロ
11	2	土坑 6	かわらけ	(8.4)	—	2.0	手捏ね
12	2	土坑 6	白かわらけ	(12.4)	—	[2.8]	手捏ね
13	2	土坑 6	石製品硯	長さ [7.4]	幅 5.1	厚さ 1.1	
14	2	土坑 7	常滑甕	—	—	[5.1]	
15	2	遺構外	かわらけ	8.2	5.7	1.6	ロクロ
16	2	遺構外	かわらけ	7.8	6.1	1.5	ロクロ
17	2	遺構外	かわらけ	7.9	5.7	1.4	ロクロ
18	2	遺構外	かわらけ	(9.6)	—	1.5	手捏ね
19	2	遺構外	かわらけ	(9.0)	—	1.6	手捏ね
20	2	遺構外	かわらけ	(8.8)	—	1.5	手捏ね
21	2	遺構外	かわらけ	(8.2)	—	1.7	手捏ね
22	2	遺構外	かわらけ	(9.2)	—	1.8	手捏ね
23	2	遺構外	かわらけ	(12.2)	(8.4)	3.1	ロクロ
24	2	遺構外	かわらけ	(13.4)	(8.2)	2.9	ロクロ
25	2	遺構外	かわらけ	(12.0)	(8.4)	2.8	ロクロ
26	2	遺構外	かわらけ	(12.8)	(8.2)	2.8	ロクロ
27	2	遺構外	かわらけ	(12.8)	(9.0)	3.1	ロクロ
28	2	遺構外	かわらけ	(12.8)	(7.8)	3.0	ロクロ
29	2	遺構外	かわらけ	(12.8)	(8.3)	3.1	ロクロ
11 - 30	2	遺構外	常滑甕	(42.0)	—	[10.4]	
31	2	遺構外	常滑甕	—	—	[4.5]	
32	2	遺構外	常滑甕	—	—	[2.7]	
33	2	遺構外	常滑甕	—	—	[4.7]	
34	2	遺構外	常滑甕	—	—	[6.5]	肩部櫛目状印判文
35	2	遺構外	常滑甕	—	—	[21.5]	体部菊花印判文
36	2	遺構外	常滑甕	—	(15.0)	[5.5]	
37	2	遺構外	常滑甕	—	—	[6.9]	
38	2	遺構外	常滑甕	—	—	[4.1]	
39	2	遺構外	常滑甕	—	—	[13.6]	
40	2	遺構外	常滑壺	—	—	[16.5]	
41	2	遺構外	常滑壺	—	(6.0)	[3.3]	
12 - 42	2	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	(29.0)	—	[8.7]	
43	2	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	—	—	[5.3]	
44	2	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	—	(14.2)	[6.2]	
45	2	遺構外	青白磁皿	—	—	[0.8]	
46	2	遺構外	土師質火鉢	—	—	[3.2]	
47	2	遺構外	鉄製品釘	長さ [5.8]	幅 [0.8]	厚さ [0.9]	
48	2	遺構外	鉄製品釘	長さ [5.9]	幅 [0.6]	厚さ [0.6]	
49	2	遺構外	平瓦	長さ [10.8]	幅 [9.0]	厚さ [2.0]	
50	2	遺構外	平瓦	長さ [4.9]	幅 [12.9]	厚さ [2.0]	
51	2	遺構外	平瓦	長さ [8.3]	幅 [10.8]	厚さ [2.1]	
52	2	遺構外	丸瓦	長さ [12.4]	幅 [8.1]	厚さ [2.1]	
53	2	遺構外	丸瓦	長さ [13.7]	幅 [7.0]	厚さ [2.0]	
14 - 1	3	通路状遺構 3	かわらけ	9.6	7.2	1.8	ロクロ
2	3	通路状遺構 3	かわらけ	(12.0)	5.6	3.5	ロクロ
3	3	通路状遺構 3	平瓦	長さ [13.2]	幅 [14.0]	厚さ [2.5]	
4	3	P28	かわらけ	8.1	4.8	1.7	ロクロ
5	3	P28	かわらけ	(7.6)	(6.2)	1.6	ロクロ
6	3	P30	かわらけ	(9.0)	—	1.8	手捏ね
7	3	遺構外	かわらけ	(8.6)	(4.6)	1.6	ロクロ、口縁部油煙付着
8	3	遺構外	かわらけ	(8.8)	(6.8)	1.5	ロクロ
9	3	遺構外	かわらけ	(12.8)	—	3.0	手捏ね
10	3	遺構外	常滑片口鉢	—	—	[3.6]	
11	3	遺構外	白かわらけ	—	—	[2.5]	
12	3	遺構外	平瓦	長さ [5.6]	幅 [9.1]	厚さ 2.4	
13	3	遺構外	鉄製品釘	長さ [5.2]	幅 [0.8]	厚さ [0.8]	
14	3	遺構外	須恵器瓶子	—	—	[4.0]	
15	3	遺構外	須恵器蓋	—	—	[0.7]	
16	3	遺構外	須恵器坏	—	—	[1.1]	
17	3	遺構外	須恵器器種不明	—	—	[2.2]	
18	3	遺構外	須恵器器種不明	—	—	[1.8]	
16 - 1	4	遺構外	かわらけ	13.0	—	3.1	手捏ね
2	4	遺構外	山茶碗窯系片口鉢	—	(13.4)	[3.6]	
3	4	遺構外	白磁端反り碗	—	—	[2.9]	
17 - 1	4下	遺構外	土師器坏	—	—	[2.0]	

第六章 まとめ

今回の調査では計4面の調査を行ったが、中世基盤層となる第4面では遺構が検出されず、生活痕跡を残す遺構面としては計3面となる。第1～3面まで、いずれの面においても調査区西部を南北に延びる通路状の土丹敷が検出されており、それより東側の生活面は軟弱な地業面上より掘り込まれた土坑類が目立つ状況となっている。

出土した中世遺物は全体的に見て13世紀前半～14世紀代に至るものと思われる。遺物としてはかわらけが最も多く、次いで常滑窯産の甕片が多く出土している。そのほかの国産・舶載陶磁器類や石製品、金属製品も少量出土しているものの、かわらけ・常滑製品を含め、完形で出土しているものはわずかであった。出土遺物から比定される各面の年代観は、第1面が13世紀後半～14世紀代、第2面が13世紀後半、第3面が13世紀中葉～後半、第4面が13世紀前半～中葉と考えられる。

第4面調査時に設定したトレンチで中世基盤層以下の状況を確認したところ、谷地形あるいは窪地のような自然地形と思われる落ち込みが確認されている。本調査地の北方を西流する二階堂川は、本調査地点のすぐ北側で一度南へとU字型に膨らむが、第4面で検出された落ち込みが北方に向けて開口する谷であれば、これに沿って二階堂川が南へ膨らんだ可能性があるだろう。この落ち込みの埋没土中には、土師器・須恵器片は少量含むが中世遺物が皆無であることから、中世に至る以前の段階でこの古地形はおおよそ埋没したものであると思われる。出土した土器はいずれも体部片・細片で、詳しい年代は判らなかった。また、第4面では遺構が検出されず、この上層にも中世遺物を含むものの自然に埋積したと思われる層が堆積していることから、鎌倉時代前期のある段階まではそれほど積極的に土地利用がされていないようにも感じられた。中世に至っても谷地形あるいは窪地のような地形が残り、しばらくは生活に適さないような環境であったのかもしれない。

今回の調査では建物を構成するようなピットの配列なども認められず、検出されたのは通路状の遺構のほか土坑類が主であり、遺跡の性格については判然としない。本調査地点より東側の第二小学校用地の調査では、屋敷地と思われる掘立柱建物跡などの遺構群が多数検出されており、これと対照的に南側の県道204号金沢鎌倉線付近の調査では町屋と思われる方形竪穴建物跡が検出されている。また、北側と西側は二階堂川によって限られており、周辺遺跡の様相から本遺跡地の性格を推定するにも資料はまだ不足していると言わざるを得ない。今後のさらなる調査成果の蓄積が待たれるところである。



1. 調査地現況 (南から)



2. 現代攪乱確認状況 (東から)

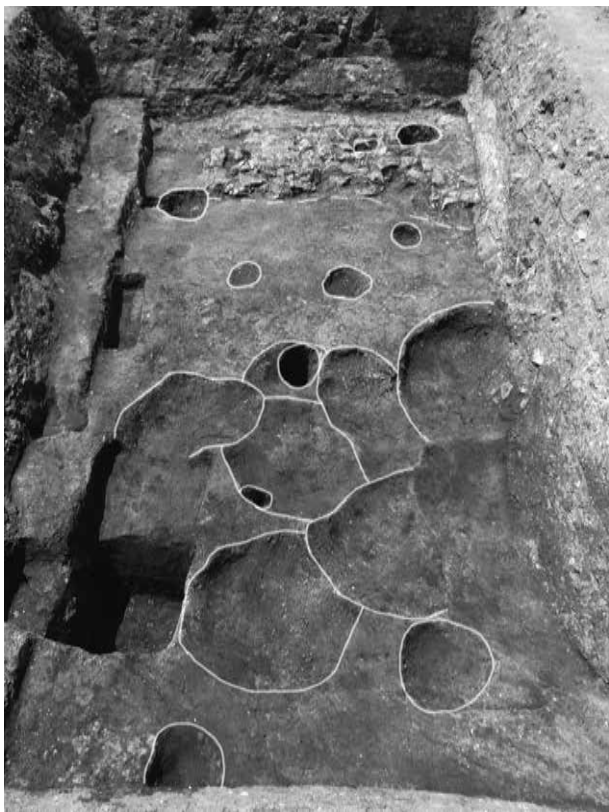


3. 第1面全景 (東から)

4. 第1面 通路状土丹敷 (南から)



図版2

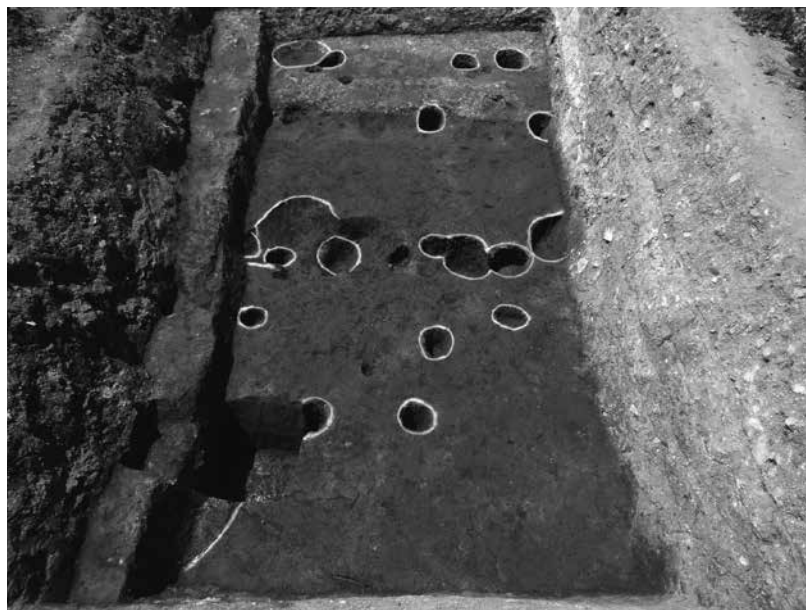


1. 第2面全景（東から）



2. 第2面 通路状土丹敷（南から）

3. 第3面全景（東から）



4. 第3面 通路状土丹敷（南から）

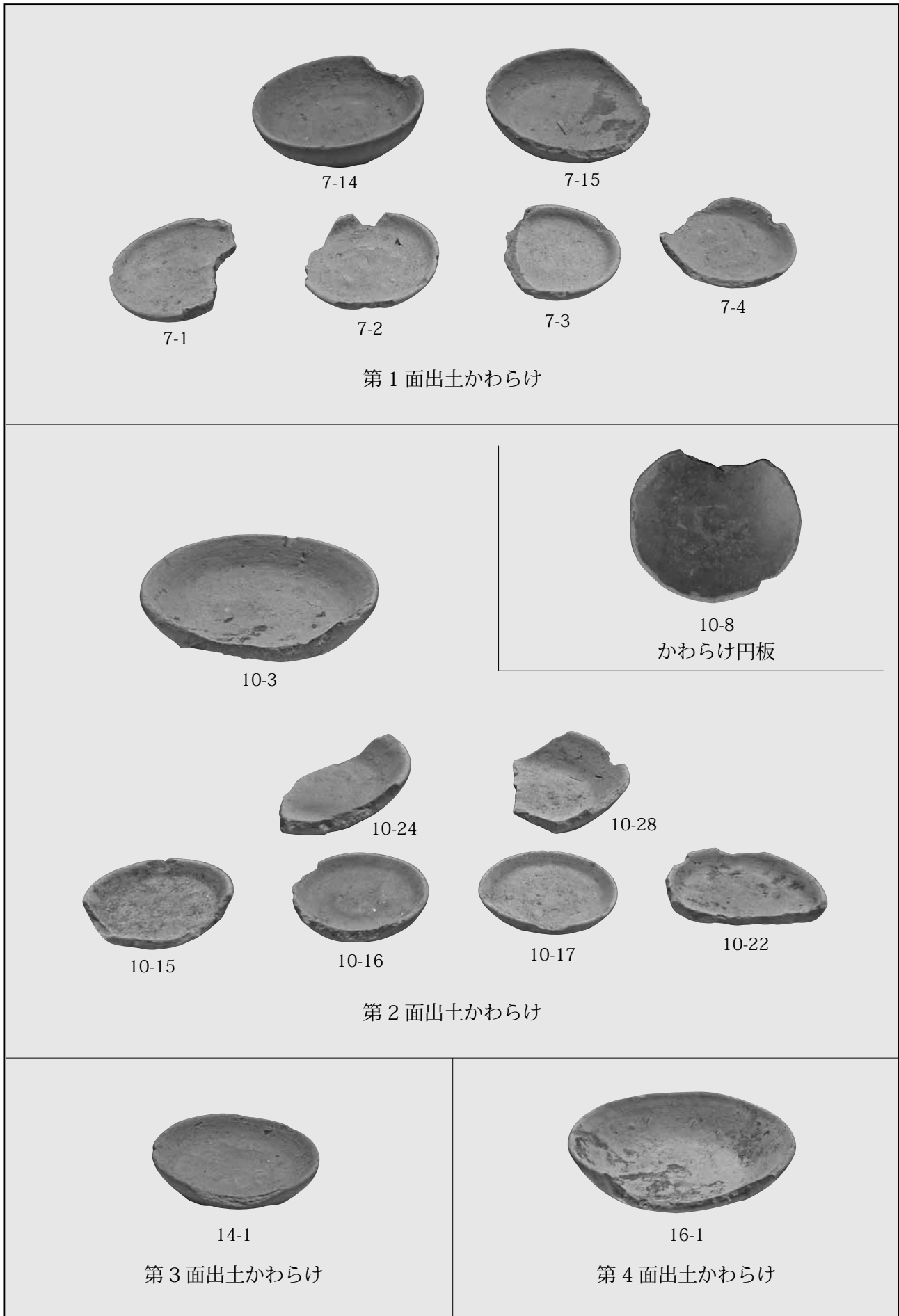


1. 第4面全景（西から）

2. 調査区北壁堆積土層（南から）



3. 調査区西壁堆積土層（東から）



出土遺物(1)



7-24



7-25



7-26



7-28

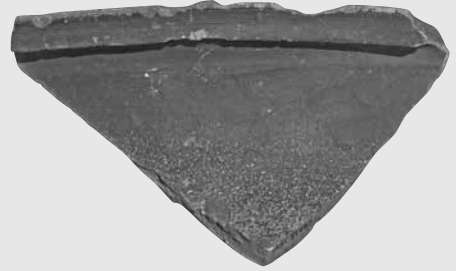
第1面出土常滑製品



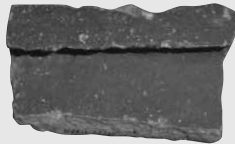
10-7



10-14



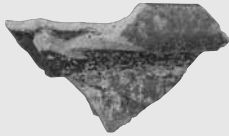
11-30



11-31



11-32



11-33



11-35



11-40

第2面出土常滑製品



14-10

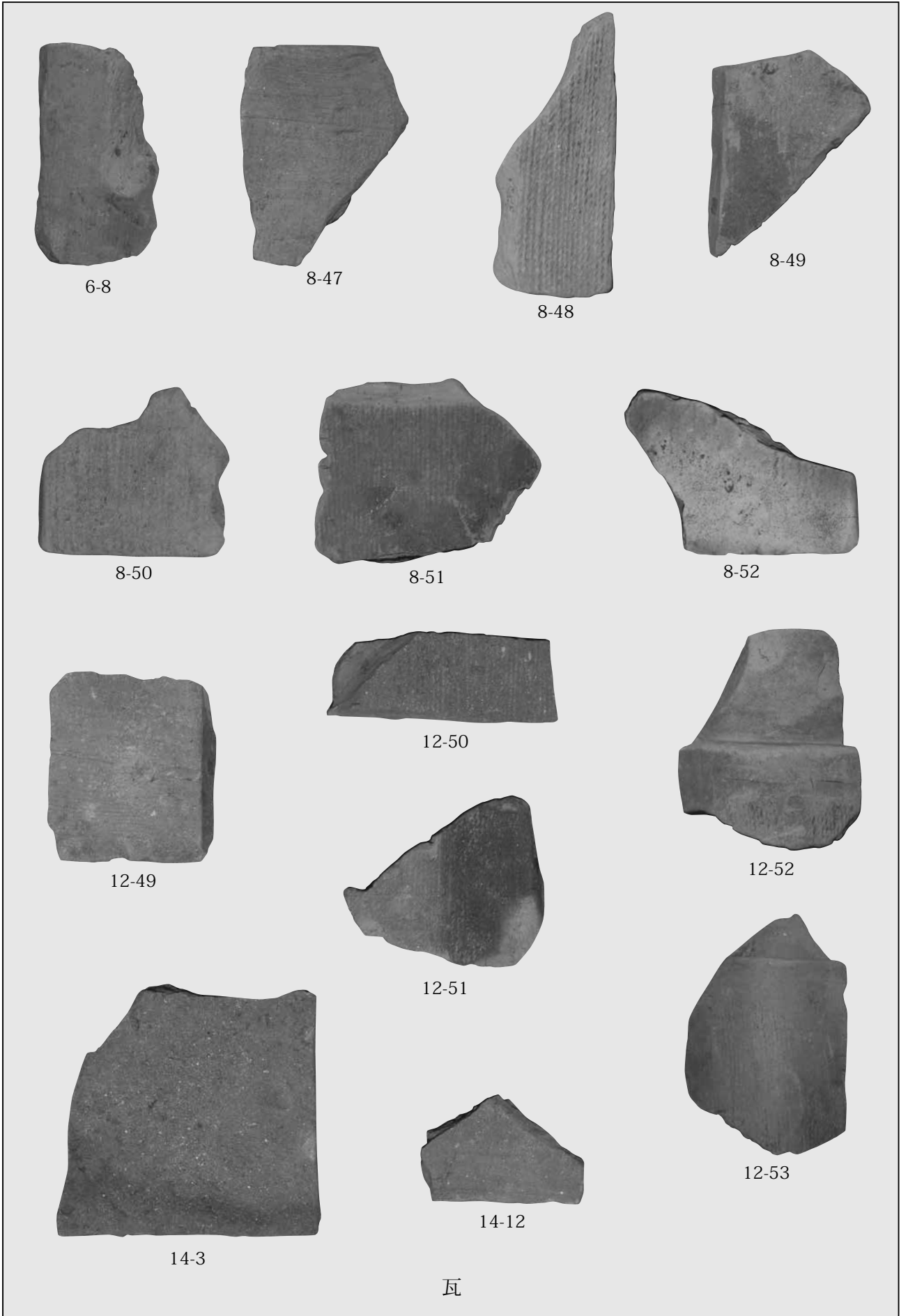
第3面出土常滑製品

出土遺物(2)

図版6



出土遺物 (3)



瓦

出土遺物 (4)

